
くるくる

こたろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くるくる

【Nコード】

N0146S

【作者名】

こたろー

【あらすじ】

季節もまわれば人生もまわる。くるくるまわって、幸せこいこい！とある理由で引越しを決めた戸塚めぐみ。引っ越し先は、まだ真新しい四部屋しかないアパートだった。そのアパートのくせのある住人と、王子様オーラを放つ大家さん。彼らとの楽しい生活が幕を開ける！ラブコメです。ヒロイン、その他住人の性格が崩壊してます。ご注意ください。＊ブログと同時掲載しております。

1話 新居

くるくる、まわれ。私の人生、くるくるまわれ。

悲しい経験は全て忘れて、新しい私の人生を始めよう。

くるくる、くるくる。良いほうに転がっておくれ。

ただ全てを忘れてしまいたくて、ここには居場所がなくて、少しの荷物だけを持って家を飛び出した。

誰も知らない自分を知らない場所へと向かったけれど、あまり遠いところには行けなくて。自分の弱さを思い知る。

親に、友人に、恋人に、自分の居場所を知られたくなくて、ひっそりと今住んでいる家から引っ越したのだ。

まだ肌寒さの残る三月の日曜日、新しい家に引っ越してきた。そこはまだ真新しいアパートで、新築特有の匂いがする。

南欧風の建物は部屋数がたった四つという少なさで、最上階の三階は大家さんが住んでいる。

最初にこのアパートに引っ越してきたのは、私、戸塚めぐみだ。

私の部屋は二〇二号。

引越し業者が次々と荷物を部屋に運びいれ、私はあれはこっち、これはこっちと指示を出す。元々荷物は多くないので、引越しはあっという間に終了した。あとは細々した物を整頓すればいいだけだ。数個のダンボールのガムテープを一気に引き剥がし、中身を部屋にあるクローゼットにしまっていく。八帖という広さの部屋には似つかわしくないほど大きなクローゼットがあり、キッチンとお風呂

トイレがある。まあ、ワンルームだけど一人暮らしには丁度良い広さだと思う。広いと掃除も大変だし、それに……寂しいから。ある程度片付け終わったところで玄関の扉を、とんとん、と叩く音がする。インターホンがあるというのに、なぜノックなんだ。引越し作業でくたくたなのに、扉の向こうの人を無視するわけにもいかず、私は重い腰を上げた。

「はい」

扉を開くと、そこに立っていたのは……ん！？ 王子様ですか！？ と、うっかり言ってしまういそうなほどの美しい男性だった。

「こんにちは。少し、よろしいですか？」

にこり、と美麗な微笑みを浮かべる男性は、前に一度会った事がある。何度会っても、この人の王子様オーラは健在だ。

彼の名は美影利人、このアパートの大家さん。みかげりひと

「大家さん、お久しぶりです」

「大家さんだなんて、寂しいので名前でもうぞ呼んでくださいね？ めぐみさん」

ま、まぶしい。きらきらした笑顔を振りまいてはいけません！ 無駄にフェロモンを垂れ流さないように、何卒お願いします！

太陽を浴びてキラキラ光る栗色の髪は肩に届くほど長く、優しく細められた瞳は、開くと驚くほど力強い。すらりと通った鼻筋に口角が上がった薄い唇。全体的に色白だけど、背は百八十以上あると思う。頭の上に王冠を載せたら、ほーら！ 王子様の出来上がり！ ……冗談はここまでにしよう。

「えっと、美影さん、でいいですか？」

「美影、だと私の祖母も美影なので被ってしまいます。どうぞ『利人』お呼びくださいね」

美影、いや。利人さんはお祖母さんと二人暮らし。詳しいことは知らないけれど、利人さんはずっとお祖母さんと二人だと言っていた。お祖父さんは十年くらい前に亡くなってしまったらしく、以来ずっと二人で暮らしている。お祖母さんは「たえさん」と言っていて、いつもにこにこしている小さくて可愛いおばあちゃんだ。その人のことは「おたえさん」と呼ぶことになっている。

ん？ だったら別に利人さんと呼ばなくてもいいような気がするけど……まあ、いっか。

このアパートに越してくる際、大家さんに一度会っている。ここは部屋数も少ないし、最上階には自分達が住むので住人のことを知っておきたい、というのが大家さんの言い分だった。そんなわけで、こういう経緯でここに越してくるようになったのかとお話をしたのだ。

だから、利人さんは私がここに越してきた理由も知っている。

「めぐみさん、どうですか？ 荷解きは終わりそうですか？」

利人さんの神々しい微笑みに一瞬言葉を失いかけたけれど、変な女だと思われてはいけない。私は同じように、にこりと微笑み返して返事をした。

「はい。荷物もそんなに多くはないので、もう少しで終わりそうです」

「そうですか。よかったらお手伝いさせていただこうかと思ったのですが」

「いえいえ。利人さんの手を煩わせるわけにはいきませんので！」

白く長い指は、手タレかと思うくらい美しい。そんな美しい手に、傷なんてつけた日には……自分を呪い殺してしまう。

見れば見るほど素敵な男性の利人さんは、まさに理想の男性像そのものだ。

男臭い男性は実はちょっと苦手。なんとなくこう、少し清潔感溢れる感じの男性が好きな私は、利人さんにすっかり心を奪われていた。

これからの生活が、楽しみだ！　なんて浮かれていると、一台の引越ストラックが騒々しい騒音を立てながらマンションの敷地内に止まった。

「おや。また入居者の方がいらっしゃったようですね」

二階廊下から外を見ると、トラックの後方から物凄い音を立てて敷地内にやってくるバイクが見える。そしてその五月蠅いエンジン音が静かになり、バイクに跨っていた男性がフルフェイスのヘルメットを軽やかに脱いだ。

きらりと光る金髪にグレーの瞳。真っ黒なライダーズジャケットにオレンジのマフラーを巻いている。

利人さんと並んでバイクの男性を見ていたら、私達の視線に気がついたのだろう。下にいる男性の目線がゆっくりと上がってきた。

「あ。こんにちはー！　俺、今日からこの一〇一号室にお世話になります、たちばなともや立花友哉たちばなともやっていいいます。宜しくお願いします！」

見た目は怖そうな感じだけれど、笑った顔は向日葵みたい。人を惹きつける笑顔をするんだなあ、というのが私の第一印象だ。

気がついたら隣にいた利人さんはいつのまにか消えていて、下にいる男性の横にすでに立っていた。私も慌てて下に降りていったが、

別に私が急ぐ必要はない。同じアパートの住人として挨拶するくらいなら、引越しの邪魔にはならないだろう。そう思って、ひとつ咳払いをして階段を静かに降りていったのだった。

2話 住人、揃いました

利人さんと並んで話すバイクの立花さんは、背の高い利人さんと同じくらい背が高くて、百五十センチに満たない私の身長では見上げないとこの笑顔は見えない。

目が合うと、優しい陽だまりのような微笑みを返す立花さん。思わずこちらもつられて微笑み返してしまう。

「ああ、こちらは二〇二号室に入居された戸塚めぐみさんです」

利人さんがさりげなく私の背に手を当てて、立花さんに紹介してくれた。本当は自分から自己紹介しなくてはいけないのに、何と声をかけたらいいのか躊躇ってしまった。思わぬ助け舟に、少しだけホッとしている自分がいる。

「あの、戸塚です。宜しくお願いします」

「……」

「あの、立花さん？」

「え！？」 ああ、すみません！ こちらこそ宜しく、えっと、めぐみちゃん」

いきなり名前で呼ばれるとは思わなかった。でも、「めぐみちゃん」ならいいや。「めぐちゃん」と呼ばれなければそれでいい。

呼び方一つ、仕草一つ、まだ強く記憶に残っている「アノ人」の全て。早々に記憶から消してしまいたいのに、私の中に根を張っていて、ちよつとやそつとでは消えてくれそうもない。記憶を消せる消しゴムがあればいいのに。

立花さんは引越し業者さんから声をかけられ、そのままその場か

ら離れていった。その場に残された私と利人さん、そして立花さんのバイク。利人さんは立花さんの部屋へ向かい、私はその場にある大きなバイクにそっと触れた。

「凄く大きいなあ」

これは大型バイクのかな。こんなに間近に見るのは初めてかもしれない。ピカピカに磨かれている銀色のバイクには、立花さんが作ったのかオリジナルのステッカーが貼られていて、バイクへの愛情を感じる。

それにしてもこんな大きなバイク、私じゃとても乗れないだろうな。きつと足が届かない。

自分がバイクに跨っている姿を想像してみると、なんとも無様すぎて自分で自分の姿に笑ってしまいそうだ。

「バイク、好きなの？」

「え!？」

突然後ろから声を掛けられて、バイクに触れていた手をパツと離す。でも、声を掛けた立花さんは嫌な顔をするどころかにこりと微笑んで、私のすぐ隣にやってきた。

「バイクに興味があるとか？」

「えっと、いや。こんなに近くで見るのが初めてなもので」

「今度、後ろに乗ってみる？」

「……えっと、それは」

流石に怖い。

昔から絶叫マシンなどの類は苦手。だからバイクもきつと苦手な筈だ。でも、こんな風に言ってもらえるのは嬉しくて、本当はちょ

っただけ後ろに乗ってみたいなあと思っている。

私は「いつか」と立花さんに答えて、自分の部屋に戻っていった。部屋に戻ってから再び細々した物を整頓し、ひとまず生活できるくらいまで部屋は整った。

この部屋には大きな窓があり、一人暮らしにはもったいないくらいのベランダがある。大きな窓を開き風を部屋に入れると、そこから私が住む街並みがよく観える。

緑が多いこの町は、これから私にどんな希望をくれるのだろうか。ここからの景色を眺めながら、私はどこかワクワクしていたのだった。

どこか遠いところから、何か音が聴こえる。それが何の音なのかわからず、ただボーっとした頭で聞き流していた。でも、音はちっとも鳴り止まない。それどころかドンドン、と強く何かをノックする音も聴こえる。仕方ない、何の音か確かめに行かなくちゃ、そう思った瞬間だった。

「ああ、驚きました。生きてますよね？」

物凄く近いところに利人さんの顔がある。

え、え、え。これは何。夢？

考えが纏まらないまま利人さんの端正な顔立ちをしげしげと見つめてしまう。美形は目の保養……なんて思っている場合ではない。

「りっ……!」

利人さん、と言えないまま起き上がり、利人さんの額に思い切り頭突きをかましてしまった。痛みに悶え苦しみながら床に蹲る利人

さんに困惑しながら、私の今の状況を整理した。

確か、窓からの眺めを見ているうちに何となく眠くなって、ベッドでごろりと横になった。そこまでは覚えている。あれはまだ明るい午後一時くらいだったはず、なのに！ 窓の外はすっかり暗くなってしまう、部屋の明かりも消えている。カーテンも閉めず、明かりも点けず、ストーブも点けず、でも私が部屋から出てきた様子はない。それで心配して利人さんが来てくれた、ということらしい。

「ご迷惑をおかけしました」

「いやいや。無事ならいいんですよ」

赤くなった額を手のひらで擦りながらも、優しく微笑む利人さんを見ていたら涙が滲みそうだ。あまりの情けなさで恥ずかしさで、塩水が目から溢れちゃう。

ベッドから立ち上がり利人さんの後ろについて玄関を出て行くと、そこには見知らぬ二人の男女がいた。

一人は少し年上に見える、しおらしい女性。真っ直ぐな黒髪に傷みはなく、微笑む姿は桜のようにも見える。儂げな印象だ。

もう一人は年下だろうか、黒縁スクエアのめがねを掛けた男性だ。ぷい、とそっぽ向き、視線を合わせようとしない。

利人さんが私に視線を向けながら、不安がらせないようにひと言添えた。

「彼らも今日からここに住むことになります。さあ、これで全員揃いましたね」

利人さんの眩しい笑顔に月光が降り注ぐ。その影で、つまらなそうな冷めた視線が、ゆっくりこちらに向けられた。

3話 全員、集合！

眼鏡の奥の、冷たい瞳。温かみも何も感じられない、ガラス玉のようにさえ思える。

影に隠れて、闇に紛れて、けれどなぜか強くその瞳に惹かれてしまった。

「めぐみちゃん、どうしたの？」

「え？ あ……いえ」

冷たい瞳を遮るように立花さんのあたたかな瞳が向けられると、なぜだかわからないけれどホッとした。

体の芯から冷えてしまいそうな瞳に射すくめられてしまったのは、きっと今まであんな瞳を見た事がなかったからだ。きっとそうに違いない。

首を横に振り、彼の視線を振り切るように利人さんに声を掛けた。

「えっと、どうして皆さんお揃いなんですか？」

「ああ、これから引越祝いをしようよ、皆さんを私がお誘いしたのですよ。折角こうして同じ日に引越してこられたのですから、住人の顔を知っておくのに良い機会ではないかと思ひましてめぐみさんもいらっしゃいませんか？」

そっと私の肩に利人さんの手が触れると、胸がとくとくと高鳴るのがわかる。

見上げれば利人さんの優しい顔と、紳士的な仕草が目に入る。これが私の理想の男性像。だから胸が高鳴るのは自然なことだ。でも、あの冷たい瞳に見つめられた時、ふいに大きく胸が鳴ったのは一体なぜなの？

結局その答えは見つからないまま、私達は最上階の利人さんの家にお邪魔することになった。

利人さんの家に入ると、玄関から突き当たりにあるリビングには沢山のお料理が並べられていた。綺麗にお花も活けられていて、花の香りが部屋一杯に広がっている。

埃一つ見当たらないほど磨かれたフローリングの床に、高級そうなふかふかの絨毯が心地良い。利人さんは綺麗好きだということがすぐにわかった。

キッチンからはグラスを持った着物姿の女性が、穏やかに微笑みながらやってきた。彼女が利人さんのお祖母さんである、おたえさんだ。

「さあ、いらっしゃい。お腹空いたでしょう」

おたえさんはにこりと微笑みながら、孫をあやすように私達を手招きする。若草色の着物の袖を通し、しゃん、と背筋を伸ばして歩く姿は高齢とは思えないほど若々しく、おたえさんの顔を見ているだけで心が和む。

ここのアパートを契約する時に、おたえさんも同席していた。その時、おたえさんが私をリラックスするようにと、優しく背をなでてくれたのをよく覚えている。まるで本当のおばあちゃんのような彼女の存在に、めいっぱい緊張していた私はとても助けられた。

みんなが席に着き、グラスにお酒を注がれていく。乾杯をして料理を食べたら、そこで初めてお腹が空いていたことに気がついた。

笑顔溢れる食卓に、私達は初めて会ったとは思えないほど話が弾んでいた。美味しい料理に美味しいお酒、そして楽しい会話。これが揃っている食卓が楽しくないわけがない。

「ところでめぐみちゃんは何歳なの？」

ちょっと酔っ払っているのか、少しよれた声で立花さんが話しかけてきた。ありやりや、顔も赤い。

「私は二十三です。立花さんは？」

「俺は二十六だよ。結構みんな年が近いんだね」

そうなのだ。さっき初めて会った二人も二十代だ。

そめやみなみ
染谷美波さんは二十七歳、一〇二号室に入居した。真っ直ぐなさらさらストリートがとてもよく似合っていて、なんだか凄くいい匂いがする。お花の香りに包まれた、お人形のように綺麗な人だ。もう一人のあの冷たい瞳が印象的な男性は、やっぱり年下だった。

彼の名前は^{だいぢりつ}大地律、二十歳の大学生だ。

大地くんはあまり人と上手くやっていけないのではないかと、どこかで思っていたけれど、アパートの住人と普通に会話をしていた。もしかしたらさっき冷たいと感じた瞳は、見間違いだったのだろうか。今も立花さんと一緒に話をしているし、あ、ほら。笑った。やっぱりさっきのアレは、見間違いだったのかもしれない。

大地くんの冷たい瞳のことなどすっかり忘れて、私は利人さんや染谷さんとお酒を呑みながら談笑していた。でも本当はお酒は苦手。軽く一、二杯くらいなら大丈夫だけど、こんなに呑んだのは久しぶりだ。かなり気持ち悪いけれど折角の楽しい場に、水を差すわけにはいかない。だから私は頑張って笑顔を作っていた。

大丈夫、大丈夫。気持ち悪いのなんて、すぐに消えちゃうから。

自己暗示をかけるように何度も心の中で「大丈夫」と呟く。これは昔からの私の癖だ。「大丈夫」と自己暗示をかけて、今まで大抵の場面は切り抜けてきた。だから今回もきっと大丈夫。

しかしこのまま呑んでいては、気持ち悪さばかりが増してきちゃう。そこで私は空いたお皿をキッチンへと運んだり、たまってきたお皿やコップを洗ったりすることにした。

「あらあら、いいのよ。洗い物くらい私がやるから」

おたえさんが腕まくりをしている私に声をかける。けれど、すでにスポンジに泡を立ててしまった私はそのまま首を横に振り、できる限り明るい声でおたえさんに話した。

「大丈夫です。だって沢山ご馳走になったし、これくらいなら私にもできるので」

「めぐみちゃん、ありがとうね。じゃあ、ここにある分だけお願いするわね」

「はい！ まかせてください」

おたえさんはにこにこしながらリビングへと戻っていった。その後姿を見て、ホッと息をついたのだった。

かちやかちや、と食器の音を立てながらすすいと、水がひんやりとして火照った体温を下げてくれる。すると不思議なもので、気持ち悪かった気分が少しずつ回復するのがわかる。こうして洗い物を済ませ手近なタオルで手を拭いていると、パーカーのポケットで静かに携帯が震え始めた。水気を拭き取った手で携帯を取り、着信画面を見る。そこには、もう二度と見たくはない名前が表示されていた。

「……どうしてほっというてくれないのよ」

携帯に向かって文句を呟くと、背後に気配を感じた。私は慌てて携帯を閉じ、それをポケットにしまいながら振り向くと、そこには大地くんが不機嫌そうに立っている。

「邪魔なんだけど」

不機嫌そうな表情に、不機嫌そうな声。そしてやっぱり見間違いなにかじゃなかった、あの冷たい瞳。さっきまで皆で楽しそうに話していた時のような、年相応の笑顔はそこにはない。綺麗で冷たいガラス玉から向けられる、射抜くような視線が私に突き刺さる。その視線は、私から動きを奪っていくのだった。

4 話 律

背筋が凍るような冷たい視線が私を射抜く。その視線に囚われたまま、言葉を口にすることができず、ただ突っ立っているだけだった。そんな私を見て、一つ小さく、けれど確実に私に聞こえるように舌打ちをする彼は、さらに不機嫌そうに私を睨みつける。

「邪魔って言ってるんだけど。日本語通じないの？」

「え、あ……ごめんね」

そそくさと横に体を避けると彼は冷蔵庫の扉を開き、中から数本のビールを取り出す。何か話しかけたほうがいいような気がして、当たり障りのない会話をしようと口を開いた瞬間、私よりも先に大地くんが口を開いた。

「アンタって何でそんなにオドオドしてるの？」

「オドオド？ 別にしてないけど」

「ふうん、あっそ。別に俺には関係ないからどうでもいいけど」

大地くんはそう言いながら、ビールを持ってキッチンから立ち去っていった。

なんだ、アイツ！？ 関係ないならそんなこと言わなきゃいいじゃない！

この時点で私の中で大地くんの評価は、最悪の位置に決定付けられた。はい、もう彼とは合わないとよくわかりました。ポケットの中で握っていた携帯が、ちょっとだけミシリと音を立てた歓迎会の夜だった。

結局、出された料理も用意されたお酒も全てを空にした私達は、

とても気分良く利人さんの家から出て行った。歓迎会の終わりの頃には、お互いの名前で呼び合うほど親睦を深めた私達は、そのノリで携帯の番号とアドレスも交換することに。友哉さんと美波さん、そして利人さんはとても和やかに赤外線通信をしあったのだが、律だけは完全に無表情。別に律の携帯の番号やアドレスなんていらなかったけれど、あの場で律の携帯番号だけいらない、なんて言ったらその楽しい雰囲気一台無しになってしまう。その事を恐れて、しぶしぶ交換したのだ。

利人さんの家を出て、みんなが自分の部屋に帰っていく。友哉さんと美波さんは一階へ、私と律は二階だ。

納得いかない！　なんで律が隣の部屋なのよ！

内心文句は溢れるほどあったけれど、あくまで隣人だ。あまり文句を言うのも大人気ないし、何より彼は私より年下だ。ここは大人として寛大な心を持って……。

「なんでアンタが俺の部屋の隣なんだ……うるさくするなよ」

びしっと人差し指を向けられて、自分の部屋に入ってしまった律。

その台詞、そっくりそのまま返してやりたかった……畜生！

わなわなと震える拳を押さえながら部屋に入り、当然、そのまま行き場の無い怒りの籠もった拳を枕に突きたてたのは言うまでもない。ああ、希望に満ちていた新生活は何処にいつてしまったの？

楽しかった歓迎会の余韻を見事にぶち壊されて、この日は終了したのだった。

次の日、頭はガンガン。そして物凄く気持ち悪い。ムカムカする胃を押さええながら、ベッド脇のカーテンを開けた。

「……おはよう、ごさいます」

語尾が変だった事は、この際スルーしておこう。私の部屋には当然だけど、私一人しかない。けれど、こうしてカーテンを開けながら朝の挨拶を一人ですることが癖だった私は、未だにこの癖が抜けない。まあ、直そうとしてもいけないけれど。

ぐーっと大きく伸びをしてから枕元に置いてあった携帯を見ると、チカチカと点滅している。時間はまだ、朝の七時だ。こんな朝早くから一体誰だ？ と首を傾げながら携帯を開いた。

「また！」

液晶には、彼の名前が残されている。

もう二度と会いたくない、彼。だったら携帯の番号もアドレスも変えてしまえばいいのに、自分自身にその言葉を何度も投げかけたけれど、それはどうしてもできなかったのだ。自分の心の何処かで彼との繋がりを絶ちたくない、そう願っているのかもしれない。だから私は、携帯の番号もアドレスも変えず、着信拒否もせず、こうして連絡をくれる彼を無視している。酷い女だ。

彼と私の未来は、何一つ見えてこない。尤も、付き合っていた頃は私が勝手に彼との未来を想像しては、プロポーズの言葉を待ちわびていた。でも、いつになってもプロポーズの言葉はやってこない。「結婚」という二文字すら浮かんでこないのだ。それでも彼と一緒にいられたらいい。だってとっても幸せだもの、なんて思っていたあの頃。どうして私は気付けなかったのか……自分の立場に。

「三年も付き合ってたのに気付かないなんて、私が馬鹿だった」

彼から連絡が来るたびに、こうして自分を責めてしまう。わかっているのに、彼との繋がりがなんて本当はいらないって。未練がまし

くこうして断ち切れずにいるのは、やっぱり彼が好きだから。嫌いになって別れたわけじゃない。だからいつも、私は自分に言い訳をしながら、今日も携帯を代えられずにいるのだった。

今日はまだ越してきたばかりということもあって、仕事はない。新しい仕事は明日からだ。と言っても、私はただのアルバイト。スポーツジムに興味があったことと案外時給が良かったこともあり、面接を申し込んだ。面接をしてすぐに採用決定になり、気分よく家に帰ったことをよく覚えている。

「今日はなにしようかなーっと」

ぐしゃぐしゃの布団を綺麗に直し、顔を洗いに洗面所へ向かう。まだ真新しい匂いがするこの部屋が、私の気分を高めてくれた。でも、この後すぐにこの気分は破壊されることになる。

この辺りを散策しようと思った私は、身支度を整えて部屋を出た。私の部屋の扉と同時に開かれた、お隣の扉。そこから顔を出したのは、昨日相性最悪だとインプットした隣人、律だ。

どうする、私。挨拶する？ それとも無視？

後者はあまりにも大人気ない。ここは一つ大人の余裕で挨拶くらいしてやろうじゃない！ そう勇んだ私は律に向かって挨拶をした。

「おはどう！」

大人の余裕って何？ そして私、何噛んでるの！？

完全に私も律も固まってしまい、時間だけが規則正しく流れていく。

あまりにも気まずくて律の顔を見られない。でも、怖いもの見たさもあり、そおと律の方に視線を移した。律の顔、酷すぎる。物凄く人を馬鹿にしてるその顔が、なんかムカつくんですけど。

「……おはどうって。はあ……挨拶もちゃんと出来ねーなんて、ア
ンタ可哀相だな」

こうして憎まれ口だけ残されたまま、入居二日目のスタートを切る
ことになったのだった。最悪だ！

5話 友哉

朝っぱらから大失敗してしまった私は、散歩中も溜息ばかりついていた。

折角こんなに良い天気なのに、ようやく春の訪れを感じるくらい暖かいのに、さっきの大失敗のお陰で気分はどんより曇り空。

「ああ、もう律と顔合わせたくない」

律に会うとなんだか緊張してしまい、必ず何かをやらかしてしまいそうになる。しかもなぜかわからないけれど、やたらと私だけを敵視するし。私、何かしてしまったのだろうか？

とにかくこれから先、律の隣で失敗せずに暮らしていく自信はない。そして、さらに大きな溜息を吐くのだった。

アパートから近所の散策をしているうちに、ちょっとした街中に入っていた。そこは賑やかなお店が何軒も並んでいて、今は落ち込みがちだと言われている商店街が、元気に軒を連ねていた。

商店街は活気付いていて、待ち行く人々も皆元気な笑い声を響かせている。こうして元気な街の姿を目にすると、なんだか元氣をおすそ分けされているようで、さっきまで曇っていた気分は次第に上昇してきた。これだから人の笑顔って好きなんだ。やっぱりこの街に越してきて良かった。……律のことはこの際、考えないようにしよう。

しばらく商店街を歩いていると、まだ閉まっているお店が一軒ある。看板を見ると、この店はどうやらバーらしい。

「Bar Blue Sky か」

お酒はあまり得意ではないけれど、自分の家の近くに行きつけのお店を見つけることにちよっと憧れがある。だから今度、お店が開いていたら行ってみようかな。

営業時間をチェックしようとして、お店の扉の近くに掛けられたボードを覗き込む。すると、そのバーの扉が元気に開かれた。

ゴッ……と鈍い音を立てる私の頭。扉が元氣よく開いてきて、私の頭の右側から思い切りぶつかった。

「……っ！」

声にならない痛みがやってきて、その場でしゃがみ込む私。そして扉を元気に開いた人が、私の蹲る姿を見たのだろう。物凄く大きな声で大量の言葉を投げかけた。

「だ、大丈夫！？ ごめんね、気付かなくて。どこぶつけた？ もしかして頭！？ 頭なんだな！？ やっべーどうしよう！」

正直、痛みよりも言葉の五月蠅さにイラッとした。もう少し気を遣ったら如何かね？ 喉からこんな言葉が出かった時、相手を見上げた私は絶句した。

「友哉くん」

「え。ああ！ めぐみちゃん！」

お互いの顔を見て驚きを隠せずに、二人とも大きく口をあぐりと開けたまま固まった。そして、訪れる笑い。こういう時って、別におかしくないのに笑ってしまうのはどうしてだろう。友哉くんが楽しそうにけらけら笑った後、そっと私の頭に触れた。

「たんこぶになってない？ ホントごめんね、俺、誰もいないと思

って勢いよく扉開けちゃったから」

「大丈夫。私があんなところにいたのが悪かったの。友哉くんのせいじゃないよ」

結構痛かったけれど友哉くんの慌てふためきようを見ていたら、痛みなんてどこかに飛んでいってしまったようだ。扉にぶつかったところを触ってみても、特にたんこぶにはなっていないようだ。

友哉くんは年上なのに、なんだか全然年上になんて思えないほど話しやすい。同級生の男友達のような気がしてしまう。ちよつと目が合えば、ふにやりと頬を緩ませて笑顔を向けてくれる友哉くん。その笑顔につられて、私もつい、笑顔になってしまう。

そういえば友哉くんは、どうしてこの店から出てきたのだろう。もしかしてここで働いてるのかな？

「ねえ、友哉くんってここで働いてるの？」

「そうだよ。ここは俺の先輩と共同経営している店でね、バーテンダーやってるんだ」

「バーテンさんってなんか格好いいね！ 今度お店覗きにきてもいい？」

「うん、おいでよ。めぐみちゃんならいつでも大歓迎だよ」

きらきらの金髪が光を浴びながら、にっこりと嬉しそうに微笑む。傍から見たら怖そうな感じなのに、こうして話してみると友哉くんの人柄の良さを知る事ができる。私、やっぱりあのアパートに越してきて良かった。

友哉くんはお店に忘れ物を取りに来たらしく、その後は何も予定がないということで、私と一緒に近所の散策に付き合ってくれることになった。私よりずっとこの街のことを知っている彼は、あの店は何が安いとか、あそこはゆっくりする時に使うといい、とか色々なことを教えてくれる。頭の中に色々な情報を詰め込んで、友哉く

んと並んで歩く住宅街。歩いている途中に差し掛かった桜並木。桜の蕾はまだ開いていない。けれど、もうすぐ咲くぞ！ という意志が伝わってくるくらい蕾は膨らんでいて、よく晴れた暖かい日にも一斉に花が開きそう。桜並木の下を通る楽しみが一つできた。

「あ、ねえねえめぐみちゃん。お腹空かない？ そろそろお昼だけど」

「そういえば、ちょっと空いたかも」

「美味しいご飯でも食べに行こうか」

「うん！ わあ、楽しみ」

二日酔いで気持ち悪かったはずなのに、今、凄くお腹が空いている。散策している間に気持ち悪さなんかどこかに行ってしまったようだ。

友哉くんが私を連れてやってきた美味しいお店。でも、そこはお店ではなかった。

明らかにお店の雰囲気はカケラもなく、どう見てもこれは……

「友哉、くん？ ここは学校ですよ？」

「うん。俺、この大学通ってたんだけどね、学食がすっぱー美味しいの。一般の人にも開放されてるから大丈夫だよー、行こ」

ぐいっと腕を引かれ、あっという間に友哉くんと手を繋いで大学敷地内に進入してしまった。

友哉くんの手は大きくて、小さな私の手はすっぽりと包まれている。大きくてあったかい、こうして男性と手を繋ぐなんていつ以来だろう。彼とは手を繋いだ事がなかったから、とても新鮮な気分だ。彼と手を繋いでいたら、何かが違っていたのかな。ううん、それはない。手を繋ごうがきつと、関係ない。

私はそのまま、彼のことを思い出すのをやめた。思い出すと、辛

い
だ
け
だ
か
ら
。

6話 学食漫才

沢山の学生が楽しそうに話をしながら、私達の横を通り過ぎていく。

ここは大学内の学食だ。もう少し薄汚れた感じかと思っていたが、どこかのレストラン並みに綺麗だし、何よりメニューが素晴らしい。どれもこれも美味しそうだし、何と言っても値段が安い！ 外でランチを食べたら千円はするようなセットも、ここだとワンコインで済む。なんてお財布に優しいところなんだ。

私が一人で感激に浸っていると、目の前をパッパと手のひらを振りながら友哉くんが私の名前を呼ぶ。

「めぐみちゃん、応答願います。こちら友哉、友哉です。このままお返事がないとお洋服脱がしちゃいますよー」

「はいはいはい！ セクハラ発言はやめましょう！」

「こんな公衆の面前で、めぐみちゃんの服を剥ぎ取るわけないですよ？ まったく」

ですよね。と、言いたいけれど、友哉くんの右手がわきわき動いているのはなぜなの？

油断ならない男かもしれない、そう思った私は、少しでも友哉くんに警戒心を抱き始めたのだった。

あまりにも友哉くんを警戒しすぎて、彼は根負けしてしまった。そんなわけで、今日の昼ご飯は友哉くんのおごり。セクハラ発言には気をつけたほうがいいよ、とひと言添えて、きっちり彼にご馳走になることになった。

友哉くんと向かい合わせに座り、熱々のご飯を目の前に、堪らず口元が緩んでしまう。「本日のおススメ」のセット、小さなハンバーグとナポリタン、そしてポテトサラダが添えてある「お子様ラン

チ（大人用）」を頼んだ私。大好物がいくつもお皿に乗っていて、これが笑顔にならずにいられるか！ という感じ。

「いっただっきまーす」

ナイフとフォークで気取りながら食べるのは苦手なので、最初からガツンとお箸でパスタを食う。すると、味も素晴らしいではないか！ 学食って本当に素晴らしい。貧乏人のオアシスかもしれない。大人気なく、友哉くんが目の前にいることも忘れながらとにかく食う。美味しいものを食べると、ついお喋りを忘れてしまうのはなぜなの。

「めぐみちゃん、もうちょつと食べるペース落とそうか……」

あまりにも勢いよく食べすぎたのかもしれない。ハンバーグを大口開けて口に入れた後、ろくに嚙まなかった私は当然の如く、喉を詰まらせたのだった。

友哉くんが、呆れつつも差し出してくれたお水を一気に喉に流し込む。そして、大きく息を吐いた。

「はー……窒息死するかと思った」

「めぐみちゃん、美味しいのはわかったからゆっくり食べようね？」
「はあい」

おしぼりで口を拭っていた時のことだった。私の頭の上に学食で使用されているトレーが乗せられた。

「う・る・さ・い」

鬼のような声で、野太くもはっきり私の耳に届くように。怒りが

こもったこの声の持ち主は、紛れもなく奴だ。

「よう、律！」

「よう、律！　じゃないですよ。友哉さん。なんでアンタたちが大学にいるんですか」

「はは、いいじゃん。だって俺、OBだし」

「友哉さんはともかく、コレは関係ないでしょう」

ん？　「コレ」って私のことか！？

未だにトレーを頭からどけてくれないので、律の顔は全く見えな
い。でも、私に対しての悪意だけは、充分すぎるほど伝わってきた。
初日から感じていたけれど、どう考えても律の私への対応は悪意
に満ちている。何かしたか、私？

しかし律と私の間に、揉め事など一切なかったはず。それなのに、
どうして？

疑問ばかりが胸に少しずつ降り積もる。別に好かれないわけでは
ないけれど、それでもこんな風に皆とあからさまに態度が違うのは、
納得がいかない。

なぜか私の隣に律が座り、そして律と友哉くんが楽しそうに話を
始めた。その間、私は一人ぶすつとしたままハンバーグを口に入れ
る。もぐもぐ、とハムスターのように頬を膨らませながら食事をして
いた。すると突然、友哉くんが立ち上がり、申し訳なさそうに私
に頭を下げた。

「ごめんね、めぐみちゃん。俺、ちょっと懐かしい先生に会いに行
って来るわ」

あんなにお喋りしていたのに、すっかり食事を終えた友哉くんは
早々に席を立ち、私の返事も待たずに学食から立ち去ってしまった。
友哉くんの馬鹿！　でもご飯おごってくれてありがとう！　……

そうじゃなくて、どうして律と二人きりにするのー！

心の底から叫びたかった。

ちらり、と横目で律を見る。律はたぬきうどんを食べている。何
度もふうふうと息を吹きかけながら、ずずっとうどんをすすってい
る。

……沈黙が、痛い。

スクエア型の黒縁眼鏡がうどんの湯気で曇るのか、一旦テーブル
に置いてから再びふうふうと息をかける。どうやら律は、猫舌のよ
うだ。

「なんだよ」

「はえっ!？」

「視線がうるせー」

眉間に皺を寄せつつ、今回は飛び切り大きな舌打ちつき。流石に
これはむかつくわ。

「あのさあつ、なんで律は私にだけそう、つつけんどんなの？」

「つつけんどんって……」

「だって、美波さんとは普通に話してたじゃない。でも私とはなん
かこう、話すというより嫌味とか皮肉しか出てこないじゃない」

「……俺、アンタが苦手だから」

そうですか。そうですか。わかりました。

会ってたったの二日しか経っていないのに、この言われよう。

「アンタが苦手だから」だって。律に私の何がわかるっていうの
か。

その後、二人で黙々と食事を続けていた。周りはいかに騒がし
いのに、私達の間には一切言葉がない。

私の胸の奥底に、ほんの少しだけ鈍い痛みが走ったなんて、絶対

律には言ってやらない。

7話　ときめき返却

「ごちそうさま」

顔の前で手を合わせ、食事終了の挨拶をする。隣では、律がまだうどんを食べていた。

ここはどうするべきか。先に立って大学内から出て行くべきか、それとも律が食べ終わるのを待つべきか。悩むほどのことではないけれど、なんとなく先に立ちづらい。

コップに入っている水は、あとわずか。そのわずかな水をゆっくり喉に流しながら、横目で律がいつ食べ終わるかを確認していた。

「ごっそーさん」

指先で口を拭いながらそう言うと、テーブルに置いてある眼鏡を再びかけた。黙っていれば割りと格好いいのに、口を開くと途端に最悪な男になる。もったいない。

隣の律は、私が待っていてやったにも関わらず、勝手に席から立ち上がる。そして一人で食器を下げに歩き出した。

待ってたのに……！　年上の優しさを踏みにじりおって！

ぐぬぬ、と怒りを堪えながらテーブルの上で拳を握っていると、遠くから律の声がする。

「おい。片付けんじゃねーの？」

「……あ、うん」

「トロトロすんなよ。わかんねーんだろ？　こっち来い」

命令形かよ！　まあ、片付ける時どうすればいいのかわからなかった私を、ほんの少しだけ気遣ってくれたことは感謝しよう。でも、

もう少し言い方ってあると思うの。

しぶしぶ律の隣に行くと、あれよこれよと律が色々説明してくれる。その時ばかりはさすがの律も、優しかった。いや、微笑んでくれたとかないけれど。

すっかり食事を終えた私は、律とその場で別れた。が、この大学からの帰り道がわからない。さて、どうしたものか。

大学までの道は友哉くんが連れてきてくれたので、殆ど覚えていない。でも、この街を知るために一人で散策していたのだから、きっとアパートに辿り着けるだろう。そう思って、私は歩き出したのだった。

……アパートに辿り着く、はずだったのに。一体ここは何処なのでしょうか。

気がついたら住宅街のど真ん中に辿り着いていた。道端に綺麗な花がたくさん植えられていて、その花を辿りながら歩いていたら可愛らしい猫に出会い、その猫のあとをつけていたらこんな所まで来てしまった。電柱に書いてある住所を見ても、こんな住所は見たこともない。しかも、今頃気付く私も凄いと思うけれど、携帯を忘れている。家に充電したまま、家をふらりと出てきてしまったのだ。もう、誰にも連絡することができない。

「うう、どうしよう。すっごく遠くまで来てる気がする……」

二十三歳で迷子。イタすぎる。

どこか大通りにでも出て、タクシーを捕まえるしかないかもしれない。

知らない土地で、一人ぼっち。これが怖くないわけはなかった。でも、頼れる人は誰もいない。人通りはなく、道を聞こうにも誰も通らない。道端で日向ぼっこをしている猫にでも聞いたなら、もしかしたら答えてくれるかも？ 心細さで、私の心が限界に近づいていた。

「だ、大丈夫。大丈夫」

何度も呟きながら、うろうろと歩き回る。でも、本当は全然大丈夫なんかじゃない。

誰か、助けて。

届くはずのない私の声を胸の一番奥底に閉じ込めて、何度も「大丈夫」と呟いた。声に出して、何度も。何度も。

「お前はやっぱり馬鹿だな」

背中から聞こえてきた声は、憎たらしい律の声。でも、今は憎たらしいことを言われても、とても心強かった。

振り返ると律の息が上がっている。こめかみから少しだけど、汗が流れている。肩で息をしながら、大きく息を吸い込む律が私の腕を乱暴に掴んだ。

「何が『大丈夫』だ！ そんな不安な顔してるくせに。変な風に強がるな！」

変な風に強がってるわけじゃない。大丈夫、は私から不安を消す、大事な呪文なの。こんなこと言っても、きっと律には伝わらないだろうけど、大事な言葉なの。

怒っているけど、本当は律が私を探しに来てくれたのかなあって思ってる。だって、こんなに息が上がっているなんて、どう考えても探しに来てくれたような気がしてしまう。

律、いつも憎たらしいことばかり言うけど、今日はほんの少しだけ、律が好きになったよ。

力強く引いてくれるその腕が、なぜか嬉しい。前を見たまま一度も振り向いてくれないけど、心配してくれたの

はわかってる。

こんなに遠くまで私を探しに来てくれて、本当に嬉しい……

「ったく。なんでこんな近所で迷子になるかな。ほら、アパートここだから」

「……へ？」

「変な女だよ、アンタ。アパートの正面じゃなくて裏にいたんだよ。だからわかんなかったんじゃないの？」

「裏？」

「そうだよ。本当にアンタは……ちっ」

また舌打ちだ。それにしても、アパートの裏ですと？

つまり、私はアパートに辿り着いていたのに、辿り着いた場所がアパートの裏側でわからなかったということか。それは確かに、馬鹿かもしれない。

一瞬でも律にときめいた私って、本当の馬鹿だ。このときめき、返してくれ！

でも、息が上がっていたのはやっぱり、私を探してくれたのだから。うか。そうなの？ 律。

たったこれだけのことを、律には素直に聞けない。

この後、部屋に入るまで後ろからずっと「馬鹿」と言われ続けたことは、言うまでもない。

8話 忘りたい 忘れたくない

いい奴だと思ったのに、結局律は変わりなく嫌な奴だ。

大体、私のことをいつまで「アンタ」と呼ぶのだろうか。私はまだ彼に、一度も名前を呼ばれた事がない。

「いいけどね、別に。名前で呼んで欲しいわけじゃないし」

誰もいない部屋で、自分に言い聞かせるように独り言を言うと、なんだかとても虚しくなる。

今日は散々歩いたせいか、もうクタクタだ。時間はまだ夕方の方の六時だけど、シャワーを浴びてとっと寝てしまおう。そう思った私は、バスルームへ向かった。

前の部屋よりもシャワーは出がいいので快適だ。頭から爪先までしっかり温まると、少し疲れが取れたような気がする。

肩にタオルを引っ掛けたまま冷蔵庫を開き、ミネラルウォーターを取り出した。きん、と冷えた水が体に潤いを戻してくれるような気がする。

部屋着のまましばらく寛ぎ、ベッドに横になったまま雑誌を広げたり、テレビをつけて笑ったり、一人の時間はあっという間に過ぎていく。きつと快適な証拠だ。

すっかり寛いで半分は睡魔に意識を持っていかれた頃、インターホンが鳴り響く。せっかく寛いでいるというのに、一体誰だ。しぶしぶ玄関に行き扉を開くと、そこには友哉くんが立っていた。

「友哉くん、どうしたの？」

「あ、今日のごめんね。なんか律から懐かしい先生の話聞いたら、どうしても会いたくなって。めぐみちゃんをほっといたりして、俺悪いことしたなあって思って、謝りにきた。本当にごめん」

直角に腰を折り、私に頭を下げる友哉くん。そんなに気にしなくてもいいのに。きつと自己嫌悪に陥って、こうして謝りにきてくれたのかと思ったら、ちよつと胸がほわんとあたたかくなった。

「大丈夫だよ。懐かしい先生には会えたの？」

「ああ、もちろん。すっげー懐かしい気がしたよ」

「それならいいの。私のことは気にしなくていいよ。大丈夫だから」
「……じゃあ今度、埋め合わせするね」

大きな体が小さく見えるほど、友哉くんはおずおずと私の機嫌を伺う。なんか、可愛いな。

埋め合わせなんてしなくてもいいけど、こうして友哉くんが言ってくれているのに断るのもどうかと思って、私はつい、首を縦に振ってしまった。でも、私の返事に友哉くんは大袈裟なほどはしゃいで、子供のように嬉しそうに眩しい笑顔を向けてきた。

向日葵を思わせる友哉くんの笑顔は、見ていてとても嬉しくなる。喜怒哀楽が顔に出やすい人なのかもしれない。

「じゃあ、本当に今度！ 絶対埋め合わせするからね！ それじゃ、おやすみ」

「うん。おやすみなさい」

私達は手を振って、その場で別れた。

部屋に戻った私は、友哉くんのことを考えていた。

もしも友哉くんみたいな人が彼氏だったら、きつと毎日楽しいんだろうな。

一緒にいてほんわかできる人は、心の底から寛げる。でも、私は利人さんが気になる。

利人さんは、自分よりも結構年上だけど、何ていうか彼の王子様

オーラが私の胸を鷲掴みする。きらきらの笑顔ビーム？ うーん、なんか違う。利人さんの無駄に多いフェロモンが、きつといけなんんだわ。だって、本気で利人さんを好きになったって、絶対子供扱いされるに決まってる。

「子供じゃないけど、利人さんにとっては子供みたいなもんか」

好きになる前から諦めに入るのは、どうしても前の彼を忘れられないから。忘れたいけど、忘れられない。自分にとっては大恋愛だと思っていたあの恋は、彼にとってはほんのお遊びだったのだろう。彼との間にある温度差が、今ならよくわかる。でも、あの時は本当に、運命の人！ と声高に言えるほど好きだった。

「どうすれば忘れられるんだろう」

忘れられないのは、この恋にちゃんと終止符を打っていないから。私が、怖くて逃げ出してしまったから。

ちゃんと終わりにしなくてはいけないことぐらいわかっている。でも、もう一度会ってしまったら、声を聞いてしまったら、私は再び彼のところに戻ってしまうような気がする。

傍にいる資格はないというのに。

「まだ、もうちょっとだけ。もうちょっと、充電してから……」

ベッドに身を沈め、そう呟きながら瞼がゆっくりおりてくる。そして私は、意識を手放し、夢の世界へと旅立ったのだった。

ベッドの下で震える携帯に気付かないまま、心地良い眠りを堪能した夜だった。

9 話 妹 来訪

このアパートに引っ越してきて、一週間が経った。

家から徒歩十分圏内にある仕事場のスポーツジム。その受付を始めて間もないが、仕事は簡単だし、何より職場の人たちがとても優しい。実に働きやすい職場は、いつもみんなが笑顔だった。

アパートの住人も相変わらずで、最近は美波さんと一緒にお茶を飲んだりすることもある。

美波さんは、昔からの夢である花屋を開き、一所懸命切り盛りしている。「いつも大好きな花に囲まれて、とても幸せよ」と、笑顔で話してくれた美波さんが、なんだかちよつと格好よかった。夢を叶えるって、本当に凄い。私はアルバイトのままだし、夢もない。だけど、こうやって人の話を聞くだけでも、何かを得たような気がする。

こんな快適な暮らしの中で、相変わらず携帯は鳴り止まない。毎日毎日、彼から電話がくる。一週間経っても、私はまだ、彼からの電話を取った事がなかった。

「そろそろ、限界ですよー……と」

携帯を見ながら、一人呟く。そろそろ本気で向き合って、話さなくてはならない。これで本当に、彼とは終わりにしなくてはいい。

終わりにする、それが嫌で逃げていたのか。それとも、ただ単に私が臆病すぎるのか。それすらもわからないまま、毎日が平穏に過ぎていった。

平穏な毎日のある日、それは突然私の前にやってきた。

「来ちゃった」

「萌……」

彼女は戸塚萌^{とつかもえ}、私の三つ下の妹だ。

私と萌は、腹違いの妹だ。私が幼い頃に父と母が離婚し、経済力などを考慮して父が私を引き取った。そして母と別れてからわずか一年で、今の義理の母と再婚したのだ。

その父と、義理の母の間にできたのが萌。

義理の母は私のことも可愛がってくれたが、やはり自分の子供のほうが可愛かったのだろう。幼い頃は本当の母のように接してくれた義母も、大人になってからは萌ばかりを可愛がっていた。

出来の悪い私と違い、萌はなんでもできる。成績も良かったし、明るく人望も厚い。そして何より、家族思いなのだ。そんな出来の良いい妹と私を比べて、義母はだんだん、私のことを見なくなっていた。少しずつ義母との間にできた亀裂が大きくなり、私はあの家に居辛くなった。だから家を出たのだ。

家族ともうまくいかない、彼とも別れた。この世の全てから取り残されてしまったような、あの孤独感を、一体なんて言い表せばいいのか。

そんな私の事情を知って、利人さんはこのアパートに迎えてくれたのだ。本当に、感謝してもしきれない。

そして突然現れた妹は、一体何をしにきたのだろう。

萌とは別に仲が悪いわけではないけれど、なぜか彼女には本音を言いづらい。一応今のアパートの場所は教えておいたけれど、まさか来るとは思ってもみなかった。

ごくり、と唾を飲む。

なぜだか、緊張が走る。

萌の無邪気な笑顔を見るだけで、ズキズキと心が痛む音がする。萌は、何も悪くないのに。

「もう、お姉ちゃんったら、ちっとも家に帰ってこないんだもん。正月くらい帰ってきてもいいじゃない」

「うん、ごめん……」

「今日はね、近くまで来たから寄ってみたの」

「そ、そうなの。どうぞ？」

扉から少しずれて、玄関に入るようにスペースを作る。すると萌は嬉しそうに「お邪魔しまーす」と言っ、て、玄関に一步入ってきた。でも、萌はすぐに玄関に入らずに、ひょこつと外に顔を出して「こんにちはー」と誰かに声をかけた。

「ちょ、ちよつと萌？」

「……こんちは」

この声は、律か。もう大学から帰ってきたのだろうか。しかしよりによって、律と萌を会わすことになるうとは、思いもしなかった！

「ほら萌！ 早く入りなさい！」

「えー、だって。彼、格好いいんだもん。お喋りしたいー。あ、良かったら一緒にこっちに来ませんか？」

「萌！ ななな何言ってるの！？」

「お姉ちゃんったら、何動揺してるのよ。ね、どうですか？」

律、頼む。断ってくれー！

まあ、こんな風に願わなくても律なら断るに違いない。だって、私のこと嫌ってるっばいし。きっと大丈夫、な、ハズ……

「いいよ。じゃあ荷物置いたらそっち行くから」

にこーっと、満面の笑みで答える律。

なんだって！？ おのれ律め……断れよ！ ああ、奴の満面の笑みが怖い。きっと何か言われるに違いない。

だから萌は嫌なんだ。すぐに話してみたい人に声をかけては、必ずと言っていいほど獲物を捕まえてくる。彼女の容姿が男を虜にするのだろうか……姉としては隣に並ぶのも嫌なくらい、萌は可愛らしい。仔猫のようなうるうるの瞳で、透き通った高い声、そして傲慢だと豪語する彼女のすらりと伸びた脚が、今日も獲物（男）を捕まえたのだ。

本日 of 生贄は、律。律のちょっと癖のある黒髪に黒縁スクエア型の眼鏡が、萌のタイプなのだろう。

「ねえねえ、すごい格好いい人の隣に住んでるんだねー！ 私も家出て、ここで暮らしたい」

「萌の大学は、ここからじゃ遠すぎるでしょ？ 駄目よ」

「えー、じゃあ大学辞めて働こうかな」

「あのねえ……」

この子供っぽさが私は苦手。

きっと今日、萌はずっと律にべったりだろう。

気が重い夜は、これからだ。

10話 言葉はいらない

わいわい、がやがや。楽しげな声が部屋に響き渡る。

「私達、同じ歳なんだねー」

「そうみたいだな。大学生？」

「うん、そうだよー。律も大学生だよね？」

目の前の同じ歳の二人が、きゃっきやうふふしてます。

ここは確か、私の部屋だった筈なのに……家主がハブられているってどういうことなのでしょう？

二人の学生談議に加わる事が出来ず、ただ静かにその様子を見ながらコーヒーを口に含んだ。

いつも私には不機嫌な顔しか見せない律が、萌の前では笑顔を見せている。明らかに二人は、お喋りを楽しんでいるように見えた。

私は、お邪魔ってか。

ふて腐れたままコーヒーを飲むのも、もう限界。大丈夫大丈夫、と自分を励ますのも疲れてしまった。かと言って、このまま一人で部屋を出て行くのもどうかと思う。

色々考えた末、私は静かに一人で雑誌を読むことにした。だって、会話に加わっていないのに、二人はちっとも私を気にかけてくれないし。

半ばいじけたまま、私はベッド脇に置いてある雑誌に手を掛けた。しかしその時、私の携帯が静かにポケットで震え始めた。着信画面を見なくても、誰がかけてきたかなんてすぐわかる。毎日頻繁に電話をかけてくる、彼だろう。私は携帯を手に取り、そのまま楽しそうにお喋りをしている二人の邪魔にならないよう、ベランダに出た行った。

「……どうしよう、どうしよう」

通話ボタンに親指を置いたはいいいけれど、手が震えて電話に出る事ができない。でも、もうこんなことは終らせなくちゃいけない。一つ大きく深呼吸をしてから、意を決して、通話ボタンを押したのだった。

『もしもし。めぐみ……？ 俺』

まだ彼と意図的に会わないようにしてからそれほど日にちが経っていないというのに、なんて懐かしく感じるのだろう。とても不思議な気持ちだ。

いつも優しく名前を囁く彼の声が、耳から全身に伝わってくる。すると、別に悲しいわけじゃないのに、勝手に涙がポロポロと溢れて止まらなくなってしまった。

『めぐみ、ごめん。でも、俺ともう一度やり直してほしいんだ！』

なんでそんなこと言うの？ だってそんなの無理に決まってるのに。

『妻とはちゃんと離婚する。だから……』

嘘。嘘嘘嘘。

結婚していることすら隠していたのに、そんな言葉、信用できない。

彼と付き合っている時は、確かに普通の恋人同士のような付き合い方はしていなかったかもしれない。車の中で過ごしたり、ホテルで過ごしたり。私の部屋は会社の寮だったので、彼が嫌がって近寄らなかった。彼の部屋には上がった事があったけれど、そこは自分

の家ではなく別に一軒借りていると、別れる間に聞いた。

彼が結婚していることを知らずに、お付き合いを始めた。嬉しくて友達に話したかったけれど、友達は同じ会社の人間だったので話すことができなかったのだ。それは、彼が「社内の人間には内緒ね」と、耳元で甘く囁いたから。彼を愛していた私には、なぜ内緒にしたがるのか疑うことをしなかった。

そしてある日のこと、会社に一人の女性が現れた。あろうことかその女性と最初に話したのは私で、品の良いワンピースに袖を通した女性が、ちょっと困ったように声をかけてきた。

「川島はどこにいるかわかりますか？ あ、私、川島の家内でございます」

丁寧な頭を下げられ、私は凍りついたように固まってしまった。

川島という名前の社員は、彼しかない。私の頭はうまく回らず、この後彼女にどう説明したのかは覚えていない。ただショックが大きすぎて、自分が立っているのかすらわからなかったのだ。目の前が真っ暗になり、目の前の現実を受け入れられない私は、自分の時間を止めたくなった。

そんな出来事があり、私は何も言わずに彼の前から逃げた。会社を辞める口実はいくらでもある。どんな嘘を吐いてでも、彼の傍から離れたかったのだ。

その彼が、やり直そうと言っている。そんな馬鹿な話、誰が信じるというのだろうか。

「何言ってるの？ そんなの、無理に決まってるじゃない」

『ちゃんと離婚するから！ そうしたらめぐみと……』

「嘘嘘嘘！ もう嘘はこりごりよ！」

頭を手で抱え、サイドに流していた髪をくしゃりと握る。ベランダにしゃがみこんで、止まらない涙を拭いながら必死に体の震えを止めようとした。電話口で彼が何かを必死に話しているけれど、そ

の声は私の耳に届かなかった。その時、後ろからふわりと暖かいものが掛けられ、私は驚きのあまり後ろを振り返ってしまった。

律が立っていた。律が私の肩に、手近にあったショールを持ってきて掛けてくれたのだ。でも「ありがとう」なんて言えなかった。それより何より、律に涙を見られてしまったのが恥ずかしくて、すぐに律から顔を反らす。そんな私の様子を察してくれたのだろう、律は何も言わずに部屋に戻っていったのだ。

電話口では、彼が私を求めている。でも、私はその言葉に耳を貸さなかった。

冷えた空気から守るように、肩のショールが私をあたためてくれる。

言葉は無い。けれど、壊れそうな心に少しだけ優しさが触れた。

11話 見透かす瞳

肩にかけられたあたたかいショールは、私の壊れかけの心まであたためてくれる。だから、今ならちゃんと、彼にお別れを言えるような気がする。一つ静かに深呼吸をして、きゅっと唇をかみしめ、そしてゆっくり、口を開いた。

「私はもう、あなたとは付き合えないよ。だから今日で終わりにしよう」

ほら、言えた。

若干、棒読みのような気がしたけれど、彼にこの言葉が届けばいい。どうか、納得してほしい。

次に来る彼の言葉を、固唾を吞んで待ちわびた。これで、全てが終るんだ。

そう思った私の胸は、急速に速まっていく。

どくどくどく。胸が嫌な音を立てる。

ショールを胸元で握り締めながら、黙って彼の言葉を待っていた。しかし、彼の口から出た言葉は、私の想像したものとは違っていた。

「……もう少し、考えさせて」

覇気の無い声で呟いた後、勝手に電話を切られてしまった。

ツーツと、虚しい音だけが耳に響き、私は脱力感に襲われる。

なんだ？ 「もう少し、考えさせて」って何よ。私は、「わかった」という納得した言葉を聞きたかったのに。

結局、あんなに彼からの電話を拒みつつ、ようやく電話に出たというのに、なんだろう。こんな言葉を聞きたかったわけじゃない。すると、急速に全身から力が抜けしまい、私はがっくりと肩を落と

した。

でも、私の気持ちは彼に伝わった筈だ。私から伝えたい言葉は、あれが全てだ。もう、あれこれ考えるのはよそう。肩に掛かったこのショールが、私の背中を押してくれたような気がした。

律がさらりと肩にかけてくれたこと、何も言わずに部屋に戻ってくれたこと、そして貰えたのはぬくもりだけじゃないくて勇氣も一緒に貰ったこと。本当に感謝している。

三月とはいえ、夜は寒い。寒さで鼻の頭が赤くなってしまったかもしれないけれど、私の心はホッとあたたかくなった。

電話を終らせた私は一つぶるっと身震いをし、両手でショールを胸元に手繰り寄せる。そして寒いベランダから部屋に戻ると、萌が帰り支度をしている様子が目に入った。

「萌、帰るの？」

「あー、お姉ちゃんっいたらやっと帰ってきた！　もう行かなくちゃ。友達と約束してるんだ」

「もう夜じゃない」

「やだなあ、子供じゃないんだから。これから友達と呑みに行くのよ。それじゃ、またね」

コートを着込み、慌しく玄関に向かう萌。大きな花のモチーフがついたピンクのピンヒールを履き、扉を開けて出て行ってしまった。カンカン、とヒール音が階段に響き、その音もやがて聞こえなくなった頃、ようやく私は律と二人きりだということに気がついた。律は何も言わず、勝手にテレビをつけて寛いでいる。あ、お気に入りのクッションがお尻の下に敷かれて潰れてる。テレビを観ながら、時折「くす」と小さく笑う姿は、生意気さも憎たらしさも感じない。

彼がテレビを観ている間、私はキッチンでコーヒーを淹れ、何て律に声をかけようか考えていた。「ショールありがとう」と、素直

に言うのはなんとなく恥ずかしい。だって、泣き顔を見られてしまったから、それを穿り返すようなことはしたくない。じゃあ、なんて声をかけるの？

色々悩んでいるうちにコーヒーはカップに注がれ、白い湯気を立てている。冷めてしまったら美味しくないなので、私は自分の考えがまとまらないうちに律のもとへ行かなくてはならない。

大した距離もない私と律の間は、数歩歩けばすぐに彼の隣になってしまう。どんな顔をすれば良いのかわからないけれど、このままという訳にもいかない。仕方なく、私はコーヒーカップを二つ持ち、律の隣に向かう。そして律の分のコーヒーを差し出した。

「……どうぞ」

「ん」

小さな声でやっと出た言葉がこれ。そして返事が「ん」のみ。

倦怠期の夫婦か！ というツツコミは、静かに胸の内にしまいこんだ。何だか悩んでいたのが馬鹿馬鹿しい。

ベッドに寄りかかりながらテレビを観る律の隣に、ちょこん、と小さく座ってみた。ワンルームだと行き場が無くて困ってしまう。それでも律はテレビから目を離さない。たまにコーヒーを飲みながら、テレビでやっているバラエティ番組を観ていた。それが今の私には丁度良い。

あたたかいコーヒーが冷えた体に心地良く流れてくると、少しポカポカしてきた。小さく溜息を吐き、コーヒーカップの中に視線を落としたまましばらくボーっとしていると、律の視線がこちらに向けられた。その瞳は真剣すぎて、全てを見透かされてしまいそうなほど真っ直ぐ私を見つめていた。

「な、何？」

思わず声が上擦ってしまふ。そして、あまりにも真っ直ぐ見つめられすぎて、思わず後ずさりしてしまった。すると、少し間を詰めるように律の上半身が近づき、無遠慮な言葉を投げかけてきた。

「なんで泣いてた？」

直球ー！ やめて、直球！

こ、こいつは……人の傷口を抉るようなことばかり言いおってからにっ……！

だけど、律は真っ直ぐに私を見つめ、いつもみたいに舌打ちもしなければ、ふざけた様子も見せない。あくまでも、真剣に私を見つめる。

射抜くようなガラス玉の瞳に、私だけを映して。

じりじりとせまる律の体が、私から退路を奪う。その真っ直ぐな視線に耐えられなくなり、目を反らすと乱暴に顎を掴まれて正面を向かされた。

「アンタは、大丈夫って言いながら自分の気持ちをごまかしすぎる。だからそのツケが、いつか大きくなるんだ。だからそうやって泣くことになる」

彼の言うことは正論すぎて、返す言葉がみつからない。それが悔しい。

「ほら、言い返せないだろ。言いたいことも言えず溜め込むなんて、そんな器用なことするから辛くなる。そういう姿見ると、イライラする」

頭をガシガシと掻きながら、律が不機嫌そうに表情を歪めた。何もそこまで言わなくても。私だけじゃない。絶対に自分をごま

かすことで、上手く生きていく人だっているはずだ。

私がそう言い返そうとした時、律の口から意外な言葉が漏れた。

「……昔の自分を見てるみたいで、イライラするんだ」

それは律の、弱かった頃の姿。

そんな彼を見たら、私はもう、何も言えないまま律を見つめるし
かできなかった。

12話 利人

私の顎を掴んだまま正論を発する律の口元が、苦痛に歪む。

私が「大丈夫」と何かにつけて言う事が、彼の過去の自分の姿と重なるという。それがどういうことなのか、律はそれ以上は語らない。

指先が食い込むくらい力強く掴まれていた顎が、ゆっくりと解放された頃には、いつもの律の顔に戻っていた。

「変な顔だったな」

口端を持ち上げ、ニヒルな笑みを浮かべる律。それはさっきまでの苦痛に歪んだ表情なんかじゃなく、いつもの人を小馬鹿にする時の表情だ。

「なっ……それは律が掴んだからでしょ!？」

「掴まなくても変な顔だけど」

最後まで憎まれ口を叩き、ようやく腰を上げた律はそのまま玄関に向かう。靴を履き扉を開け、最後にもうひと言添えて不敵に笑った。

「ほっぺは柔らかかった」

ぱたん、と静かに扉がしまり、私はただ呆然とその様子を眺めることしか出来なかった。

そしてようやく我に返り、自分のほっぺを両手で覆った。

柔らかいって、柔らかいって! 何言ってるんだー!

かーっと全身が熱くなるのがわかるほど、私は恥ずかしさでいっ

ぱいになる。

最後に不敵に微笑んだ律の顔が、その日は頭から離れないまま眠れぬ夜を過ごすことになってしまったのだった。

朝、鏡に映った私の顔は、それはそれは酷いものだった。

「クマができてる……」

目の下にどっしりとクマが出来、コンシーラーでも上手く隠せるか不安なくらい。そんな顔でも今日は仕事だ。がっちり顔を作らなくちゃいけない。

目覚めのシャワーを浴びてから化粧をしたが、どうにも上手く隠せない。厚塗り過ぎると老けて見えるし、かといって薄すぎればクマの存在はバツチリわかってしまう。

「これも全て、律のせいだ」

恨みがましく呟きながら、化粧を終らせた。もう、これでいい。開き直った私は、そのまま着替えて仕事に向かったのだった。

職場に着き、早々にクマのことは指摘された。「酷い」だの「ブス」だの、ええい！ 黙れい！

クマのことには触れてくれるな、と云わんばかりに私は受付の仕事で、ジムで、会場で、どこへいっても出来不出来。もう、今日は一日、クマが酷い顔で、ジムの会員に笑顔振りまく覚悟で仕事に臨んだ。

その日は一日、気さくに話しかけてくれる会員さんにまでクマを指摘され、酷いときには爆笑までされた。

はいはい、私を見て笑うがいいわ。

最後にはこんな感じで、己を捨てて笑顔を振りまいていた。もうヤケになっていたのだ。でも、そんな私の元に、こんな顔を見られたくない相手が来るなんて、この時は想像すらしていなかった。

「やあ、めぐみさん。もう仕事は終わるのでしょうか？」
「りっ」

利人さん！　と言いたかった。でも、すぐに自分の目の下の酷いクマのことを思い出し、利人さんの名前を叫ぶ前に顔を反らした。

「おや、どうかしたのですか？」

「いえっ！　なんでもないんですけど」

テンパっています、私。

あまりにも不自然に顔を反らす私を、追うように覗き込む利人さん。その間は、僅か数十センチほど。

か……顔、顔が近いですから！

綺麗な利人さんの顔と並ぶのは、今だけは勘弁だ。しかし、意外にも利人さんの押しは強い。ぐいぐいと顔を近づけて、最終的に私が負けた。

「おや、昨夜は眠れなかったのでしょうか」

「うう、見ないでやってくださいまし……」

もはやいつの時代の人間なのかも不明な喋り方。きっと利人さんも呆れちゃう。

しかし彼はクマのことなど気にせずに、私の肩にぽん、と優しく手を置いた。

「めぐみさん、うちへいらっしやい。心が休まるハーブティーを淹れてさしあげましょう。きっとリラックスできますよ」

きらりーん、と効果音が出そうなほど煌びやかな笑顔を向けて、

入り口で待っている、と言いつ残しジムから出て行った。

その後、すぐに仕事は終わったのだけど、入り口で待っている利人さんの周りにうじゃうじゃと女が群がっている。砂糖を求めて集まった、アリの大群のようにも見える。

利人さんが……危険！

なんて思っても、そのアリの大群を蹴散らすような度胸は無い。女の怖さは、よく知ってますから。

ちょっと遠い所でその様子を見ていた私を、利人さんはまるで全てを知っているかのように見つけ出し、そそくさとアリの大群から抜け出してきた。しかし、アリ共は何とか利人さんをこの場に留めようと必死だ。そこで利人さんが、一気にその場を静めるのだった。

「皆さん、楽しいひと時をありがとうございます。でも私は家で待っている祖母のもとへ帰らなくてはなりませんので……またお会いしましょう？ 寒いですからお体を大切に」

音楽を奏でているかのような声で、アリたちがうっとりしながら首を縦に振る。あれは何かの呪文だろうか。

そんな利人さんを見ていたら、この人が一番、女の敵であるような気がしてならない。なのに……！ 私も彼の呪文の生贄の一人になりそうだ。利人さんったら、恐ろしい男！

13話 拒絶の姿勢

利人さんと並んで家に帰るのは、初めて。

背の高い利人さんは見上げないと顔も見えないけれど、隣にいただけで私は幸せだ。

ジムを出てから、利人さんに群がっていたアリ達には睨まれてしまったけれど、アリを振り切って私のところに来てくれた利人さんの姿を見ただけで、充分。あの時は、快感だったなあ。快感というか、優越感？ あんな体験は初めてだ。

アパートに向かう道を歩いていた私達。だけど、利人さんはその道から外れようとしていた。

「利人さん？ アパートはあっちですけど……」

「ええ。でも、もう一軒、寄るところがあるのですが、お付き合いますか？」

「はい！ ええ、もう。喜んで！」

某居酒屋のような返事をして、私は利人さんと足並み揃えて歩出す。そして利人さんが寄りたいといっていたのは、一軒の可愛らしいお花屋さんだった。

そのお花屋さんはまだ真新しく、真っ白な外壁に汚れない。そして店の外まで並べられた沢山の花が、様々な香りを道に撒き散らしている。

利人さんがお店の前まで行くと、店の奥から可憐な声が聞こえてきた。その声は、私もよく知っている。

「いらっしやいませ。あ、利人さんと、まあ！ めぐみちゃんまで来てくれたの？ 嬉しいわ」

お花たちに囲まれた美女が一人、微笑みを浮かべながらやってきた。

ちよつとタレ目が可愛らしい、美波さんだ。

「お花を買いに参りました」

「毎日ありがとうございます、利人さん」

ん？ 毎日って言いましたか？

と、いうことは利人さんは、毎日美波さんのお店に通っているという事で……それは毎日、美波さんに会っているということですよ。

私は、今日初めて、利人さんとうちまで帰ることができたというのに、美波さんは毎日この美しい笑顔を見ていたのか。なんと羨ましい。

ちよつと遠巻きで二人を見ると、なんということでしょう。美男美女がそこに！ 輝かんばかりのオーラを放ち、人々を魅了する笑顔をお互い見せ合っているではないか。

「あの二人の間に私が入ったら……そのへんを飛んでる虫みたいかな。あはは」

笑いも力が抜けるほど、あのツーショットは美しい。なんていうか、凄く画になる二人なのだ。

そこに私が入るなんて、おこがまして無理だ。

美波さんのように女性らしい淑やかさと美貌があったら、人生少しは楽しんでいたのだろうか。まだ二十三にして、少し人生に疲れている私には、想像もつかない。ましてや、利人さんと微笑み合っ

て周りから「素敵」と思われるような画は、もっと想像つかない。「素敵な美男美女」ではなく「妹をあやす兄」の方がしっくりくるなんて、悲しすぎる。

「どうかしましたか、めぐみさん？」

いつのまにか利人さんは私の隣に立っていて、またもや顔を覗き込まれた。そして、相変わらず利人さんは顔が近い。

片手に花を持っている利人さんが、目を閉じて花の香りを愉しんでいる。

「春の香りですね」

花束は、チューリップと、それを引き立てるかすみ草。春の代表的な花の一つだ。これで部屋も春らしくなる、と利人さんは満足気に微笑む。

ああ、世の中はもうすぐ春なのね。私にも早く、春よこいこい。

利人さんの隣で幸せなひと時を過ごしていると、あっという間にアパートに辿り着いてしまった。

もう少し、ゆっくり歩けばよかったなあ、なんて。

「ではめぐみさん、荷物を置いてからウチへいらっしゃい。勝手に入って構いませんから」

「はい、わかりました！」

アパートの階段を昇りながら、利人さんとの後に待っているラブラブなティータイムを想像して、あやうく鼻血が出そうだった。いけない、いけない。こんなに変態じみていたら、利人さんに嫌われちゃう。

半分出ってしまった鼻血を手で押さえながら、利人さんに気付かれないように二階まで昇り切ると、そこには奴の姿が！

「おや、今帰宅したのですか？ 律くん」

「利人さん、と……アンタか」

律が眼鏡を指で押し上げながら、訝しげにこちらを見つめる。突き刺さるような強い視線を受け止めるのは、今の私には無理だ。昨日の事が気まずくて、律と目を合わせる事ができない。いや、一方的に恥ずかしいだけなんだけど。

気がつくのと、律が玄関の前で溜息を吐き、利人さんに申し訳なさそうに切り出した。

「利人さん、すみませんが俺、鍵を落としちゃったみたいで。マスタキー、お借りできませんか？」

「わかりました。では、律くんも一緒にいらっしやい。これからめぐみさんとハーブティーを楽しむところだったので、丁度良かった」

にっこり微笑み、律を誘う利人さん。そりゃないぜ、利人さん……。

これから二人っきりで、ラブラブティータイム！ が、崩れる五秒前。さようなら、マイスイートタイム……。表で笑顔、心で涙。そして律の返事はやっぱり「行きます」。

利人さんがその場から離れ、自分の家への階段を昇りだす。しかし律はその場から動かない。

「律、利人さんと一緒に行かないの？」

「え、ああ。悪いけど荷物、置かせて」

「へ？ 持ってけばいいじゃない」

「いいから置かせて」

有無を言わさない、強い口調。律はちょっとだけ、いつもと違うような雰囲気醸し出していた。

表情はいつも通り仏頂面だけど、何となく暗い。溜息もよく吐くし、何より携帯をチラチラと何度も見ている。

「誰かからの連絡でも、待ってるの？」

「別に。アンタに関係ない」

しれっとした顔で、突き放す。こういう所がムカつく。

確かに関係ないかもしれないけど、言い方ってものがあるでしょう？ 言い方一つでずいぶん変わるのに、律の言葉はいつもトゲトゲしている。まあ、私もたまにはあるけど。

律の目が、関わるな、と言っている。

冷たいガラス玉の瞳の行方が気になるけれど、律との距離は開いたまま。

14話 利人さんとラブラブ……？

玄関の扉を開け、まず最初に私の部屋に入ったのは、なぜか律だった。しかも、そのまま靴を脱ぎ、私のベッドに一直線。ばふっと鈍い音を立てて、そのままベッドへ倒れこんだのだ。

「こら！ 人のベッドを勝手に占領するんじゃない」

「きゃんきゃんうるせーな。今日は授業がみつしりあったから、疲れてるんだよ」

律が受ける授業がいつぱいあって疲れたという言い訳と、私のベッドで勝手に横になるのって関係なくないか？

しかし律は本当に疲れているのか、そう言ったまま静かに寝息をたて始めてしまった。

「ちょ、ちよつと律？ これから利人さんの家に行くって言ったじゃない。ちよつとー」

うつぶせのまま寝息を立てる律の背中を、ゆさゆさと大きく揺さぶっても、律は一向に目覚めない。それどころか、深い深い眠りについてしまったようだ。

ベッド脇にしゃがみこみ律の寝顔を覗き込むと、そこにはいつも吊り上げている眉毛は下がっていて、あどけない子供のような寝顔を見せている。

寝顔は可愛いんだなあ。

しげしげと見つめていたが、利人さんを待たせてはいけない。私は仕方なく、クローゼットからもう一枚掛け布団を引っ張り出し、律に掛けてから部屋を出て行った。

本当に疲れてるっぽかったし、何かあれば電話が来るか利人さんの家まで来るだろう。

そう思い、部屋のカーテンを閉め、ベッドのサイドテーブルのライトだけを点けて部屋を後にした。

部屋の鍵をかけ、利人さんの家がある三階まで昇り、彼に言われたとおり勝手に扉を開けた。

「お邪魔します」

流石に人の家の扉を勝手に開けるのは、ちょっと緊張する。でも、すぐにその緊張感もなくなる笑顔を、ひょこっと見せてくれる利人さんがいる。

「いらっしやい。おや、律くんはどうしました？」

ダイニングテーブルにアンティークかと思われるティーセットを並べ、しかもハーブティーに合うようなクッキーなどが用意されていた。手早く用意しながら、利人さんは律が来ないことを不思議に思ったのか、笑顔からポカンと不思議そうな表情に変わった。そんな表情の利人さんも、素敵！ などと言えるわけもなく、私は慌てて理由を説明した。

「なぜか、私のベッドを占領してます。いきなり倒れたと思ったら、爆睡しました」

「爆睡ですか。よほどお疲れだったのでしょうか。では後ほど、彼の部屋の鍵を渡すついでに、起こしてさしあげましょう。それまでは、ぐっすり眠ればよろしいでしょう」

「ですね」

やったー！ 利人さんとのラブラブティータイムの時間を、手に

入れたわー！

内心ガッツポーズをしながら、私の頬は緩むばかり。

ハーブの香りが立ち上る、透き通った夕焼け色のハーブティーが、私の鼻をくすぐる。

さあ、レッツ！ ティーパーティー！

「おや、良い香りだね」

ティーカップを口につけたところで、私は奥の部屋から出てきた人物に気がついた。

そうでした！ 利人さんは一人暮らしじゃなかった！ ごめんなさい、おたえさん。

にこにこ目尻を下げて、ゆつくりとこちらに歩むおたえさんが、ゆつくりと椅子に腰掛けた。

不思議とおたえさんがそこにいるだけで、気持ちがゆったりとリラックスし、気持ちが安らぐ。本当のおばあちゃんではないけれど、一緒にこうしてお茶を飲んでいると、本当のおばあちゃんのような気がしてくる。

元々私は、義母に馴染めずおばあちゃんの家にはかり通っていた。いつも優しい笑顔で迎えてくれるおばあちゃんの、しわしわの手が大好きだった。良いことも悪いこともおばあちゃんには包み隠さず話し、真っ直ぐ私の言葉に耳を傾けてくれた。そのおばあちゃんも、今はもう、いない。

このアパートに決めて、本当に良かったなあとと思う。おたえさんのような優しいおばあちゃんや、頼りになる利人さん。そして住人もみんな良い人だ。律は、まだ少しわからないところもあるけれど、根っからの悪い奴ではないと思う。

ハーブティーを飲みながら心落ち着く優しい時間を過ごした私は、今夜はぐっすり眠れそう。

「それじゃあ、ご馳走様でした」

「いえいえ。また来てくださいね。あ、そうだ。律くんの部屋の鍵を渡さなくては」

結局、律は利人さんの家には来なかった。もしかしたら、まだ眠っているのかもしれない。

「利人さん、私でよければ鍵、渡しておきますよ」

「え、でも」

「鍵は律がちゃんと返しに行きますから。それに、どうせ私の部屋にいるだろうし」

「……では、お願いしてもよろしいでしょうか」

「もちろん」

こうして、利人さんからマスターキーを受け取り、三階から二階へと降りていった。

私の部屋の前に着くと、部屋から明かりが漏れている。確か、ベツドサイドのライトしかつけてこなかったはずなのに。もしかしたら、律が起きたのかもしれない。

部屋の鍵を開けて中に入ると、また、自分の家のようにくつろいでいる律がいた。ああ、また！ お気に入りクッションは、律の尻の下で潰されえている。しかも、勝手にキッチンで漁ったのか、コーヒーマドちゃっかり飲んでいないか。

「律！ 人の家を勝手に漁るなー！」

「別にいいじゃん。勝手に俺を置いてくのが悪い」

おのれ……！ さっきの言葉を撤回しよう。律が根っからの悪い奴ではない気がする、なんて嘘だ！

引くつく口元を押さえながら部屋に入り、律の前にマスターキー

をチラつかせた。

「ほら、マスターキー。これで部屋に入れるでしょ」

「お、悪い」

律が取ろうとしたところで、私はサッとマスターキーを上にあげた。

「ほらほら、お礼は？　めぐみさん、ありがとうございますーって
言ってごらん」

「……誰が言うか！」

律がゆらりと立ち上がり簡単に私の腕を掴みながら、鍵を奪い取る。いとも簡単に取られてしまい、あまりにもあっけなく意地悪は
終ってしまった。

それもこれも、私より背の高い律が悪い。

「んじゃ、どーもー」

マスターキーを、くるくると回しながら片付けもしないで部屋から
出て行った律。気が抜けた私は、そのままベッドに倒れこんだ。
いつもとは違う、私のベッド。

私の匂いをかき消すように、律の匂いが立ち込めるベッド。
それはほんの少しだけ、私の中でスパイスになる。

まわるよ、まわる。くるくる、まわる。

私の生活が、ゆっくりまわりだす。

15話 帰りたくない

「好きなんだ、アンタが」

「……は？」

「だから、好きだって言ってるの。日本語わかるだろ？」

「わかるわよ！　って、ええっ!？」

律が私ににじり寄り、手を握りながら愛の告白をしてきた。

眼鏡の奥にあるガラス玉の瞳が、今日もきらきらしていて、それでいて冷たくも見えた。

そんなことより！　律が私を、好きだってー!？

「そんな馬鹿なあああ！」

私の渾身の叫びと共に、体に鈍痛が走る。

あれ、あれ？　目を開いても、さっきまで目の前にいた律の姿が見えない。一体どうなってるの？

働かない頭で一所懸命考えた末、私は夢を見ていたということに気がついた。ちなみに体に走る痛みは、驚きのあまりベッドから転げ落ちたからのようだ。

「夢か……なんだ」

ホッとしたのも束の間。

律が私を好きだと告白する夢を見るなんて、どうかしてる。というより、夢は願望が見せるものなんて誰かに聞いた事がある気がする。

「願望！？ 違う違う！ そんなわけないだろう！」

両手で頭を押さえながら、ぐわああと一人で唸る朝。本当に一人暮らしでよかった。

やけにリアルな夢を見て、鼓動がバクバクと早鐘を打つ。

鎮めるように深呼吸をし、音が聴こえてしまわないように、手のひらで胸をぐっと押さえ込んだ。

こんな夢を見たのは、昨日このベッドを占領していた律の匂いが、ベッドいっぱいに移ったからだ。律の匂いに包まれて眠りについたのが、きつと悪かったんだ。

自分自身に言い聞かせるように、ベッドの脇で自己嫌悪に陥っていた。

「大丈夫大丈夫。こんな夢、何てことないわ」

職場についても、今日は上の空。だから何度も自分を納得させるように、「大丈夫」と呟いた。

でも実は、律の事が本当は好きになりかけていて、その願望が夢になって出てきたとしたら？

いやいや。それはないって。

あんなに私に対しての態度が酷いのには、それでも律を好きになるなんて、私はどれだけM体質なんだ。そんなことは、絶対にない。

仕事が終わって真っ直ぐ家に帰る途中も、今朝の夢が頭から離れずにいた。

もう……これは重症だわ。

一つ溜息を吐いては、立ち止まる。下を向いて歩くものの、足は一向に進む気配がない。

「どうしよう。帰りたくないな」

アパートに着けば、すぐ隣の部屋に律がいる。あんな夢を見た後だ、なるべく律の顔は見たくない。

ガッツと走ってびゅんっと部屋に入り鍵を掛ければ、大丈夫だろうか。でも、偶然会ってしまったら、どんな顔で律を見ればいいのかわからない。私一人で挙動不審なもの、なんとなく癪だ。

袖をまくり腕時計をちらりと見ると、すでに仕事を終えてから一時間も経っていた。職場から家までは歩いて十分圏内にあるというのに、足が進まないためにこんな時間に時間が経ってしまったようだ。時計の針は、午後七時半を指している。

「そうだ！」

パツと顔を上げて、私は家とは逆の方向に歩き始めた。良いことを思いついた。

家に帰りたくないなら、いつそのこと遅くまで帰らなければいい。そう思った私は、一人でも時間を潰せる場所へ向かったのだった。

＊＊

扉を開くと、そこは薄暗くてオレンジ色のやけにムードを高める明かりだけが、店内を照らしていた。カウンター席は六人が座れるようになっており、テーブル席は全部で五つだ。椅子を持ってくれば何人でも座れるよう、テーブルは全て丸テーブルを使用している。テーブルにもカウンター席にもキャンドルが灯されており、ムード満点だ。

少しドキドキしながら扉を開いたこのお店は、以前、友哉くんつぶつかったあのお店だ。

扉を開けたと同時に響く、ちりん、という鈴の音。風鈴とは少し違うこの音色が店の中に響き渡ると、カウンターの中间にいる店員がこちらへと視線を向けた。

「いらっしやい……って、あれ、めぐみちゃん？」

カウンターの中间のバーテンさんが、驚いた表情をして私を見つめる。

「友哉くん。早速来たよ」

ひらひらと手を振って、友哉くんに挨拶をした。友哉くんの顔を見たら少しだけホッとして、あんなに頭の中をちらついていた律の顔が、少しだけぼやけてきた。

コートを脱いでカウンターに座ると、あたたかいおしぼりを差し出され、冷え切った手にじんわりとぬくもりが戻る。

「嬉しいな。こうして早速来てくれるなんて」

「だって、興味があったんだもん。私、バーって初めてなんだ」

「そっかー。それじゃあ、バーとはこんなに良い所ってところを見せないとな」

そう言いながらニカッと笑う友哉くんは、白い歯を覗かせながら手際よくカクテルの準備を始めた。

「あ、友哉くん。実は私、あまりお酒は強くないから、弱めで作って欲しいんだけど」

「うん、知ってるから大丈夫。おいしい一杯を作るからね」

とても自然に友哉くんと会話をしていたが、ふいに友哉くんの言

葉が引つかかった。

私、お酒が弱いなんて、誰にも言った事がないのに。どうして知ってるんだろう？

彼とお酒を呑む機会があったのは、入居した日に利人さんの家で行われた歓迎会の時のみ。あの時だって、私は顔にも出さなかったし、片付けをしたりして席を外したりもしていた。それなのに、友哉くんは気付いてしまったのだろうか。バーテンダーの目は、誤魔化せないのかな。

「はい、おまたせ」

コースターの上に置かれたのは、薄い桃色が美しいカクテル。カクテルと一緒に出されたおつまみは、クラッカーの上にクリームチーズとスモークサーモンが乗っており、アクセントに刻んだシソの葉が添えられている。

おつまみも美味しそうだけど、まずはこの美しいカクテルを一口、ちびりと飲んだ。

「ん、美味しい。飲みやすくていくらでも飲めちゃいそう」

「ありがとう。でも、飲みすぎちゃ駄目だよ。って、バーテンがこんなこと言ったら、商売上がったりだ」

気さくなバーテンの友哉くんとの会話は楽しくて、時間はあっという間に流れていく。カクテルも何杯飲んだかわからない。でも不思議とほろ酔いしただけで、気分は悪くないのだ。お酒を飲んでこんなに気分が良いのは、久し振りだ。

今日は友哉くんが一人でお店を切り盛りしていたが、本当はもう一人、バーテンさんがいるらしい。それが友哉くんと共同経営している相方だという。相方さんは凄く無口で見た目は怖いけれど、その渋さがまたいい、と女性客に評判らしい。今度、是非お会いして

みたいものだ。

私が来店してから少しずつお客さんが増えていき、気がつけば席は全て埋まっていた。友哉くんも少しずつ忙しくなり、カウンターの中に留まる事が難しくなってきた。少しぼやっとした頭で彼の様子をみていたが、ちらりと今何時なのか気になって腕を捲る。すると、時刻はすでに、深夜一時を回っていた。

「わ、もうこんな時間！？ いけない、そろそろ帰らなくちゃ」

「めぐみちゃん。もう少し待っていてくれれば一緒に帰れるよ？」

もう遅いし、夜道は一人じゃ危ないよ」

「大丈夫！ ここから近いし」

コートを羽織り、バッグからお財布を出してカウンターにお金を置いた。そして友哉くんに「ごちそうさま！ すごく美味しかった。また来るね」と言うと、これ以上ないくらい友哉くんが嬉しそうに笑った。お日様のような彼の笑顔に見送られて、私は店から出た。

友哉くんと帰るのも悪くはないけれど、明日も仕事だ。これ以上遅くなったら、絶対に朝、起きられない。それにこの時間なら、律には会わなくて済む筈だ。

さすがに深夜なら、律だって眠っている筈。そう思い、私はアパートに向かって歩き出した。

夜の道はとても静かで、でも、真冬のような寒さはもうない道は、火照った体に心地良い。

街灯が、きちんと夜道を明るく照らししてくれる。それに、ほんのりと芽吹いていた桜の花が、いつのまにがちらほらと花を開き始めていた。

春はすぐそこ。季節もくるくると回っていく。

くるくる回っているのは季節だけではない。私の人生も回っていく。

——それはとても静かに、本人すら気付かぬまま、ゆっくりゆっくりと回っているのだろう。

16話 鳴り響く鼓動

帰り道に春を感じながら、すっかり良い気分アパートに辿り着いた。

階段を昇り、バッグから鍵を取り出す。そして鍵を扉に差し込んだ瞬間、夜中だというのにバンツと凄く大きな音がした。その音にびっくりした私は、思わずバッグを胸に抱きかかえたまま目を閉じ、その場にしゃがみこんだ。

「おっせーんだよ！」

先ほどの大きな音とは違うが、物凄い大きな声で怒声を発する男。それは私の隣人、律だ。

「アンタ、俺がどれだけ待ったと思ってんだ！」

「は、はぁ？　なんで私がいちいち、律に帰宅時間を教えなきゃならないのよ」

律に口答えた私は、ようやく今の時間に気がついた。

今はもう、真夜中。利人さんやおたえさん、美波さんも眠っている時間だろう。慌てて片手で口を押さえ、もう片方の手で律を部屋に引っ張り込んだ。

強引に律を部屋に入れ扉を閉めた私は、その場で律を睨みつける。

「こんな夜中に、そんな大きな声出さないでよ！　近所迷惑でしょ」

「あ……」

「やばい」という顔をして、律は口を押さえた。いやいや、もう

手遅れですよ。

でも、律もちゃんとわかっているようだ。他の人に迷惑をかけてはいけない、と。それならなぜ、私には迷惑をかけるんだ！

せっかくの良い気分が、すっかり削がれてしまった私は、溜息を吐きながら靴を脱ぎ捨て部屋に上がる。すると、律も同じように部屋に上がりこんできた。

「ちょっとちょっと、こんな時間に何よ」

「自分から手を引いて部屋に引きずり込んだくせに」
「うっ」

言い返せないのがムカつく。

でも、さっきは律の大声が部屋に引きずり込んだ原因だということ、わかっていただきたい。

反論しようとしたが、やめた。ああ言えばこう言う、律はそんな男だ。必要以上に体力を消耗するのはただけでない。諦めた私は、コートを脱ぎながら律に聞いた。

「で？ 何の用なの」

私が律に背を向けていたのが悪かった。律の方を振り向いた頃には、すっかり寛いでいるではないか！

「ここはアンタの部屋じゃない！」

卓袱台をひっくり返すが如く、律がお尻に敷いている私のお気に入りクッションをひっくり返した。そして律が転がる……その拍子に、床に頭を打った様子を見てしまった。

律が悪い。

一切同情せずに、私は律を見下ろした。すると、律がゆらりと起

き上がったのと同時に、別に戦えもしないというのにファイティングポーズをとる私。

絶対何か言われる、筈だ！

色んなことを覚悟しながら、律の動きを見ていた。でも、律は別に私に怒鳴りつけたり殴ったりせず、ただホッとした顔をしていた。起き上がった律が手にしているのは、一枚のプリント。それを見つけて、どうやら彼の用事は済んだようだ。

「いや、昨日さ。俺がここで寛いでる時に見てたプリントを忘れたみたいでさ。今度の授業で使うから探してたんだわ」

ぴらり、と見せてくれたプリントは、訳のわからない暗号にしか読めず、私には到底理解できないようだ。

「アンタにはわかんないだろ？ 馬鹿っぽいもんな！」

本当に、その口縫い付けてやろうか。

確かに私は馬鹿だけど、それでもちゃんと生活できる自立した女だ。とことん私を見下す律に、腹が立つ。

「じゃ、これで用はすんだから……て、アンタ何してんの」
「え？」

私の手には針と糸があり、目の前には律がいる。本気で律の口を塞いでやろうと思って、バッグにひそませているソーイングセットを取り出したのだ。

しかも無意識だった。危ない、私！

そそくさとソーイングセットをしまい、必死で笑顔を作る私の目の前に、律が鼻を近づけてクンクンと犬のように匂いを嗅ぎだした。

「やっぱり！ アンタ酒飲んできたのか」

「え。ああ、うん。友哉くんのお店に行ってきたんだ」

「友哉さんの？」

「そう。一度バーって行ってみたくて、今日行っただ」

「あー……そう」

あまりにもそっけない返事を貰い、私は首を傾げた。

なんで突然、そんなに機嫌悪そうになるの？ あ、もしかしてヤキモチだったりして。

本当は、律にそう言っただろうかと思った。だって律の慌てた顔とか見れたら、面白いと思ったんだもん。でも、私は次の瞬間、思い出してしまった。

今朝の夢。律からされた、告白の夢。

それを思い出した途端、律の顔を見る事が出来なくなり、私は一人で慌てた。そんな私の不審な動きに、律が何度も私の顔を覗き込む。

おーねーがーいー。どうか私をほっといて、自分の部屋に戻ってくれ！

心で叫んだ私の願いを律にわからせたくて、顔を背けながら手のひらで念力を送ってみる。

「頭でも打ったのか、アンタ。何してんだ」

「これは……ストレッチの一環で」

律から目を反らしたまま、私はおかしな恰好のまま止まっていた。何の、一体何のストレッチなんだ！

自らツツコミをいれ、急に恥ずかしさが溢れ出す。終わってる……私、色々終わってる！

こんな私を変に思った律は少し呆れてしまったのか、それとも同情してくれたのかわからないけれど、一つ頭にポンツと手を置いて、

何も言わずに部屋を出て行った。

バクバクと鳴り響く胸の音が、どうか律に伝わっていませんように。

17話 人生、いろいろ

「え、私ですか？」

「ええ。駄目かしら」

美波さんが朝、私のところにやってきた。それも、臨時アルバイトのお願いだ。

「えっと……私、お花にはあまり詳しくないんですけど」

「大丈夫！ めぐみちゃんだけじゃなくて、もう一人バイトの子はいるから。わからないことはその子に訊いてくれれば平気だから」

「はあ」

「ごめんね。本当はもう一人バイトの子がいたんだけど、どうしても入れないっていうし、私もその日はちょっと用事があって」

美波さんが目を伏せて、申し訳なさそうに私に言う。

どんな用事なのかは知らないけれど、とても困っているのはよくわかる。そんな顔されてしまったら、断るわけにもいかない。

「わかりました。その日は丁度、ジムのバイトもお休みだし。私でよければ」

「めぐみちゃん！ ありがとう、助かるわ」

そんなわけで私は、今度一日、花屋でバイトをすることになったのだ。

それにしても、美波さんの用事って一体なんだろう。用事なら定休日の火曜日に入ればいいのに、わざわざ仕事の日に入れるなんて。

美波さんの真面目さは知り合って短期間とはいえ、よくわかっている筈だ。だからこそ忙しい日曜日に用事をいれるなんて、珍しいと思う。

私があまりにも不思議そうな顔をしていたのだろうか。何も言わなかった筈なのに、その用事の内容を突然話し出したのだ。

「実はね、前の旦那と会わなくちゃいけなくて
「えっ」

さらに、と口にするには、あまりにもヘビーな台詞だった。

「前の旦那」なんてさらっと言うけれど、それって美波さんが結婚していたってことで……しかも離婚したということでもあるわけ
で。

目の前で微笑んでいる美波さんだけど、私は彼女にどんな言葉をかけたらいいいのかわからない。私は、美波さんにかける言葉を、ついに見つける事ができなかった。

そんな私の様子を見て、美波さんはにこりと微笑む。

美波さんの笑顔を見ているだけで、こんなにほんわかするというのに、一体どうして離婚なんてしたのだろう。

結婚なんてまだまだ考えたことない私には、夫婦のことなんて何一つわからない。ましてや夫婦の問題とは、他人にはわからないものが殆どだと思う。

……何があったのかな。

私にとって美波さんは、欠点なんて何一つ見つからないくらい良い人に見える。夢を叶えてお店を開き、その生き様に惚れ惚れするくらい。

だけど人間って、表面だけではわからないことは沢山あるんだなあと、実感。

美波さんに向ける言葉が見つからないまま呆然としていると、美波さんが小さく笑って私を見つめる。そしてゆっくりと頬にかかる

髪を耳にかけながら、私に言葉を向けた。

「ふふ。離婚の理由が気になる？」

「え！ いえいえ、そんな」

「今度、ゆつくり二人でお話でもしましょ。その時、色々聞かせてあげる」

小さくふふっと笑いながら、美波さんは行ってしまった。

白地に小花が散ったチュニックにジーンズという姿が、とてもお似合いの美波さん。そんな彼女の『影』の部分を、垣間見た気がした。

人生とは色々だ。それは私だって然り、だ。

何気なくすれ違う人や、いつも幸せそうな顔をしている人にだって、きっと数々のドラマがある。

くるくる回る、みんなの人生。辿り着く先に、幸せがあるといいのに。

強く、そう願ってしまう。

＊＊

部屋に戻り、ベッドの脇で充電している携帯を手にとった。

アドレス帳を開き、彼の名前を見つめる。すると、彼と過ごした時間が、ふつふつと走馬灯のように甦ってきた。

美波さんとは違う、私の『影』。楽しい時間も沢山あったはずなのに、一つの大きな嘘の為に全てが悲しい思い出に変わってしまった。何か一つでも違ったら、今頃私は、こんな風に過去を思い出して辛い気持ちになることはなかったのかな。

考えても仕方がないのは、よくわかっている。全ては終わったことだ。それなのにこうして思い出してしまうのは、やっぱりまだ未練が残っているからなのかな。

「ないない。未練じゃない」

首を横に振り、自分に言い聞かせる。

このまま部屋にいと、どうしても色々思い出してしまふ気がして、私は部屋から出ることにした。せっかく新しい生活を始めたのに、彼との思い出を一人で思い出しながら浸るのは嫌だ。

上着を羽織り、息の詰まりそうな部屋を出る。そして外の空気を大きく吸い込んで、ツクツクと嫌な音を立てる胸を押さえながら閉じた扉に寄りかかった。

「何処に行こうかな」

別に行きたいところなんて、何処もない。当てもなく彷徨うのも、楽しいかもしれない。今日は携帯もちゃんと持っているし、迷子になることもないだろう。

この前の迷子になった日、律が迎えにきてくれたことに感動した私。あの日から、少しずつ自分の中で、律という存在が大きくなっている気がする。でも、相手は年下だ。しかも学生。私になんて、目もくれないだろう。

律の顔を思い浮かべながら、ほんのちよっぴり、ズキズキと胸が痛むのがわかる。これが何の感情なのかはよくわからないけれど、とにかくチクチク痛むのだ。

「律なんて別に、好きじゃない」

よくわからない感情を忘れようと、私は前に歩き出す。

本当は気付いてるくせに。

この感情の正体を、ただ認めたくないだけ。

18話 タン麺返せ

この街に、スポーツジムはここしかない。

私が勤めているスポーツジムは、毎日沢山の会員さんがやってくる。それこそ朝から晩まで、絶え間なくやってくるのだ。

朝から昼にかけて主婦や年配の方がやってきて、昼から夕方にかけては学生がやってくる。そして夕方から夜は仕事帰りのサラリーマンやOLさんが、汗をかきにやってくるのだ。

よく続くなあ、などと笑顔を振りまきながら受付をし、自分なら絶対に続かないだろうと思う。

「また来たよ、めぐみちゃん。今日こそ一緒に食事しようか？」

さわやかに私の名前を呼ぶのは、ここの会員になって十年以上経つという男性だ。いつもこうして声をかけては、仕事上がったら食事にでも行こうと誘ってくる。

「また誘ってくださいね」

あくまでもお客様。不愉快な態度をとるわけにもいかない。それにしても、なんというか……積極的な男性だなあと思ってしまう。

私ってモテるのかしら？ などとは決して思わない。なぜなら彼は、すでに還暦を過ぎたおじいちゃんなのだ。

おじいちゃんがアクティブすぎる。まあ、本気で食事に誘っているわけではなく、こうして若い女性をからかっては楽しむのが彼の健康法なのだという。なんだそれ。

最近では元彼からの連絡もなく、こうしてジムの会員さんや職場の人たちとも仲良くなり、それなりに楽しく暮らしている。ただ時折、

妹から愚痴のような長電話がかかってくることだけが憂鬱だ。しかも律のことを、それはそれは詳しく聞いてくるのだ。あくまでも律は隣人であって、別に彼に関して詳しい情報を握っているわけではないのに。こうしてたまに探りをいれてくる妹には、もううんざりだ。そんなわけで、たまに着信があっても無視する事が増えてきてしまった。

今の私の住んでいるアパートの住所を知っているのは、家族の中でも妹だけ。何処で私が引っ越すことを知ったのかは定かではないが、引越しを決めてから妹に新しく住む場所を教えろ、とせっつかれたので仕方なく教えた。そしてこの前の突撃訪問……いやはや、あれには参った。

しかし妹もあれからさっぱり来なくなった。まあ、私としてはそのほうがありがたいけれど。

色々考え事をしながら仕事をしていたら、いつのまにか午後一時になっていた。

「お疲れ様、もう上がっていいわよ」

「あ、じゃあお先です」

今日はめずらしく一時に仕事は終り。午後からはずっと暇だ。

こんな日はお洒落でもしてショッピングするとか、図書館にでも行って本を読むとかすればいいのに、何もする気にならないのはどうしてだろう。

更衣室で着替えながら、これからどうするかを考えていた。時間はお昼を回ったところだ。どこかで食事でもしようかと思ったとき、前に友哉くんが大学の学食に連れて行ってくれたことを思い出した。確か一般の人でも使用してもいい、と言っていた気がする。

「学食行こう！」

別に声に出して言うことでもないけれど、なんとなくその場の勢いもあって、上半身はブラしかつけていない状態で一人、更衣室で叫ぶ午後だった。

ジムを出た私は、記憶を手繰り寄せながら大学までの道のりを歩く。そして、学食に行っても、律にはどうか会いませんように！と強く心の中で願っていた。

律が嫌いなわけではないけれど、まだ不確かな自分の気持ちを決定付けてしまう気がして、会うのが怖い。でも学食の安さには抗えない。貧乏が辛い！

そんなわけで、気配を消すように学食に出没した私。

私は空気、私は空気。などと自分に暗示をかけながら、野菜タツプリタン麺をお膳に乗せた。

そのままいそいそと空いた席に向かい、一人で目の前のタン麺に目を輝かせながら、胸の前で手を合わせる。

「いただきます」

一人暮らしをしているとどうしても野菜不足になりがちなので、こんな風に沢山の野菜を一気に摂れるのはありがたい。ラーメンは大好きだし、野菜は摂れるし、しかも二百五十円とリーズナブル。いやはや、学食万歳！

ラーメンを気取って食べるのは苦手。ずるずると豪快に麺をすすり、時折出てくる鼻水を拭きながら、さらにラーメンをすする。

「くーっ、うまっ」

誰にも聞こえないように、こっそり美味さを噛み締める。ラーメンもすでに半分くらい食べ終えていた。

口の中のしょっぱさを消そうとグラスに手を掛けたが、グラスの

中身がすでに空っぽだ。私はそのまま席を立ち、水を追加しに行った。水をグラスめいいっぱいに注ぎ席に戻ると、私の席に白衣を着た人が座っていた。しかも、私のラーメンを食べている……！

「ちょ、ちよつと！ それ、私のラーメン……」

麺をすする途中で声を掛けたため、口から麺がぶらさがっている。それをちゅるり、とすすったあと、テーブルに置いてある眼鏡をかけた白衣の人。それは、一番会いたくない男。

「律……おのれ、私のラーメンを」

「残して席を立つお前が悪い」

「水がなくなったから席を立ったの！ と言うか、それ、私の食べかけ。律は知らない人の食べかけでも、普通に食べちゃうの!？」

「まさか。アンタが食べてるのが見えたから食べてるに決まってるじゃん。馬鹿？」

完全に悪いのは律のはずなのに、どうなの。この言い包められよう。

コイツが好きとか、私……絶対に、ない。一時の気の迷いだ。そうだそうだ、絶対そうだ！

わなわなと拳を震わせている間に、律はラーメンを全て平らげてしまった。せっかく安く安くて満腹になると言って学食に来たというのに、お腹が満たされないまま律に完食されてしまったなんて。

眉間の皺が、深く刻まれた午後の昼下がりに。

19話 自分の気持ち

ああタン麺……私のタン麺があ。

脳内では律に出会ってしまったことよりも、タン麺でいっぱいだった。

「食い意地張りすぎ」

しれっと口元を拭きながら、律が呆れたように言う。ラーメン井の中は、もう汁一滴も残っていない。しかも楽しみに取っておいたうずらのたまごまで、綺麗に食べてしまった。

「うずらあ……楽しみにしてたのにつ」

「ガキか。うずらくらいで文句言うなよ」

席からガタンと立ち上がり、空になったお膳を持ち上げる。どうやら食器は片付けてくれるようだ。それにしてもうずら……。タン麺にうずらって珍しいなと思うけど、実は密かに好物なので最後に食べようと思っていたのに。うずらを先に食べなかったことが、今更ながら悔やまれる。

律。食べ物の恨みというのは怖いのだよ。私はこの恨みを絶対に忘れない。大人気ないと言われようが、いつか絶対、律にタン麺を驕らせてやる。腹黒さ満点の笑みを浮かべながら、私は律の後姿を見送ったのだった。

食器を片付けている律を見ていたら、ちょこちょこ女の子に声をかけられている。友達だろうか？ でも声を掛けた女の子は嬉しそうに頬を染めながら、きらっきらの笑顔を振りまいている。律に気

があるのかな。まあ、白衣姿はなんかグツとくるものがあるし、眼鏡だし、背も高いし、顔の造りもなかなかだし……。確にかっこいいのは認める。

「え、認めちゃうの!？」

自分の心の声に突っ込みを入れる私は、最近イタすぎるキャラになってしまった気がする。学食にいる人たちにじろじろと不審そうな目を向けられ、私はそそくさと学食から出て行った。

学食を出て、ばくばくと速まる鼓動を感じながら、自分自身に問い掛けた。

——私、本当に律のこと、好きになっちゃったの？

いくら訊いてもその答えは絶対に返ってこないのはわかっているのに、何度も自分に問い掛けてしまう。

いくら見た目が良くても、律の口の悪さは天下一品だ。いつも彼の口には敵わない。でも、私は優しい彼の一面も知ってしまった。

だから、好きになったというの？

信じられない思いを抱え、どうしたらいいのか、またわからなくなってきた。

自分の気持ちなのによくわからないなんて、どういうことなの？ もやもやと気持ち悪い胸の内を、早々に晴らしてしまいたい。大きく溜息を吐きながら、私はずるずるとその場にしゃがみ込み、整理しきれない頭を抱えた。

「おい、何しやがみこんでるんだよ」

頭上から降ってくる、律の声。ちらりと彼を見たものの、その顔を見ているのが辛かった。すぐに頭を抱え込み、早く律の前から立

ち去ろうなどと、そんなことばかり考えていた。

「まさか具合悪いのか？ 医務室行くか？」

少々うろたえているのか、律の声が心配そうなもの変わる。違うの。具合が悪いわけじゃなくて、真っ直ぐ律を見るのが辛いだけ。

律が私を心配してくれるのが悔しいけれど、とても嬉しい。この時だけは、私のことだけを考えてくれているような気がするから。こんなことで嬉しいと思うなんて、これはもう、自分の気持ちを否定できないような気がする。

顔を上げて律に顔を向け「大丈夫」と微笑むと、律の心配そうに強張った顔が、ほんの少し緩んだ。

「まったく、心配かけるなよ。ややこしいことすんな！」

ぷいっとそっぽ向きながら、呆れたように溜息を吐く律。でも、その姿すら愛おしく感じてしまう。

やっぱり律のことが、好きなんだ。

そんなことはない！ と自分に言い聞かせても、胸の真ん中にすんと落ちてきた「好き」という言葉。それを打ち消すのはもう、無理だ。

目の前にいる、片眉を吊り上げ不機嫌そうにしている律。これが私の好きな人。

律はこのあとの授業のため、私の前から足早にいなくなってしまった。けれど、ほっとかれたわけではなく、最後にはちゃんと「気をつけて帰れよ」と優しい言葉を添えてくれた。まあ仏頂面で言われたので、優しいのか面倒だと思ったのかはわからないが、優しさだと思っておこう。

去り際に言葉と共に頭に手を乗せられ、思わず胸が高鳴った。久々に『ときめき』という感情が甦った気がする。

「ときめきだなんて、乙女か！」

と、自身にツッコミを入れつつも、にやける顔を抑える事が出来ぬまま、弾んだ足取りでアパートへと帰っていったのだった。

＊＊

部屋に入り、今日のことを思い出す。仕事だってあったしタン麺だって取られてしまったのに、思い出すのは律の顔ばかり。ごろんごろんとベッドに横になりながら、何時間だって律のことを考えていられそうだ。まったく、恋ってやつはこれだから！

どれくらい時間が経過したのだろうか。律のことばかり考えていたら、部屋の中が薄暗くなっていた。私はそのまま部屋の明かりをつけ、テレビのリモコンを手の取った。夕方この時間なら、ニュースがやっているはずだ。ニュースを観ながら今日の夕飯を考えよう、そう思った時のことだ。

「なにこれ。んまそう」

ニュース番組の特集で、今話題のコンビニスイーツが取り上げられている。しかも、どれも美味しそうな上安価。この特集を観て、財布片手に部屋を飛び出した私は、本当に流行に乗せられやすい女だなあと痛感した。

近所のコンビニで、たった今特集で紹介されていたスイーツの最後の一つを手に入れた。それは甘美な優越感に浸りながら、夜道を鼻歌混じりのスキップで帰っていった。

「うふふ。スイーツスイーツ！」

るんるん気分でアパートの階段に足を掛けると、背後から荒い息遣いと搾り出したような低い声がする。

ゆっくりと振り返りその声の持ち主を見た瞬間、体から血の気が引いた。

「……やっと、会えた」

この声も、この姿も、まだ私は忘れる事が出来ない。いつまでも脳裏にこびりついて離れないのだ。忘れられる方法があるなら、誰か教えて欲しいくらい。

そう。この人は、かつて私に大きな嘘をついたまま三年間付き合った男。

二度と会うことはない、そう思っていたのに。どうして突然ここに現れたのか。

「めぐみ」

真剣な話をする時は、必ず私を「めぐみ」と呼び捨てにする。普段は「めぐちゃん」と呼ぶのに。

ストライプのネクタイを緩めて、スーツの前ボタンは全開。少し乱れたスーツ姿の男は、私の元彼だ。

時の動きが停止するかのように、私の体も頭も動かない。そして私の瞳には元彼の姿だけが映され、目を反らすことも許されない。

二人の影がいつのまにか月明かりに照らされて、くっきりと浮かび上がる。

動けない二人。呼吸すら忘れてしまうほどの衝撃を受けた。

20話 嵐は目の前に（前書き）

*少々残酷なシーンがあります。

20話 嵐は目の前に

息が止まりそうなほどの衝撃だった。

突然現れたアノ人が、私だけを眼に映す。

「……やっと見つけた」

そう言われて私はハッと我に返る。

なぜここがわかったのか。私は引越する時、誰にも内緒でこっそりと引越したはずなのに。この場所を知っているのは、妹の萌だけだ。でも萌と彼は面識もない。それなのに、どうしてこの場所を知っているの？ 質問したくても、驚きのあまり声も出ない。

「俺の話を聞いてほしい。頼む、めぐみ」

真剣な眼差しを向けながらそう言って、一步、私に近づく。

びくり、と自分の肩が震えるのがわかった。彼とはもう、よりを戻すつもりはない。このままなし崩しに彼に言い包められ首を縦に振ってしまえば、またあの不健全な関係が再開されてしまう。それだけはどうしても、嫌だ。

私の頭も体も、彼に触れてはいけないと言っている。

「……話なんて、ない」

ようやく出た、拒絶の言葉。

言葉と共に私は階段を駆け上がり、バッグから鍵を出して扉を開く。追いかけてくる彼を振り切るように扉を閉めるつもりだったのに、走る早さも、私を捕まえる彼の腕の長さも、思った以上に速い。扉を開き、部屋に入る直前で捕まえられてしまった私の腕に、鈍い

痛みが走る。強く掴まれた腕を振りほどこうと、上下に動かしてみた。でも、振りほどくことは叶わなかった。それどころか逆に、彼が私の腕を押し付けるように、私を部屋の中に押し込むと、自分も一緒に入り込んだ。その時、ガサリと音が聞こえたけれど、今はそれどころではない。

部屋に入り込んだ彼が私の両手首を掴み、何度も「話を聞け」と懇願する。でも、聞きたくない。聞いたところで私達の関係が、前と同じように戻るわけではないのだから。

「めぐみ。本当に俺ともう一度付き合ってくれ」

「無理」

「ほら、離婚届に俺はもうサインしたんだ。あとは妻が書いてくれればそれで俺はフリーになる」

「そういう問題じゃない」

「めぐみ！」

何度も私の名前を呼ばないで。これ以上、私の気持ちを掻き乱さないで。

何を言われても彼の顔を見る気はない。それなのに、無理矢理顎を掴まれ顔を上に上げられてしまった。そこには、初めて見る彼の悲しい顔があった。

彼にこんな顔をさせているのは、私。

彼を追い詰めているのも、私？

でもね、私だって凄く傷ついている。あんなに大きな嘘は、もう沢山なの。だから彼が離婚すると言っても喜べないし、以前のような関係にも戻れない。

電気もついていない部屋に、二人きり。こんなことは何度もあったのに、今日はなぜか怖い。

よく知っているはずの彼が、知らない人に見える。

少しずつ間を詰めてくる彼が、怖い。怖くてたまらない。

掴まれた腕が引き寄せられ彼の腕の中に捕らえられると、有無を言わずに唇を奪われた。固く唇を結んでいたが舌先で割り入るよう唇を開かれ、内部に侵入を許してしまった。そのまま体をベッドに押し付けられると、ようやく唇が解放された。

「……こうやって、無理矢理抱けば戻ると思ってるの？」

「違う、そうじゃない。こんな無理矢理したいわけじゃないんだ」

「この状態は無理矢理じゃないの？　こんなことされたって、私はもうあなたと付き合えないよ！」

「このっ……！」

静寂を破る、乾いた音。音と共に訪れた、頬の痛み。

思うようにならなくて、自分の言い分をわかってもらえなくて暴力を振るう彼。

私を叩いた彼が、顔面蒼白になっている。だって、人に暴力をふるうような人じゃないもの。きっと、良心の呵責に苛まれているんだ。

でも、もう引き返せないと悟ったのだろう。私を抱く時のような優しい手が、今日は乱暴に動き出した。

お気に入りのブラウスのボタンが弾け飛んだ。開いた胸元に押し付ける唇が荒々しくて、自暴自棄になっている彼を止める事が出来なくて、私は抵抗することさえ疲れてしまった。

どうしてこうなったんだろう。何度も「戻れない」と、私の答えは出していた筈なのに。

ゆっくり伝う涙が、シーツを濡らしていった。

何も考えられずただ人形のように横になっている私を、もどかしい気持ちを抱えたまま抱きしめる彼が、なんだか哀れに感じる。

早まる呼吸と乱暴な唇が、私の胸で踊り狂う。そして思いつめたように彼が言う。

「お前を大事にしてやれるのは、俺だけだ」

何を身勝手なことを言っているのだろうか。あなたは大事になどしてくれなかったというのに。あまりにも滑稽すぎて、笑いすら出てこない。

私は大事にされることを前提に付き合っていたわけではないのに。ただ好きで、側にいたくて一緒にいた。ただそれだけ。

目を伏せようとした時、壁に掛けてあるショールが目に入った。それは以前、律が私に掛けてくれたショール。

駄目だ。このままじゃ、もう……律に会えなくなってしまう。せっかく自覚できたこの恋を、手放したくはない。律の顔が浮かんだ瞬間、人形になりかけていた私の体に、力が漲った。

「離して！ 私達はもう、終ったはずでしょ！？」

「終らせない。これから始める」

「そんな身勝手なこと……私はもう、他に好きな人がいるから無理」

荒々しく体をまさぐる手が、一瞬ぴくりと動いたまま止まってしまった。その隙に状態を起こし、ベッドの上で乱れた服を直した。

弾け飛んだボタンの部分が、事の荒々しさを物語る。手繰り寄せでも止まることのないブラウスが、私の胸元を曝け出す。

このブラウスは、もう着られない。気に入っていたのに。せつかく春に合わせて新調したものだつたのに。

一瞬の沈黙の後、動きを止めた彼が突然、声を出して泣き出してしまった。流石にそれには驚いた。しかしもっと驚いたのは、泣いたと思ったら笑い出したこと。額を押さえて、突然高笑いしだした彼を、私はただ目を見開いて見つめるしかできなかった。

掛ける言葉も見つからない。伸ばす腕は持ち合わせていない。ひたすらこの嵐のような笑いが収まるのを待つしかない。

「人がこんなに悩んで離婚届にサインしたのに、お前は好きな人が出来ただって？　はは……傑作だな」

「何を言ってるの？　悩んだのは私の方……」

「腹立たしい。ただただ、腹立たしい」

そう言って私を見据える彼の目は、怪しい色を帯びていた。そしてその後続く言葉は、戦慄の響を含んでいた。

「――滅茶苦茶に、犯してやりたい」

21話 終止符

ゆっくり伸びてくる彼の手が、そっと私の頬を撫でる。

「やっ……」

もう壁ギリギリまで追い詰められていたのに、さらに後ろに行こうと身を振る。

ギシリとベッドが音を立て、それがやけに耳に響いた。

目の前にある彼の瞳を直視できず顔を背けると、頬を撫でていた彼の手がゆっくり離れていった。

怖さで目を固く瞑った私は、そっと目を開いてみると、彼の顔から先程の怖さが消えていた。

「そんなこと、しないから。出来るわけないだろ。俺はめぐちゃんが好きただけだから、嫌がるようなことはもうしない」

「あ……」

ホッとして体から力が抜けていくのがわかる。

もう、目の前にいる彼が怖いと思うこともなくなった。

「好きな人が出来た、か。流石にそれはショックだったな」

「……ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。悪いのはどう考えても俺だから」

ショックを隠すように浮かべた笑みが、あまりにも痛々しい。でも、もう彼に手を差し伸べて抱きしめてあげることにはできない。

傷つけたのは、私の言葉。

誰からも好かれようなんて思っていないけれど、自分の言葉が誰かを傷つけるのはとても辛い。でも、掛ける言葉も見つからなかった。私はただ、目を伏せるだけしか出来ない。そんな私の気持ちに察したのだろうか、彼は私の肩をぽんと一つ叩き、そして力強く掴んだ私の手首をそっと取り、逆の手で私の左頬に触れる。そして申し訳なさそうな表情を向け、優しく赤くなってしまった部分を撫でてくれた。

「ごめん。こんなに赤くなっちゃって……。肌が弱いこと知っていたのに」

「大丈夫。すぐ治るよ」

「ごめん。本当に、ごめん」

握られた手に、ぬくもりが伝わる。かつて、このぬくもりに、私がどれほど救われてきたか。

私は何も言わずに、ただひたすら謝る彼の姿を見ていた。しっかりと良い空気が、私達の間に流れていた。しかし、そんな空気をぶち壊すように、玄関の扉が乱暴に開かれた。

「めぐみ！」

はい。こんなシーンで律が登場。

律……遅いいいっ！

その後、部屋にズカズカと入り込んだ律は、私の手を握っている彼を引き剥がし、襟ぐり掴んで睨みつけた。今にも殴りそうな律の態度に少々焦りはしたが、彼はじいっと律を見つめたまま動かないままだ。そして、そんな姿のまま、彼がぼそりと呟いた。

「……もしかして、例の人は彼？」

「えっ！？ あ、いや、その……う、うん」

勘が良い彼は、私の好きな人が律ということを知り、見抜いてしまった。まあ……バレて困ることはないからいいけど。

律は私達の会話がわからなくて、一人でポカンとしている。そんな律に彼はにっこりと微笑み、気さくな感じで律の肩に手をかけた。

「そうか、そうか。君のことか？ はっはっは」
「は？」

不機嫌そうな律。それもその筈。一体何のことを言っているのかさっぱりわからないのだから。怪訝そうに眉を寄せた律が、訝しげに彼を見る。そんな律に、彼がその後、とんでもない置き土産を置いていった。

「うーん、実に不愉快だね。これはほんの、八つ当たり！」

「八つ当たり！」の言葉と同時に繰り出された頭突きは、律の額にクリティカルヒットした。

はい。律、撃沈。

くらくらと星を飛ばしながら床にへたりこむ律は、なぜ頭突きをされたのかわからないままだ。彼はといえば、ばんばんと手を叩きながら豪快に笑っていた。そして、乱れたスーツを正して、私の方を向く。

「ほんのちよっとスッキリしたかな。……めぐみ、さようなら。もうこれっきりだ」

「ありがとう。ごめんなさい……さよなら」

寂しげに、でも穏やかな微笑みを浮かべながら、私の部屋を去っていく。

ああ。もうこれで終わりなんだ。私と彼の付き合いに、ようやく終止符が打たれたのだ。

楽しいことも悲しいことも沢山あったけれど、それでも確かに私は幸せだった。それだけは間違いない。

「本当に、さようなら」

それでもう、おしまい。私は、後ろを振り返らない。

彼との思い出に浸りながら、私はようやく携帯から彼のメモ리를消す事が出来たのだった。

色々な思いに浸りながら、携帯を閉じた私。そんな私を恨めしげに睨み付ける視線が痛い。

「おい、こら。なんだアイツは……」

「ああ、大丈夫？ おでこ割れてない？」

「人の質問スルーすんな！ なんだよアイツは！」

「……元彼です」

ピタリと動きを止めた律が、余計わからないという顔をする。

時折、頭突きされた額を撫でながら考え込むけれど、いつまで経っても頭突きされた原因はわからないそうだ。すまない、律。

その後、律がハッと気付いたようにゴソゴソと何かを探っている。そして背後から取り出したのは、私がさっき買いに走ったスウィーツが入ったコンビニ袋。中のスウィーツは、床に落としたせいでぐちゃぐちゃだ。

このスウィーツが私の部屋の前に落ちていて、不審に思った律が色々なことを想像し、私の部屋に強盗でも侵入したのでは？ と思っ
て駆け込んでくれたらしい。惜しかったな。もう少し早ければ、少女マンガのヒーローみたいに決まったのに。うん、実に惜しい。

落としてぐちゃぐちゃになったとはいえ、スイーツの中身は無事だ。私は袋から取り出して、そのうちの一つを律に差し出した。

「ぐちゃぐちゃだけど、きつと美味しいよ。律も一緒に食べよう？」
「ん。まあ、しょうがないから食ってやる」

可愛げのない返事をしつつも、スイーツは美味しかったらしい。だってあつという間に食べきってしまったのだから。

無心にスイーツを頬張る律はなんだか可愛くて、微笑ましいなあと思いながら律を見つめていた。が。

「それにしても、アンタ結構おっぱいあるんだなあ」

食べ終わったスイーツに使用していたスプーンの手で、私の胸をつん、と突く。

ブラウスのボタンが弾け飛び、肌が露わになっていることをすっかり忘れていた。

「によわあああ！」

色気もへったくれもない悲鳴を上げ、律の頭をクッションで叩いた。ぼふぼふと鈍い音を立てながらも、律の目は楽しそうに私の胸元を見る。

「やめろって、もう見ねーから！ ほら、本当に……ストロップ！」

律に手首を掴まれ、私の動きが止まる。その時、ビリリツと手首に痛みが走った。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ痛そうに眉をひそめたのを律に見破られ、赤くなった手首を律に見られてしまった。それを見た

律が、怪訝そうに眉をひそめる。

「なにこれ……。もしかして、アイツ？　その赤くなった頬もアイツか？」

「や、その。違うの！」

「それにこのブラウスだって、ボタンが弾けてんじゃねーか」

「それは、その」

「何があった？」

詰め寄る律が、ちよつとだけ怖い。それに、さっきの恐怖感までじわじわと甦ってしまった。それでも気丈に努めようと、ちよつとだけ引きつった笑顔を見せた。

「あの、大丈夫だから。大丈夫……夫」

「大丈夫？　何が大丈夫か言ってみろよ」

真剣に覗き込む律の瞳。ガラス玉のように透き通っていて、でも、以前感じたような冷たさは欠片もなくて。ただ真実だけを映そうと、まっすぐ私を見つめる。

その瞳に、私は負けてしまった。

魔法の呪文「大丈夫」は、どうやら効かなくなってしまったらしい。

次第に律の顔がぼやけてきて、ついに部屋の様子まで見えなくなってしまった。

「大丈夫じゃ、ない……」

ようやく出た言葉。可愛げはないけれど、初めて人の前で素直になれた気がした。

飲み込んできた恐怖。心落ち着かせるために何度も呟いた「大丈

夫」。それも今日で終りだ。

溢れ出た涙が、洪水のように流れ落ちる。そんな私を包み込むように抱きしめてくれたのは、律。

泣き止むまでずっと、律が何も言わずに抱きしめてくれる。

その時間が、少しでも長く続けばいいのに。そんな不謹慎なことを考えていた。

22話 君と朝まで

怖かった気持ちを閉じ込めて大丈夫なフリをしたのに、どうして律はそれを見破れるの？

律の前で素直に泣けた自分にちょっとだけ驚きはあったけれど、抱き寄せられた胸はあたたかくて、背中に回された律の腕は優しく背を撫でてくれる。素直になるって、こんなに良い事が待ってたんだなあ。今まで色々我慢して人に甘えてこなかった私は、なんだかちょっとだけ損をした気分だ。

そういえばさっき、律が部屋に入ってきたときに一つだけ違和感を感じただけけど、それは何だったのかな。そんなことを考えているうちに瞼がどんどん重くなって、ついに私は意識を手放してしまった。

「おい。まさか寝てるんじゃないだろうな」

「……むう」

「このまま寝る気か」

「むう」

律が話しかけているのはわかるけれど、何を言っているのかはさっぱりわかっていなかった。だって、凄く眠いんだもん。

眠い、眠い。急激に襲われた睡魔を、一体どうすればはらうことができるのだろうか。何度も私に声をかける律の声が、心地良い子守唄に聴こえてしかたがない。でも、起きなくちゃ。このままじゃ律が眠れないから。

「むうー！」

「うわっ！ やめ……！」

ぐりぐりと鼻を押し付け、目を覚まそうと必死な私。押し付けているのは、律の胸。一気に体重を律にかけすぎて、ベッドに腰をおろしていた律を、そのまま押し倒してしまった。

あ、なんか眠りやすいかも。

体が横になり暖かい律の体温と、とくとくと優しい心音で、私はすっかり眠りに落ちてしまった。

「……この、馬鹿女」

律が呟く言葉は聞こえなかったけれど、私の背中に回っている律の手が優しく撫でてくれている。

えへへ。あったかい。

どうやら今夜は、ぐっすり眠ってしまいそうだ。

＊＊

ちゅんちゅんって、すずめが楽しそうに囀っているのが聴こえる。今日も快晴。窓の外はすっかり、朝の清々しい空気を纏っていた。

そんな中、一体これは何事？

思考回路が途絶えてしまうほどの光景が、目の前にある。

なんで？ どうしてここに律がいるの？ えっと、ここは私の部屋のはずですよ？

目覚めてから上体を起こし、すぐに気がついた。

——隣に、律が眠っていることに。

一緒に、寝たってこと？ どうしてこんなことに……！？

頭を抱えて一所懸命昨日の記憶を辿ってみたけれど、一向に思い出せない。

「はっ！ まさか律のやつが私を……！」

「おめでたい頭の持ち主だな、アンタは」

そおっと隣の律を見ると、あわわ……めっちゃ不機嫌そうな顔している。

ずれた眼鏡を掛けなおし、頭を掻きながら大あくび。そしてゆっくりと上体を起こす律。

ふおお……寝ぼけた顔もまた、可愛らしいじゃないの。

完全に色ボケた台詞を胸に、まじまじと寝起きの律を覗き込む。

うーん、眼福眼福。

「ジロジロ見るんじゃないねー」

ちよっと恥ずかしそうに目を反らしながらそう言い、枕に顔を埋める様がやたら可愛い。

そうか。律は可愛い系だったのか……。

なんてアホなことを考えながらベッドから降りた私に、律が声をかける。

「もう、大丈夫なのか？」

「ん？」

「その、昨日、アンタ怖い思いしただろ？　それで泣いてたから」

「あ、そういえば」

昨日の怖さなんて、もうすっかり忘れていた。

あの怖い台詞も、力強い腕に掴まれた手首のことも、すっかり忘れていたのだ。

だって、律が側にいてくれたから。だから大丈夫なんだよ。

……なんて可愛い女の子の台詞を真っ直ぐ言えたら、私と律の関係は少しずつ変化するのだろうか。いや。すんません。言えませんがね。こっぴどかしい。

とりあえず私達はベッドから立ち上がり、お互い目も合わさず終始無言を貫いた。なぜって？　なんとなく気まずいから。別に恋人でもないのに朝まで同じベッドで眠っていたら、妙な空気が流れるのは当たり前だ。特に私は律を意識しているので、恥ずかしさが倍增。変な寝顔を見られなかったのか、それがとても心配だ。

「……俺、戻るわ」

背中から聞こえてきた、小さな呟き。振り返ると律はすでに玄関で靴を履き始めていた。ドアのノブに手を掛け、扉が少しだけ開く。あ、行っちゃう。

そう思った時、思わず彼の名前を呼び、戻ろうとする律の服の裾を掴んでしまった。これはもう、無意識で。

「何？」

「えっと、その……ごめんね？」

「別に、いーけど……」

そう言った律の顔は、ほんのり赤い。

「じゃ」

短い挨拶をして、そのまま私の部屋から出て行ってしまった。

パタン、と静かに閉められた扉。私の部屋は、あっという間に静けさを取り戻した。でも、今日はその静けさが、どことなく寂しく感じる。

私の事が苦手だと言っていたのに、どうして朝まで付き合ってくれたの？　本当に私のこと、苦手なの？

律のことばかり考えては、手を伸ばして彼を引き止めたくなくなる。けれど、前に苦手と言われてしまったからか、その一歩が踏み出せ

ない。そんな臆病な自分がじれったい。

友達でもいい。だからせめて、私を「苦手」な相手というカテゴリから外して欲しい。沢山の友達の中に紛れてもいいから、もう少しだけ私を知ってほしい。

律が寝ていたベッドに身を沈め、彼の匂いをいっぱいを感じ、ぎゅっと抱まれたように切ない胸を押さえながら、瞳をゆっくり閉じたのだ。ああ、なんてほろ苦い気持ちなのか。

22話 君と朝まで（後書き）

23話 隠し事、ひとつ

翌朝、なんだかいつもより目覚めよく起きられた気がする。うるさいくらいアラームが鳴り響く中でも平気で眠れる私が、アラームをセットした時間よりも早く目覚めたのだ。しかもすっきりと気持ちよく起きられた。

「なんかいいことあるかもー！」

ただ目覚めが良かったただけなのに、ついこんなことを口走ってしまう。おめでたいおつむの持ち主だなあ、私。でも、これくらい密かに思ったっていいでしょ？

毎朝朝食を食べる習慣がない私だけど、今日は早起きしたのだ。久しぶりにどこかでモーニングでも食べようかと思い、掛け布団を勢いよく上からどかした。

二十分ほどでしたくを終えた私は、最後にお気入りのスプリングコートを羽織り、扉を開く。外の空気が春のように暖かい今日は、薄手のスプリングコートが丁度良い。

ベージュのスプリングコートに桜色のストールを巻き、ダボツとしたジーンズの裾をくると捲る。足首を出して、ストールとお揃いの桜色のパンプスを履いたら、気分はすっかり春色だ。

「うーん。春らしくなってきた」

大きく背伸びをし、扉を閉めて鍵をかける。そして階段を下りようとしたところで、朝日を浴びた金髪が目に入った。それは友哉くんのトレードマークの金髪だ。

目の前の柵に手を掛け、友哉くんへ声をかけようとしたその時。

がちゃ、という音が耳に届く。その音の方を見ると、そこには律が眠たそうに大あくびしながら部屋から出てきたのだ。

「お、はよ」

「……はよ」

律と目が合い思わず挨拶をしたものの、二人の間に微妙な空気が流れる。挨拶をしたきり、お互い何も言わずに階段を下りていった。階段を下りると、そこには友哉くんがバイクの前でしゃがみこみ、何かをしている姿が見える。律と二人きりの空気があまりにも重すぎて、その背中に助けをつい求めてしまう。ささっと友哉くんの背中に駆け寄り、友哉くんの肩をポンと叩き「おはよ」と言った瞬間、友哉くんの異変に気がついた。振り向いた友哉くんの顔が、いつもとかなり違っていたのだ。

「どとどーしたの!? その顔」

「あー……これ？」

友哉くんの左頬に大きな湿布が貼られていて、口元も少し切れているのか、少々色が変わって紫色になっている。

私も律も友哉くんの姿に驚きを隠せなかった。けれど友哉くんはちよつと苦い顔をしながらもケラケラと笑い、その湿布を貼った経緯を話し出した。

「実は深夜にさ、店でちよつとした喧嘩があってね。見ただけでわかったけど、あれは不倫関係なんだろうな。その不倫関係の二人のところに男の奥さんが乗り込んできてさ、それで女同士の殴り合いが始まっちゃったんだよ。それを止めようとしたら、俺の左頬に見事な拳が繰り出されたってわけ」

苦笑いをしながら経緯を説明してくれた友哉くん。彼は完全に被害者だ。そして「不倫」という二文字に、私の胸がズキッと痛んだ。もしもあのまま彼と付き合っていたら、私だって殴り合いに発展するようなことになっていたかもしれない。そう思ったら、ちゃんと彼にさようならを言えてよかったなあと思う。しかしここで、律の言葉が私の胸に大きく、そして深く突き刺さった。

「不倫するなんて馬鹿としか言いようがないな。男も馬鹿だけど女も馬鹿だな。俺は不倫しているやつなんて、気持ち悪くて一緒にいるのも嫌だな」

吐き捨てるように律が言う。その言葉は、まるで私に向けられたようで、大きく私の胸を抉る。好きでしていたわけではないけれど、結果として私は不倫をしていたのだ。でも、律はそのことを知らない。

気持ち悪い、か。そういわれても仕方ないのかもしれない。

それから私は、ますます律と目を合わせる事ができなくなってしまったのだった。

友哉くんと別れ、律とも別れた。そして私はそのまま喫茶店に行こうと思っていたのをすっかり忘れて、ぼーっとしながら歩いていった。辿り着いた場所は公園。お年寄りが散歩したり、通勤通学前にジョギングしている人なんかで溢れかえった公園は、賑やかそのものだ。でも、私一人だけが、その中で浮かない顔をしている。

律が好きだと確信したところであんなに、あの言葉。気にならな
いわけがない。きっと私の過去を聞いたら、律は軽蔑の目を私に向けるはず。それだけは、嫌だ。絶対に律に知られたくない。この事を知られて律に拒絶されることを考えただけで、悲しくて身も心も

千切れそうなほど痛い。だから私は、何としてもこの事実を隠し通す。今、そう決めた。

公園のベンチで、一人力強く拳を握り締める。この先、律に過去の不倫のことを知られないように隠し通す為、自分なりに気合を入れた。

「絶対に……知られたくない」

ぎゅっと強く拳を握り、これから先もずっと律に隠し事をしていく覚悟を決めた朝だった。

23話 隠し事、ひとつ（後書き）

明日は更新お休みさせていただきます。すみません。

24話 心、鎮めて

結局モーニングを楽しむことなく、近所のコンビニでおにぎりを一つ買っただけで家に帰ってきた私は、テレビをつけて朝のワイドショーを眺めながらおにぎりを頬張っていた。少しでも開けた窓からは、賑やかな話し声が時折聴こえてきて、一人部屋でおにぎりを頬張ることに寂しさを覚えた。

テーブルに置いた冷たい麦茶を喉に流し込み、喉につかえていたご飯を無理矢理流し込む。ようやく流れたご飯にホッとして、静かにテーブルにグラスを置いた。

「……はあ」

言いようのない寂しさが、急に背中から襲い掛かってきたような気がした。

先ほどの律の言葉が、思いがけないほど自分の胸に大きく突き刺さっているようだ。この先、彼に不倫のことを知られないように生活していくのは、それほど難しいことじゃない。でも、律の顔を見るたびに、彼にとって自分は汚らわしい存在なんだと深く思い知らされることになる。それだけが、辛い。

部屋の中で賑やかな話し声がテレビを通じて聴こえてくるが、それすら私の耳には届かない。ただひたすら、律の言葉を思い出し、胸が痛むだけだった。

「大丈夫、大丈夫」

きっともう、呟くこともないだろうと思っていた言葉を呟いてみた。何度も自分に向けてきた言葉を口にしても、沈んだ心が浮上し

てくることはなかった。いつもなら「大丈夫」と言えば、幾度となく辛い思いを乗り越えてきたというのに。今日はうまく自分をコントロールできない。

いつの間に、こんなに律のことを好きになってしまったのだろう。彼の言葉一つ一つが、自分の気分をこんなにも左右するなんて、出逢った頃は思いもなかっただろう。じりじりと焦げるような胸を押さえながら、テーブルに額をつけて固く瞳を閉じたのだった。

＊＊

今日は美波さんに頼まれた花屋の仕事の日。初めての仕事だけに、私は少しでも緊張していた。お花屋さんなんて可憐な職場に、私は不似合いな気がする。けれど頼まれてしまった以上は、きちんとやりこなさなくては。自分の中で少し気合を入れるが、やっぱり緊張は解けることのないまま、美波さんのお店に向かった。

「おはようございます」

遠慮がちに花屋の裏口から顔を出すと、店員さんらしき後姿が見えた。すると私の声に気がついたのか、後姿の子はこちらへと振り向く。すると、店員さんの姿を見て私は驚いて声を出せずにいた。

あれ！？ 店員さんって……男！？

これは私の勝手な想像だが、美波さんのお店で働いているのは勝手に女の子だと思っていたのだ。だから男性が店員だということに、思わず驚いてしまい、大口を開けたまま固まってしまった。

「ああ、店長が仰っていた……臨時のアルバイトの方ですね」

真っ黒な髪の中に少しだけ赤メッシュが入っている彼は、全体的にパンクファッションで固めており、シルバーアクセサリーが耳に

も首にも手首にもしつかりつけられている。そんなナリで色鮮やかな花々に囲まれている様は、誰が何て言おうと完全に浮いている。それでも彼の指先には指輪一つ付けられていない様子を見ると、彼は花を大事にしているのだと窺えた。

パクパクと口を動かしながら何かを言おうとするけれど、少し威圧感のある彼の出で立ちに負けてしまい、何も言えないままその場で突っ立っていた。すると彼の方が私に歩み寄り、少し控えめな声で話しかけてきた。

「えと、俺は榊毅^{さかきつよし}。開店当初からずっとここで働かせてもらって……その、仕事でわからないことは俺に訊いてください」

仕事でわからないことは俺に訊いてくださいって、全てわからないんですけど！ 美波さんから訊いてないのかしら？

色々ツツコミどころはあるけれど、ひとまず榊さんが手渡してくれたお店のエプロンを身に付け、こちらから仕事の手順などを色々聞きだすことにした。黙っていたらきつと仕事にならなくて、美波さんに申し訳が立たない。

シャッターを開け、店の前に花を並べていく。色々な花が風にそよそよと揺らぐのを見るのも、なかなか良いものだ。お日様に照らされ、花たちも嬉しそうに花卉を開いているような気がする。

午前中はそこそこお客さんが来て、少しもたもたしてはいたがご機嫌を損ねることなく仕事を終えた。お昼に一旦休憩を貰い、近所のお弁当屋さんで一番安いお弁当とお茶を購入して一息ついた。労働の後のご飯は、とても美味しい。今朝の嫌な気分を払拭してしまえそうだ。でも、あの律の言葉は、間違いなく私の心に突き刺さったままだ。この心に刺さってしまった棘を抜くことは、私には出来ない。

律の言葉を聞いた時、過去を後悔するのに三秒とかからなかった。

もつと私が元彼を疑っていれば、もつと色々情報を集めていれば、後悔の波が次々と襲いかかる。でも、過去はもう戻らない。どんなに嘆いても、どんなに後悔しても、自分の過去を消す事ができないなんてわかっている。それでも後悔してしまうのは、真実を知られて律に嫌われるのが辛いから。女として見てもらわなくてもいいから、今のこの緩い関係を失いたくない。そう願っていたら、涙が一つ、目から箸を握り締める手の甲に零れ落ちた。

こんなことで泣くなんて、弱すぎる。大丈夫だから。きっと大丈夫。

「大丈夫」の呪文はもう効かないって分かっているけれど、どうしても呟かずにはいられない。張り裂けそうなこの心を、どうか鎮めて。

25話 仕事が終わったその後で

休憩が終り午後の仕事に入る前、バッグの中からファンデーションを取り出して、化粧直しをした。いつもならそれほど気にならないけれど、今日はしっかりと崩れを直さなくてはならない。

「目が赤いまま直らないよお……」

思わず感極まって泣いてしまった為、目の下のファンデーションが崩れてしまった。決して厚化粧ではないけれど、見てすぐにわかる程度には崩れている。でも、その崩れも完全には直せないまま、休憩は終わりを迎えてしまった。

「休憩、ありがとうございました」

ぺこりと一つ頭を下げて、榊さんの顔を見ないまま仕事に入った。きつと榊さんは、不自然に感じたかもしれない。でも、この顔を見られるのは恥ずかしい。黙々と仕事をしながら、少しずつ目の赤さが引くのを待っていた。

休憩から上がって一時間、お客さんは一人も来なかった。花を見ていく人はいたけれど、買っていく人はいなかったのだ。だから私は少しほっとしていた。泣き腫らした顔を、お客さんに見せるわけにはいかない。しかしこうして美波さんに仕事をお願いされたというのに、感情的になり泣き腫らした眼で接客するなんて……。あまりにも不本意で、自己嫌悪に陥りそうだ。

店頭に置かれた花を見栄え良くするために直していると、背後から肩にポンと手を置かれた。振り返ると榊さんが神妙な面持ちで、私を真っ直ぐ見つめている。

「あの……?」

おそろおそろ榊さんに声をかけると、榊さんは私の目の前に手のひらをかざし、「何も言うな」と言わんばかりに首を振った。そして差し出されたのは、冷たいミルクティーの缶。それを私に手渡し、私に背を向けながらボソリと何かを呟いた。

「今、暇だし……店の裏で冷やすといい」

足早に私の前からいなくなり、さっさと仕事を始めてしまった榊さん。ぶっきらぼうだけど、彼の言葉から優しさが充分伝わってきた。

手のひらに収まったミルクティーを握り締め、榊さんに向けて一礼する。そして私は店の裏へと再び姿を消したのだった。

＊＊

冷たいミルクティーで瞼を冷やしたら、だいぶ腫れが引いたようだ。目の充血も消えている。

接客には差し支えないような顔になったので、私はお店に戻ることにした。そして榊さんにお礼を言おう、そう思いながら店に足を踏み入れた。するとお店の中で、榊さんが器用な手付きで花束を作っていていく姿があった。花束は色のバランスといい、花の配置やチョイスも素人目だけで完璧に見える。お客さんもとて素敵な笑顔で花束を受け取り、満足気に店を後にした。榊さんの誠意が込められた花束は、私の脳裏に、酷く印象的に残った。

「お……」

榊さんが私の姿を見つけて、どう声をかけようか迷っているのがわかる。だって目が右左と泳いでいるし、なんだかそわそわ落ち着かない。そんな姿を見たら、榊さんがちょっと可愛く見えるから不思議だ。

「榊さん。色々気遣ってくださって、ありがとうございます。優しいんですね」

感謝の気持ちを込めて榊さんに微笑むと、照れくさそうに頭を掻きながら「元氣が出て、よかった」と、蚊の泣くような小さな声で話し、大きな彼の手が照れ隠しなのか私の頭をわしゃわしゃと撫でた。うん。お陰で私の髪は、寝起きのようにぼっさぼさだ。

それから午後の仕事を二人でこなしていくうちに、最初はとても緊張していたけれど、あつという間に閉店時間になってしまった。店頭に出ていた花をしまい、掃除をする。私にまかされた仕事はそれだけだ。レジ締めなどは榊さんが行い、その他諸々難しいことは全て彼が引き受けてくれた。やっぱり彼はとても優しい人だ。

仕事を終えると、すっかり外は暗くなってしまった。すると榊さんが私を心配してくれた。

「慣れない仕事で疲れただろ。その、晩飯でも食ってくか？」

榊さんが気を使ってくれているのがわかる。でも私はもう、ベッドに倒れこみたい気分だ。慣れない立ち仕事に加え水仕事も重なり、お陰で手がとても荒れてしまった。迂闊にもハンドクリームを忘れてしまったので、かさかさのままの手を擦り合わせながら榊さんに首を振った。

「ありがとうございます。でも大丈夫ですよっ！ それより眠いで」

えへへ、とおどけながら言うと、おっと、再び頭をわしゃわしゃされてしまった。わしゃわしゃされながら見上げると、驚くほど優しい瞳で私を見つめている榊さんの姿が見える。その優しい微笑みに、うっかりきゅんとしてしまった。

ま、まさかっ！ 榊さんって私のこと……。なんて自意識過剰な思いを馳せていたら、榊さんからあまり嬉しくないひと言を投げられた。

「昔飼っていた、犬にそっくりなんだよなあ」

ああ、そういうこと。犬ね、犬。女どころか人間ですらねえ。私のきゅん心、返してもらえます？

そう思いながら乱れた髪を直していると、榊さんが再び私に尋ねてきた。

「暗いし、送ろうか？」

「え？ いやいや、近いので大丈夫ですよ」

「そうか？ ……ああ、迎えがきてるのか」

私より後ろの方に視線を向けた榊さんが、なぜか納得したように安堵の息を吐く。

「迎え？」

後ろを振り返り、榊さんが見ている方向に目を向けると、電柱の側に一人の人が立っていた。

「な、なんで？」

驚きを隠せなかったけれど、私は慌てて榊さんに頭を下げてダッシュでそこに向かう。そして逃げようとする影を追い、逃すまいとその腕を掴んだ。

「なんで逃げるの？」

「逃げたわけじゃ」

「迎えにきてくれたの？」

「たまたまだ」

「……一緒に帰ってくれるの？」

「……同じアパートだし」

照れたように、拗ねたように唇を尖らせつつも頬を赤らめる。

照れ隠しのように指でくいと眼鏡を持ち上げる仕草をするのは、私の大好きな彼。

「ありがとう、律」

夜空の下、律の前で素直になれた。この先、もっともっと素直な自分でいたいと思う。

26話 帰路

律の瞳は夜でも透き通るほど、綺麗。

その瞳を真っ直ぐ見つめながら素直にお礼を言ったのに、律が返してきた言葉はこうだ。

「な、何改まって。気持ち悪い」

この瞬間、ピシッとどこかにヒビが入る音が聴こえた気がした。女性に向かって「気持ち悪い」はないだろ！ 思わず大声で律につつかかっていきそうだった。

いやいや、ここは冷静に冷静に。せっかくこうして律が迎えに来てくれたというのに、こんなことで怒ったら、せっかくの二人きりの時間も台無しになってしまう。ここは大人になって、私、落ち着こう。

こんなことを思いながら頭を振り、自分を何とか冷静に保とうと努力する。しかしそんな私の思いも虚しく、せっかくの律との二人きりの時間は終わりを迎えるのであった。

「り・っ」

そう。この甘ったるいひと声で。

＊＊

さっきの甘ったるい女の声で、二人の時間は台無し。気がつけば律を真ん中にして、サイドに私ときっきの甘ったるい女がいる。しかもこの女は、馴れ馴れしくも律の腕に自分の白く細い腕を絡ませ

ている。甘ったるい舌足らずな声で律に話しかけ、巧みにボディタッチを繰り返す。「胸、律に当たってますよ」と、この女に言ったりしたい。大きく胸元が開いた服は、ボディラインを強調するようにピッタリとしていて、たわわな胸の谷間がくっきり見える。きっとこれはこの女の計算だ。「わざと当ててるに決まってるじゃない」と言われるのはわかっている。こういう類の女が男を落とす為の、常套手段だ。それでも何が許せないって、胸が当たっていることに気付いている筈なのに、平然としている律の態度だ。もう少し動揺するなり嫌がるなりしろよ！ ええい、このムツリがっ！

すっかり気分が悪くなり、私は少し早足で歩き始めた。だって、何か二人が喋っていることがよくわかんないんだもん。ちらほら聴こえてくる単語から、二人は同じ大学で同じゼミをとっているらしいってことがわかったくらいだ。だったら尚更、私はお邪魔虫だろう。律と知らない女が二人きりになるのは嫌だけど、何よりもこの二人と一緒にいると疎外されているように思えて苦痛なのだ。

知らない女。わからない会話。不快なボディタッチ。……私の前では見せた事がない、律の笑顔。

さっきまでの弾んだ気持ちは、一体どこへ行ってしまったのだろうか。どうやら行方不明のようだ。

こんな二人と一緒に帰るのは、辛すぎる。前は律を好きだなんて思ってたなかったから平気だったかもしれないけど、好きだと自覚してしまった以上、彼のこんな姿を見るのは想像以上に辛い。私、こんなに臆病じゃなかった筈なのに、どうしてしまったのだろうか。

「ごめん。私、先に帰るね」

心配をかけないように笑顔を作り、勝手に言葉だけを残してその場から逃げ出した。走って走って、風を切りながら涙を飲み込む。ちゃんと笑顔を作れていただろうか。もしかしたら、口端が引きつってしまっただけかもしれない。でも、あの場で辛そうな顔をして気付

かれてしまうより、走って逃げ出すほうがよっぽど良い。

ぜいぜいと苦しい息を整えたのは、アパートの敷地内に入っただらだ。程よく掻いた汗を拭おうとバッグからハンドタオルを出そうとした時、携帯が震えていることに初めて気がついた。震えている携帯の着信ボタンを押すことに、私は躊躇してしまう。着信相手は律だったから。何コールかした後、携帯の震えが止まった。そしてそこで気がついたのは、律からの着信が、これで七件目だということだ。あの場から駆け出してから、もしかしたらずっと掛け続けてくれたのかもしれない。そう思ったら申し訳ない気持ちが少しと、私を心配してくれたのかも、というあたたかな気持ちが溢れ出す。一緒にいた女よりも自分の心配が優先されたのかと思うと、それだけで嬉しかった。単純、でも酷い女だなと思う。

アパートの階段を昇っていく途中、上から利人さんが降りてきた。利人さんは私の姿を見つけると、にっこりと微笑んだ。うーん、王子様スマイル健在だ。

「めぐみさん、おかえりなさい。お仕事だったんですか？」

「ただいま、利人さん。ええ。今日は美波さんのお店をお手伝いしてたんですよ」

そう言うと、利人さんは顎に手を当てながら何か考え込み始めた。そして疑問を私にぶつける。

「私は今日もお花を買いに行きましたけど、めぐみさんの姿をお見かけしませんでしたか」

「え……でも、朝から閉店までいましたけど」

「おかしいですね。榊くんしか見ていませんが」

榊さんのこと、利人さんは知っているんだ。それもその筈。利人さんはあのお店で常連さんなのだから。知っていても不思議ではな

い。

利人さんがあまりにも一所懸命考え込むので、私はつい笑ってしまった。そして利人さんの疑問を解決に導く答えを、私は話した。

「もしかしたら、休憩中だったかもしれません。お昼頃、休憩をいただいたんです」

「お昼頃ですか。それなら納得です。そうですか……エプロン姿のめぐみさんにお会いできなくて、本当に残念です……」

あまりにも神妙な面持ちで利人さんが言うものだから、私は堪えきれず嘔き出してしまった。利人さんのこういう真面目なところ、本当に面白い。こんなことで真面目な顔をされると、おかしくてたまらないもの。

利人さんと話していたら、さっきまでの塞いだ気持ちたちが嘘のように吹き飛ばされた。利人さんの人柄に、今は感謝だ。

そんな利人さんとの会話を楽しんでいると、後ろから乱れた息遣いが近づき力強く私の肩を掴む荒々しい手が、力任せに自分の方に引き寄せる。

「きゃ……」

階段の中腹にいた私はバランスを崩し、体ごと下へと引き寄せられた……筈だったが、それを阻止するかのように利人さんが私の腰に手を回し、落下しそうな体勢から利人さんの胸へと引き寄せられていた。目の前には、利人さんの着物の合わせが見える。濃紺の着物に黒の羽織を着ている利人さん。彼はこうして時々、着物を着ていることがある。「祖母が着物を着ているので自分も時々」と、こへ越してきた日に、利人さんから聞いたことがある。でも、着物を着ている利人さんに会ったのは、今日が初めてだ。

利人さんの胸元に引き寄せられたと同時に、私の肩を掴んだ手は、

利人さんによって弾かれた。そして私の頭上でいつもとは少し違う、少し責めるような口調で話す声が聞こえた。

「律くん。このような足場で、先ほどの様な行為は危険です。めぐみさんが落下してしまっただろうするおつもりなのですか」

利人さんの戒めるような口調に、正直驚いてしまった。そしてやっぱり私の肩を引き寄せたのは律だった。まあ、すぐに追いつかれるとは思っていたけれど、本当に追いかけてきたなんて思わなかった。さっきの女はどうしたのか、それを訊きたいけど聞けない。

利人さんが腕を緩め、私は良い香りがする利人さんの胸から離れた。守られているような気分させる彼の胸元は、思ったよりも厚く引き締まっている。でも、私が好きな匂いじゃなかった。利人さんは好きだし、とても良い香りがするけど、私が求めているのはやっぱりこれではない。そう思い、背後にいる律の方へと振り向くと、バツの悪そうな顔をして、拗ねた子供のように私から目を反らした。そして小さな声でひと言残し、さらに俯いてしまった。

「……ごめん」

律が呟いた「ごめん」は、どれについて謝っているのだろう。

今、乱暴に肩を引き寄せて「ごめん」。それとも、変な女が乱入してきて一人ぼっちにして「ごめん」。どっちなの？

そんなこと聞きたいわけじゃないのに、つくいだらないことを考えてしまった。いいのに、そんなに申し訳なさそうな顔をしなくとも。私はもう、気にしてないのに。すると、さっきまで険しい顔をしていた利人さんが、いつの間にかいつもの王子スマイルを浮かべ、私と律の頭を「よしよし」と撫でた。「はい、仲直り」と言いながら頭を撫でる利人さん。ちょっと待って……利人さん。私達、もう子供じゃないから！ いつだって彼へのツツコミは追いつかなくて

困
っ
て
い
る。
。

27話 デートのお誘い

利人さんの「仲良しなでなで」をされて、私も律もどうしたらいいのかわからなかった。だって、利人さんがこんなに空気をぶち壊す「マイペース人」だとは思わなかったから。

そう。利人さんはものすごくマイペースな人。それが利人さんの良いところでもあるけれど、それと同時に欠点でもあった。まあ、素敵なんですけどねっ。

「なでなで」していた利人さんの手がようやく頭から離れ、私と律はお互いぐしゃぐしゃにされた髪を手で整えていた。律は片手で髪を直し、もう片方の手には紙切れのようなものを握っている。その紙切れに視線を落としながら、私は律に尋ねた。

「律、何持ってるの？」

「え？ ああ」

自分の手のひらの中の存在に、まるで今気がついたような素振りをみせる律。こいつ、本当に今の今まで忘れてたな。勿論、そんな憎まれ口は叩かなかった。

律が握り締めていた紙切れは、走ってきたときにぎゅっと潰してしまったようで、少しくちゃくちゃになっている。「それなあに？」と律の手のひらを指差すと、律がしぶしぶといった感じで話し出した。

「さっき会ったゼミの子が、一緒に行こうってチケットくれた」

手渡されたのは、夢の国のテーマパークチケットだ。朝から晩まで人で賑わっている、アトラクションもパレードも、そして国民的

アイドルのキャラクターも大人気の夢の国。

「うわぁ……いいなぁ」

ここは怖いアトラクションが殆どないため、私でも沢山の乗り物に乗れる。そしてこのテーマパーク独特の空気が、なぜか心をわくわくさせるのだ。

いいな、いいな。行きたいな。でも、律はさっきの女と二人で行くのか。そう思ったら、少しちくりと胸が痛んだ。だって、律の隣で楽しめるのが、私ではないから。

よっぽどきらきらした目でチケットを見つめていたのだろう。律は小さな溜息を吐いて、呆れ顔で私に言う。

「そんなに行きたいか？　こんな人ばかりのどこ」

「え？　人はともかく、楽しいじゃん。まるまる一日いたって飽きないよー」

そう言うのと、律はげんなりした表情を見せた。どうやら律はあまり乗り気ではないようだ。

「そんなに嫌なら断れば良かったじゃない」

「アイツには借りがあったから、断れなかったんだ」

借りとやらが何かはわからないけれど、とにかく律は断れなかったらしい。「ふうん」と言うと、また手元にあるチケットに目を戻した。

私、そんなに行きたそうな顔をしていただろうか。手元のチケットを眺めていると、一段上にいる利人さんが、くすっと笑った。

「どうです？　良かったらめぐみさん、私と一緒に行きませんか？」

「え？」

思いがけないお誘いに、びっくりしてしまった。けれど、利人さんは私の顔を見るなり、嬉しそうに目を細めながら私の手を取る。そして私と同じ段に降り、私に目線を合わせるように腰を屈めて王子様スマイルを向けてきた。きらーん、という効果音がやっぱり聴こえる気がする。

「めぐみさんとなら、楽しい時を過ごせそうです。いかがでしょうか？」

「えっと、えっと……」

利人さんの両手に包まれた私の右手が、じわじわとあたたまっていく。冷えていた指先にじんわりと利人さんの体温と優しさが触れ、さらに王子様スマイルを間近で見たことにより、思わず首を縦に振ってしまった。

「おいっ」

首を縦に振った瞬間、律が物凄い形相で私を睨む。それにその表情からは、焦りのような色も窺えた。

利人さんが握っていた私の右手を、もぎ取るように律が利人さんの手から奪う。その行為に、私は少しだけ悦びを感じていた。もしかして妬いてるのだろうか、なんて考えてしまったのだ。しかし数秒後、それはない、と自分に言い聞かせるように首を横に振った。

——だいぶ喋るようになったけど、律はまだ、私の前で笑った事がない。

どれだけ距離が近づいても、律が私の前で笑わない。それはやっぱり、まだ私のことが苦手……というより嫌いなのかもしれない。

ただ手のかかるやつとしか、思われていないのかもしれない。

自分なりに一所懸命考えているけれど、律との距離の埋め方は一向に思いつかない。そんな状態のまま、利人さんにテーマパークに誘われ、思わず首を縦に振る私。自分の想いと行動がずれているような気がするけれど、誘ってくれた利人さんに非はない。何だか私
が一人だけ、フラフラしているような気がする。

「めぐみさん？」

「え。あ、はい!？」

いけない、いけない。うっかり自分の世界に浸ってしまった。

利人さんは心配そうに私の顔を覗き込む。眉が下がり、悲しそうな表情を向ける利人さん。ああ、どうしてそんな顔も素敵なんだろうか……。本気でそう思ってしまったくらい、利人さんの悲しそうな表情も相変わらず王子様だ。

「めぐみさん。チケットは私が手配しましょう。どうです。明後日はお仕事でしょうか？」

「明後日、ですか？」

内心、「早っ」とツツコミを入れたのは言うまでもない。驚きの白さ……。じゃなくて驚きの早さだ。でも、なんということでしょう。明後日はジムの設備点検があり、まる一日休業するのだ。なので、その日は一日フリーだ。

「はい、いいですよ」

そう返事すると、律が隣でひゅうつと静かに息を呑むのがわかった。私は律の方を向く。すると律は、強張った顔で私を見下ろす。

「何、どうかしたの？」

「……明後日って、マジで？」

「仕事休みだし、利人さんからの提案だし」

すると律は顔を両手で覆い、はあくつと、それはそれは深い溜息を吐いた。へなへなとその場でしゃがみこみ、がつくりと頭を垂れる。律の背中が泣いているように見えて仕方ない。しばらく律がしゃがみこんでいたが、少しだけ視線を上げ、私の顔を見た。そして漏らした一言は、私の胸を貫いたのだった。

「俺も……明後日行くんだ」

律のデート現場を目の当たりにしなくてはならないのだろうか。鉢合わせだけは、勘弁だ。

……でも気になる。それは絶対に言えないけど。

28話 アクシデント

翌日、私がまだ寝ぼけている時間に、インターホンのチャイムが部屋に響いた。

布団に包まっていた私は、はっきり言って寝起きが悪い。安眠しているというのにチャイムに叩き起こされて、気分が悪くないわけがない。

「こんな朝っぱらから誰だ……」

不機嫌そうに独り言を呟き、片手で髪をかきあげた。そして玄関の鍵を開け、扉を開いた。

「おはようございます、めぐみさん」

きらっきらの笑みを浮かべ、さわやかな風と共に登場したのは、紛れもなく利人さんだ。白のコットンシャツを素肌に着け、利人さんには珍しいタータンチェックの細身のパンツを履いていた。コットンシャツの胸元から覗く鎖骨が、たまらなく素敵だ。

「利人さん、おはようございます」

はきはきした声で挨拶できればよかったけれど、なにしろ寝起きなものでして、ほんの少しばかり声が掠れてしまっていた。そして本当は利人さんの素敵な姿を褒めちぎりたかったけれど、どうも朝は頭の回転が悪い。脳内に、相応しい言葉が浮かんでこなかったのだ。

乱れた髪を懸命に手で整えるも、毛先のハネ具合は直せそうもな

い。ぴょんつと元気に毛先がみんな外ハネなんだぜっ！　これは直すのが大変そうだね。

髪の毛ばかり気にしていた私だったが、利人さんが珍しく目を泳がせていることに気がついた。ほんの少し頬を赤らめて、乙女のようにモジモジしている利人さん。不思議に思い、利人さんに話しかけた。

「利人さん、どうかされましたか？」

「いえ、その……」

一瞬言葉に詰まり、利人さんは口元を抑えながら一つ咳払いをして、私に告げた。

「……朝から刺激的なめぐみさんに出会って、少々戸惑っております」

ポツと頬を赤らめて、ちらりと横目で私を見る利人さん。私は刺激的な恰好なんてしていただろうか。たしかTシャツと短パンで眠ったはずだけど、なんて考えつつも自分の姿を見下ろした。すると、とんでもない恰好で利人さんと朝の挨拶を交わしていたことに、初めてここで気がついた。

確かにTシャツは着ている。着ているけれどノーブラだ！　しかもいつどうしてこうなったのかわからないが、短パンが脱げて下半身はショーツしか身に付けていなかった。

「みぎゃーっ！」

お前は尻尾を踏まれた猫か！　とつつこまれても何も言えないような悲鳴を上げ、私はベッドに駆け寄って掛け布団をくるりと体に巻きつけた。今更もう手遅れなんて言わないで。絶対ショック死す

るから。それにしても利人さんに、こんなはしたない姿を見られるなんて！ お嫁にいけないかもしれない。

朝一番の悲鳴は、こちらの住人全員に聞こえてしまったのではないかと思うくらい、それは大きな悲鳴だった。

——うう……穴があつたら入りたい……。

半泣きのまま私は利人さんの話を聞き、利人さんはまだ恥ずかしそうに頬を染めている。気まずい中、利人さんが私に手渡してくれたのは、昨日約束したテーマパークのチケットだ。

「久々にこういう予定が入ると、私のような年齢でもワクワクするものですね」

嬉しそうに微笑みを浮かべ、子供のように明日が待ちきれない、と言う。そんな利人さんはかっこいいというより、凄く可愛い。かなり年上なはずなのに、どうなのこの可愛さ。いつぞやのジムに群がったアリ共がこの笑顔を見たら、一瞬で骨抜きだろう。利人さんの微笑みは、朝の陽射しよりも眩しい。

「では明日。九時くらいに待ち合わせしましょうか。車で参りましょう」

「え！ も、もしかして利人さんの車ですか？」

「ええ。これでもドライブは好きな方でして、よく乗りますよ。明日は私の隣でナビをお願いします」

「よろこんでー！」

またもや某居酒屋のように力いっぱい拳を握り、声を出す。そしてそんなことをしたのだから、体に巻きつけていた布団が足元にふわさ……と滑り落ちた。そしてまた、利人さんが恥ずかしそうに横を向き、私が色気のない悲鳴を上げるのだった。うう、二度もはしたない恰好を見られてしまった。朝から騒がしくして、ごめんな

さい。

＊＊

朝の騒動でばっちり目が覚め、私は一人、ずーんと暗く落ち込んだまま仕事をしていた。勿論受付という仕事柄、笑顔は絶対に絶やさない。お金を貰っている以上、ハンパな真似はしたくない。作り笑顔と言われようが、お客さんである会員さんに不快な思いをさせないよう努めなくてはならないのだ。こんな風に落ち込んだ時は、受付という仕事キツく感じた。

仕事はとりあえず滞りなく終らせることが出来た。そのことにホッと胸を撫で下ろし、私は真っ直ぐアパートに帰る。

昼は暖かいけれど夜はまだ冷える春先。それでも、次々に可憐な花卉を開かせる花たちが、夜道を彩り、目を楽しませてくれた。

瞳を閉じ、鼻から空気を思いっきり吸い込むと、沢山の花の香りがする。ゆっくり深呼吸をして、最後に目を開く。すると疲れていたはずなのに、なんだかとても元気が出る。花の香りが、気分をリフレッシュしてくれるのだ。まあ、花粉症の人にはおススメしないけれど。

気分をリフレッシュして、再び歩き始めた時、前方から私の名前を呼ぶ声がある。そこには元気に手を振る美波さんと、今日も相変わらずアクセサリーだらけの、榊さんがいた。

「めぐみちゃん、今帰り？」

美波さんが花のような微笑みを浮かべて、私のところへ駆け寄ってくる。その姿がお人形さんのように愛らしくて、相手は女性だというのに本気で嫁にしたいと思ってしまった。そう思ったのはどうやら私だけではないようで……美波さんの後姿を食い入るように見

つめている榊さんが、ぽやん、とその姿に見惚れているのだ。私の視線に気付いた榊さんが、締まりのなかった表情を、頑張って元に戻している。その姿に、思わず笑ってしまった。一緒に仕事をした時はわからなかったけれど、美波さんを見つめる榊さんの顔は、誰がどう見ても……。

どうしたの？ と不思議そうに私を見つめる美波さんは、首を傾げながら、なぜ私がいきなり笑い出したのか聞いてきた。勿論、はぐらかして何とか美波さんを納得させたけれど。

二人はお店を閉めてから、一緒にご飯を食べに行くつもりだと言う。そして美波さんが、私の腕に手を添えて、首を傾げながら私を誘ってきた。

「ね。めぐみちゃんも一緒にご飯食べましょうよ」

「え？ 私ですか」

「ええ。もしよかったら」

美波さんに誘われると、なかなか断りづらいものがある。ふわふわした純白可憐な美波さんだけど、なぜか言葉には力があるのだ。なんでだろう。

一緒にご飯に行きたいのはやまやまだけど……そう思った私は、ちらりと榊さんを見た。どう見ても、榊さんは美波さんと二人きりで行きたいような気がしてならない。さっきの反応だけでもよくわかるくらい、榊さんは美波さんに想いを寄せている。それがわかっているのに、私が二人の間に割り込んでも良いものか。

うーん、と唸っていると、榊さんが一歩近づいてきて、悩んでいる私に声をかける。

「飯は大勢の方が楽しい」

それって「来い」ってこと？

榊さんのひと言に押され、私はつい、首を縦に振ってしまったのだった。

29話 お食事は美味しい言葉

うっかり首を縦に振ってしまった私は、ただいま美波さんと榊さんの二人と一緒に、ファミリーレストランに来ている。

大人三人なら居酒屋という手もあるだろう。けれど聞いてびっくり、榊さんは下戸らしい。それと相反するように、美波さんはザルだという。可愛い顔してザルとか！ うふふ、と手を口元に添えながら微笑む美波さんの口から出た言葉とは思えない。榊さんは、ちよつと悔しそうに横目で窓の外を覗ながら、店員さんが運んできた水をぐびぐびと飲み干した。

「めぐみちゃん、この前はお店手伝ってくれてありがとうね。今日は好きなもの頼んでいいからね」

にこりと微笑みながらメニューを手渡す美波さん。でも、大したことをしてもいないのに、食事をご馳走になるのは少々心苦しいものがある。

「いえ、そんな。私、あまりお役に立てなかったし」

恐縮しながら美波さんに言った。だって役に立てなかったのは本当の事だから。

美波さんのお店を手伝いに行った時のことを思い出すと、本当に自分は何をしていたんだと落ち込んでしまう。休憩中に泣いてしまい、目を腫らしたままお店に出て、榊さんに目を冷やせと気を遣わせてしまった。出来たのはお店の掃除くらいだ。これなら、小学生だって出来るだろう。だからこそご馳走になれない。

そんな私を励ますように、美波さんは私の背中をポンツと軽く叩

いた。「でも、私はとても助かったのよ」と、優しい言葉を添えて。私と美波さんの向かいに座っている榊さんが、しばらく間を置いて呟いた言葉は、私の心を軽くした。

「俺は手伝ってもらえて、助かったし嬉しかった」

一緒に働いた人にそう思ってもらえたのなら、私でも少しは役に立てたのだろうか。そう思った。

心があたたまったところで、私達はメニューを覗き込みながら「これがいいかな、あれがいいかな」と、指を差しながらアレコレ悩んだ。なかなかどれを注文するのか決まらないが、それをみんなで決めるのは、とても楽しい。結局、私と美波さんは意見が被り、シーフードドリアを頼むことになった。えびもほたてもいかも入っているし、なによりこのドリアは絶品だ。「やっぱりこのドリアは美味しいよねー」と、美波さんと私が声を揃えて言うと、向かいでメニューを広げて睨んでいた榊さんが、注文するものを決めたのかメニューをパンツと勢いよく閉じた。そして低く小さな声で、ぽそりと一声。

「……和風ハンバーグセット。ドリンクバー付き」

あまりにも真剣な顔で言うものだから、私も美波さんも一瞬声が出なかった。けれど、しばらく間を置いてから、美波さんがぷぷつと笑いを堪えきれずに噴きだした。

「榊くんったら。そんなに真剣な顔しなくてもいいのに」

「あ……すみません。つい」

くすくす笑う美波さんを、愛おしそうに見つめる榊さんの瞳はとても優しい。自分も律をこんな風に見ているのだろうかと考えたら、

勝手に顔が熱くなってきた。

——いやいや、まさかそんな。そんな乙女なキャラじゃないはずだけどっ！

一応「恋する乙女」なのだろうけれど、自分はそんなに可愛げのある性格ではないし捻くれているから、真っ直ぐ愛おしむように律を見つめられるかと聞かれたら、「できません」と即答してしまうような気がする。だから「乙女」という単語は、自分には一生縁がないような気がするのだ。できるものなら、可愛らしい「乙女」に生まれ変わりたいものだ。

「ちよつと失礼」と言いながら席を立ち、美波さんは化粧室へ。榊さんと二人きりになった私は、声を潜めながら少し榊さんの方に体を寄せて、ひそひそと声を出した。

「榊さんって、美波さんのことが好きなんですねっ」

私が直球で榊さんに訊いてしまったからか、榊さんの表情は一気に赤くなってしまった。「暑い、暑い」と手で扇ぎながら新たに注がれた水を、再び一気に飲み干した。結局この質問には答えてもらえなかったけれど、この慌てようが彼の答えだろう。

「榊さん。もし良かったら、美波さんと遊ぶ機会があったら誘いましょうか？」

そう言うのと、榊さんの眉がぴくりと上がる。

「……俺と店長が会える機会を、増やしてくれるというのか？」
「まあ、それほど多くはないでしょうけどね。でも、何度かは誘えると思いますよ？」

ちよつと考え込んだ榊さんだったけれど、すぐに頷き、ジーンズ

のポケットからごそごそと携帯を取り出した。

「……連絡先、教えてくれ」

榊さんの恋の応援をしたかった私は、すぐに彼と赤外線通信で番号を交換した。これで美波さんを誘ってから榊さんも誘えば、休日でも会う事ができるだろう。

それにしても、恋をすると男も女も変わらない。少しでも好きな相手に近づきたくて、どうにかして自分の方に振り向いてもらおうと必死で足掻いている。榊さんも、美波さんにもっと近づきたくて自分なりに努力しているのだろう。榊さんの為にも、美波さんと遊ぶ機会を作らなくちゃ。

美波さんといえば、彼女は一応バツイチだ。榊さんはそのことを知っているのだろうか。ふいに疑問を抱いてしまったけれど、この話題を私が彼に話すのはお門違いだ。そう思い、この話題に触れるのをやめた。

美波さんが席に戻り、やがて料理もテーブルに全て揃った時、三人ともみんな笑顔になった。もうお腹がぺこぺこだ。「いただきます」と声を揃えて言ったところで、一斉に料理に向かってスプーンやフォークで突撃した。熱々のドリアを口に頬張り、はふはふしながら食べるのが美味しい。口から熱々の料理の湯気が、呼吸に合わせて出て行った。

「美味しいね」

美波さんが目尻を下げながら私に言う。熱々のドリアのせいかな頬が紅潮していて、なんだか林檎のようで可愛かった。私はどうと、美波さんの声掛けに応じる事ができなかった。それは口の中に熱々のドリアが、大量に入っていたからだ。ちよっと欲張りすぎて、一口では食べられないほどの量をつっ込んでしまったようだ。だって

お腹が空いてたんだもん。

しばらく和やかな歓談を楽しみ、食事も終盤に差し掛かった頃、美波さんが私に唐突な質問をぶつけてきた。

「ね。めぐみちゃんと律くんって、付き合ってるの？」

その瞬間、食後に飲んでいた水を噴きだしそうになり、危うく目前に座っている榊さんにぶちまけそうになった。必死で口元を手で押さえどうにか噴きでるのを抑えると、私は美波さんの顔を見た。にこにここと、悪びれる様子もなく、ただ微笑みを携えながら私の方を見つめている。

「律と私が、ですか？」

「うん、そう。だってこの前お店まで迎えにきたんでしょ？ 榊くんから聞いたわよ」

榊さんが律の特徴を美波さんに話したらしく、彼女はすぐにピンときたらしい。

私はそのまま榊さんに視線を向け、恨めしげに彼を睨んだ。

おのれ……おしゃべりな男め。

悲しいけれど美波さんにはしっかり否定をした。でも美波さんはにこにこしながら、再び私に言葉を投げる。

「でも、お似合いだと思うな」

「ほ、ほんとですか……？」

「ええ。本当よ」

かくりと首を傾げながら可愛らしく言ってくれたこの言葉は、今の私には嬉しくてしかたがない。

美波さんの言葉に少々舞い上がりながら、楽しいファミリーレス

トランの食事会は、幕を閉じたのだった。

30話 隣にいてほしいのは

見事な晴天！ 降水確率ゼロパーセント！ そしてここは夢の国！
行楽日和ともいえる今日、私と利人さんは国民に愛されている夢
の国にやってきた。

「どうです？ 私にコレ、似合いますかねえ。ね、めぐみさん」
「可愛いですよー。利人さんっ」

入園してすぐに入ったのはお土産屋さんだった。そして、私と一緒に夢の国のシンボルともいえるネズミの耳のカチューシャをつけて、あははうふふと女子高生のようにはしゃいでいるのは利人さんだ。王子様スマイルの上に乗っているネズミの耳……！ くやしいけど可愛いのよねっ！ しかも心底楽しんでるようで、耳をつけたあとは、名物のポップコーンを首からぶら下げて、さわやかに笑顔を振りまいている。

利人さんったら……いくつでしたっけ？

こんな言葉が出かかってしまったけれど、どうにか飲み込むことに成功した。

「めぐみさんっめぐみさんっ！ どれから乗りましょうか？」

利人さんの「わくわく」という胸の高鳴りが今にも聴こえてきそうなほど、利人さんのテンションは高い。マップを大きく広げて、利人さんと二人で覗き込む。傍から見たらこれはもう、デートにしか見えないでしょう。というより、これは正真正銘のデートだ。

朝、利人さんの車に乗り、軽快な音楽が車内に流れる中で利人さ

んが鼻歌を歌っていた。それを助手席で聴きながら流れ行く景色を楽しんでいた私に、利人さんが嬉しそうに言う。

「いやぁ晴れてよかったですね。折角のめぐみさんとの初デートですから」

この瞬間、私は持っていたバッグを膝から落としてしまった。利人さんが「デート」だなんて言うものだから、つい意識してしまう。でも確かに、二人きりで遊園地に遊びに行くなんて、他の人から見たら立派なデートだ。利人さんの何気ないひと言で、突然彼を意識してしまった私の顔は、みるみる茹で上がっていく。心なしか耳まで熱を感じる。

運転席から盗み見ていたのか、私の頬にそっと利人さんの大きな手が触れた。

「今日はわりと肌寒いというのに、どうしてこんなに頬に熱を持っているのでしょうか。……ね？」

ちらりと横目で私を見ながら悪戯に微笑む利人さんは、いつもよりちょっと意地悪だ。

絶対わかってて言ってるんだ！

利人さんの「人生経験積んでますから」というような余裕ぶった横顔が、今日は何だか憎たらしい。こうして、この後もさんざん利人さんに弄ばれながら、ここまで来たのだ。

＊＊

すっかり準備が整った私達は、まずは少し緩やかな乗り物に乗ることにした。私は絶叫系が苦手なので、上から下に急降下するような乗り物は却下。利人さんも決して無理強いをしなかった。

「では参りましょうか」

くすつと微笑みながら私の手を取り、紳士的に手を引いてくれる利人さん。本当に、こういうところが王子様なんだよなあと思いいながら、少しぼんやりと彼の背中を見つめた。

広い背中とは、まるでお姫様を守る盾のようにも見え、そのお姫様が今は私なんだとしみじみ思う。利人さんにとっての、本物のお姫様はいるのだろうか？ 利人さんの恋人の話なんて、一度も聞いた事がない。いつか聞いてみようかな。

私が彼の背中に見惚れていると、視線に気付いたのか利人さんがくるりとこちらに振り向く。その瞳は真っ直ぐ私を捕らえ、少し意地悪そうに口端を持ち上げながら、繋いだ手に力がこもる。そして突然、掴まれた手をぐいっと引き寄せられ、手を繋いでいたはずなのに今は彼の手が、私の腰に回っていた。

「この方が、私がよく見えますよ？」

「え！？」

「……背中に穴が空いてしまいそうなほどの、熱烈な視線を感じましたもので」

利人さんの言葉に、私はあたふたした。もう、背中に目がついているんじゃないかって思うくらい、利人さんは私の行動をお見通しなのだ。カーッと熱くなった頬を両手で押さえ、顔を窺われないようにするけれど、その行為は無駄に終わった。

「赤くなっただめぐみさんも、可愛らしいですよ」

もう、なんなの！？ 利人さんのキャラが、いつもと違いすぎるよ！

この悪戯悪魔のようなキャラが、本当の利人さんなの？　いつものおっとり王子様キャラは、どこへ行ってしまったの！？　もう私の心臓は、爆発寸前だ。

ふふっと愉しそうに微笑を浮かべる利人さんは、キャラは悪戯大好き悪魔でも、頭にネズミ耳のカチューシャが乗っていることをお忘れなく。思った以上に外見が可愛らしくて、折角の小悪魔な台詞も、魅力半減だ。それでも耳元で囁かれると、思わずドキドキと胸が高鳴ってしまうけれど。

利人さんと律、二人とも素敵だけれど、それぞれ違った魅力がある。利人さんはやっぱり、大人の魅力を感じる。常に真っ直ぐ背筋を伸ばし、おっとりしつつもしっかり周りを見ている。それに物凄くフェミニストだ。そう考えると、やっぱり利人さんは素敵な理想の男性だと思う。それなのに、どうして私は律が好きなんだろう？　しばらく考えてみたものの、結局答えは出てこなかった。まあ…恋は理屈でするものじゃないってことだ。

「めぐみさん？」

「え！？　は、はい！」

声を掛けられ、自分がボーっとしていたことに気付いた。そして目の前に端整な顔があり、思わず顔が熱くなるのを感じた。利人さんが心配そうに眉を下げ、私の顔を覗き込んでいた。

「どこかお体の調子でも、悪いのですか？」

「いえ、大丈夫ですから。すみません、ちょっとボーっとしてしまっ
つて」

「めぐみさんが元気でしたら、いいのですが」

利人さんの美しい手が、私の頬にそっと触れた。慈しむようにそっと触れ、少し潤んだ瞳が間近に迫っている。あまりにも近い利人

さんの顔をこれ以上は真っ直ぐ見つめ返すことができなくて、私はつい、目を閉じてしまった。ぎゅっと固く瞳を閉じ、体にも力が入る。もしかしたら、少し体も震えていたかもしれない。

「……行きましょう、めぐみさん」

頬に触れていた手が離れ、再び私の手のひらを包んでくれた。

私が咄嗟に目を閉じたのは、利人さんにキスされるのかと思ったから。でもそれは、利人さんからのキスを待っていたから閉じたのではなく、そのキスを拒むために目を閉じた。だから思わず、身を固くしてしまった。もしかしたら、利人さんもそのことに気付いたかもしれない。

——キスする相手は、利人さんじゃなくて……。

思わず自分の唇に指で触れ、キスしたいと思っている相手の顔を思い浮かべた。私の手を引いてくれている利人さんの背中を見ながら、違う相手のことを考えているなんて、私は最低な女だな。

どんなに優しくても、どんなに王子様のような人でも、今日の前で笑って欲しい、触れて欲しいと願う相手は、唯一人。律だけ。

30話 隣にいてほしいのは（後書き）

三日ほど、更新をお休みします。

いつも読んでくださっている皆様、ありがとうございます！

拍手コメントのお返事、もう少々お待ちくださいませ。すみません。

31話 乱入

利人さんに手を引かれて連れてこられたのは、入り口から一番近いアトラクションだ。そこは海賊船をモチーフにしたアトラクションで、船で水の上を進んでいく。

結構人気があるようで、乗るには少し並ばなくてはならないようだ。

「何か飲み物でも買っておきましょうか」

「いえ。特に喉は渴いてないので……あ、利人さんは喉乾きましたか？」

「私も乾いてないので大丈夫ですよ」

利人さんと私は、そのまま列の最後尾に並び、ただひたすら少しずつ前に進んでいった。

——参ったなあ……会話が続かない。

車内ではあれもこれも乗ってみたいという話で盛り上がる事ができたが、さすがに話題がなくなってしまった。少し気まずい空気になってしまったけれど、そんな空気を破るように利人さんが私に微笑みかけた。

「つまらないですか？」

つまらないなんて、そんなことない。私の口数が減ってきたからそんなことを思ったのだろうか。「そんなことない」と利人さんにはつきりと告げ、にこりと笑う。でも、利人さんの顔からたちまち笑顔が消えてしまい、呆れたように大きく溜息をひとつ零した。

「まったく……デートはこれからだというのに」

そしてまたひとつ、大きく溜息を吐いた。

私、利人さんに呆れられてしまったのだろうか。今日は利人さんとのデートだというのに、脳裏に過ぎるのは律の顔ばかり。他の人のことを考えていたのを、利人さんは見抜いてしまったのだろうか。ドキドキしながら利人さんの言葉の続きを、身構えて待っていた。すると、利人さんの視線は私には向けられずそのまま私達の後方を見つめ、そのまま列から離れてツカツカと歩き出した。そして少し駆け足になり、勢い良く手を伸ばす利人さんが、獲物を捕らえた瞬間！ 「いてえ！」という声だけが私の耳に届いた。

「まったく……無粋な真似を」

「利人さん、いてえ！」

「自業自得です。何をこそこそ嗅ぎまわっているのですか」

「か、嗅ぎまわってなんか」

「いない、とでも仰りたいのですか？」

聞き覚えのある声に、私の胸が一瞬大きく高鳴る。この声は律だ、そう確信したと同時に、詰め寄る利人さんの横顔しか見えないが、それでもわかるくらい瞳が妖しくきらりと光った。

言葉こそ穏やかで丁寧な感じがするが、本人の顔を見たら身震いしてしまうほど怖い。笑顔なのに目だけが笑ってない。利人さんの横顔しか見えないけれど、負のオーラが建物の影に隠れている律もろとも取り込んで、渦巻いているように見えてしかたがない。

「あの、利人……さん？」

「すみませんめぐみさん。ほら、このように、律くんが私達の邪魔をしようと後をつけてきていたのですよ。まったく無粋な真似をしますね」

「え？　だ、だって律もデートだったんじゃない？」

そういうと律はバツの悪そうな顔をして、「相手が怒って勝手に帰った」と言う。それって喧嘩してそのままってことだよな？　律のデートが潰れてしまったことは、内心ちよっとだけホッとしている。けれど、喧嘩して彼女が怒って帰ったのなら、律は追いかけて謝るべきだと思う。そうじゃなきゃ、誘った彼女が可哀相だ。彼女の立ち位置が自分なら、間違いない追いかけてきて欲しいと思うだろう。私は律のところへ駆け寄り、真っ直ぐに彼を見た。

「ちゃんと追いかけて謝らなくちゃ。今頃彼女、泣いてるんじゃないの？」

「そう思うか？　ところがそうじゃないんだ。あの女なら勝手に怒って他の男を呼び出してたよ。別に俺じゃなきゃ駄目って奴じゃないんだ」

律が捨てるように言った台詞に、胸がズキリと痛んだ。

律じゃなきゃ駄目って思っていないのなら、律をデートになんか誘わないで欲しい。勝手にヤキモキしていた私が馬鹿みたいだ。結局律と彼女は、お互い好きあっているわけではなくて、ただの友達というか知り合い同士……。そう確信した瞬間、私は大きく息を吐いた。

——なんだ……。心配して損した。でも、律と彼女の間に何もなくて、良かったあ。

あからさまに私は、律たちのデートが失敗に終わったことを喜んでいる。嫌な性格だなあと思いつつも、にやけた顔は戻りそうもない。

「じゃあ、律も一緒に回る？」

「はっ！？」

「だって一人でしょ？　一緒に回ろうよ」

「……別にいいけど」

本当に素直じゃないなあ。まあ人のことは言えないけど。

少し頬を染めつつ、小さな声で一緒に回ることを承諾した律は、しぶしぶといった感じに見えて、実はちよつと喜んでいる感じに見えた。一人より大勢の方が楽しいもんね。

すると少しの間黙っていた利人さんが、律の肩を掴みながら耳元でぼそぼそと何かを囁いている。囁き終わった利人さんはニンマリと微笑み、囁かれた律は一気に顔色を青く変えた。一体何を話したのだろうか？

「……利人さんて、性格悪い」

「おや、心外ですね。よく優しくて素敵、と褒められますよ」

二人でなんか内緒話している。私の耳には届かなくて何を言っているのかはわからない。それが何だか、ちよつとだけ悔しい。

「二人で何話してるの？」

「ああ、すみません。めぐみさんが気にするようなことではないですから、ご心配なさらず」

「……猫つかぶり野郎」

利人さんが私にきらきらの笑顔を向けて謝っている間に、律が利人さんの背中ではそりと何かを呟いた。んもう！ はっきり喋って欲しいな。

「じゃ、行きましようか。ね、めぐみさん」

顔を近づけて微笑みながら私の手を取り、エスコートするように歩き出す利人さん。すると指と指の間に、利人さんのスツと細長い

指が割って入り、きゅつと私の手を握った。これは所謂、「恋人繋ぎ」ってやつで、私の心臓が急速に鼓動を早めていく。

「おい！　なんで手なんて握らせてるんだよ！」
「え？」

律の言葉が、どうしても妬いているようにしか聞こえない。でも、そんなことないか。だって律は私が苦手だもんね。うっかり些細なこと喜んで、あとで地獄に突き落とされるのは真っ平ごめんだ。だから私は、期待をしない。

32話 形勢逆転ですっ

この状態は、両手に花と言ってもいいのだろうか。私の左に利人さん、右には律がいる。

利人さんは相変わらず私に合わせて視線を下げて会話をしてくれるが、律はあまり私の顔を見ない。それどころか、やたらと不機嫌なような気がする。一体何が気に食わないのかは知らないけれど、こういう場でそんなに不機嫌そうな態度をとられると、こちらまで気分が悪い。

つん、と横を向きながら、しぶしぶ私達に合わせて歩く律に、私はついにイライラを抑えられず声をあげた。

「ちょっと。もう少し楽しそうにしたらどうなの？」

「はあ？ 楽しいわけないだろ！」

つまらないのがさも当たり前のように言われてしまった。律の言葉に呆気にとられ、私は少し悲しくなった。

所詮律にとっては、私と一緒に遊ぶなんてどうでもいいことなんだろうな。少なくとも私にとっては、例え律と二人きりではなくても、とても嬉しいし楽しいのに。

暗く塞いでしまう気持ちには、なかなか浮上してこない。悲しくなってしまう、律を見つめていた目を反らした。しかし、不機嫌な律が勢いを止められないのか、続けた言葉は私の気持ちを一気に浮上させることになる。

「利人さんと手とか繋ぐなよ！ 他の男とベタベタするな……！」
「え」

律の言葉の意味は、深く追求しなくてもわかる。それってそれって、やっぱり律のヤキモチだね？

隣には利人さんもいるというのに、律は思い切り本心をぶちまけてしまい、あろうことかいつもより声のボリューム過多だったので、周りにいるお客さんまでこちらを振り向く始末。我に返った律の顔はみるみる赤く染まり、自分が言った言葉に自身が一番困惑しているようだ。

「ち……違う、違うっ！ 俺はその、ああもう！」

頭をくしゃくしゃと両手で掻き毟り、ここにはもういられない！とばかりに、まるで昼ドラのヒロインのように両手で顔を覆って走り出した。乙女かつーの。

心の中でツッコミを入れつつも、律の言葉に舞い上がっているのは私。今にも足元がふわふわと浮いて、空を飛べるような気がしてしまう。少なくとも律はもう、私を苦手としていない事がよくわかった。好きなのかどうかは、良いように受け止めれば「好き」なのかもしれない。でも、これだけは確かな言葉が欲しかった。

走り去る律の背中はあるという間に遠くなり、その後姿を追いかけていいものか迷ってしまう。律の方に少しだけ手を伸ばすけれど、その手の行き場はなかった。そんな私の背中にそっと触れ、利人さんが柔らかな笑みを私に向ける。

「……追いかけてあげてください。律くんも、あなたを待っているでしょうから」

「律が、私をですか？」

「ええ。なかなか素直になれないのは、めぐみさんも律くんも一緒です。さあ、行ってあげて下さい」

背中に触れていた手が、とん、と前に押し出す。振り返ると利人

さんが一つこくりと頷いた。利人さんにはお見通しなんだ。私が律のことを好きなことも、素直になれないことも、全部全部お見通しなんだ。私はそのまま前を向き、律が走っていった方向に向かい、全力で駆け出した。

絶対に見つける。どれだけ私が律のことを好きか、分からせてやるんだから。

＊＊

「……」

思わず無言になってしまうのは、園内を走りすぎて息切れしているから。だってまさか、これだけ園内を走っても律の姿を見つけれないなんて、思いもしなかったんだもの。律の奴、どこまで逃げたんだ！ まさか園内にはすでにいないなんてこと、ないよね。一抹の不安が胸に過ぎったが、頭を横にぶんぶん振って、その不安を吹き飛ばした。余計なことは考えてはいけない。

乱れた息遣いを元に戻すために深呼吸を何度か繰り返し、走ってカラカラになってしまった喉を潤すため、近くにある自動販売機に小銭を入れた。何を飲もうかと色々探し、私はスポーツドリンクを買おうと思い指を伸ばす。すると後ろから近づいてきた影が、私より僅かに早くボタンを押す。

「なーっ!？」

ガコンと音を立てて出てきた飲み物は、私を買いたかったスポーツドリンクではなく、ミネラルウォーターだった。受け取り口から水を出し、背後で小ざかしい悪戯をする人物を睨みつけた。こんなことする奴は、一人しかいない。

「律ーっ！ 何すんの！」

「よく俺だって分かったなあ」

「分かるに決まってるでしょ？ こんな子供染みた真似をするのは律だけなんだから」

眉を吊り上げて律を睨みつけるも、自分より低い目線で怒られたって律は何にも怖くないだろう。怒られて肩を竦めることもせず、「はいはい」と呟きながら眼鏡のブリッジを指で押し上げた。

あ。何かマズイ。ムカつくわ、この態度。

ムカムカと胸の奥に渦巻いた気持ちを発散するべく、私は律に追いつきかけようと言葉を放つ。

「さっきの律の言葉って、利人さんに妬いたって思っているの？」

私の手からするとミネラルウォーターを受け取り、勝手にキャップをあけて飲み始めていた律は私の言葉で思い切りむせてしまい、足元には口から噴き出したミネラルウォーターの飛沫が地面に散乱した。

「な、な、何をこ、根拠に」

律の顔から焦りの色が見える。動揺しているのか滑舌も悪いし、今水を噴出した時に飛んだ水が、自分の口元を思いつき濡らしていることにも気付かない。あーあ、焦ってる律ってなんて可愛いのだろう。いつもこうして彼を翻弄させるのは、私ならいいのに。そう思いながら、私は自分のバッグからハンカチを取り出し、律の口元にそれを当てた。

「根拠なんてないから。ただ、そうだったらいいなって思っただけ……け！？」

やばい。やばすぎる。気を抜いた瞬間のことだった。

律の口元を拭くためにハンカチを動かしていた、まさにその瞬間。私の気が一瞬だけ緩み、自分の気持ちを話してしまった。動揺するのは、今度は私の方だった。その瞬間、力強い腕が私の腕を掴んだ。

「何、何？ もう一度ちゃんと行って。そうだったら……そう言った？」

「あ、あわわわ……ち、違！ 言ってない言ってない！」
「嘘つくな。聞こえたぞ。もう一度行って。っーか言え」

命令かよっ！

そう思ったけど、今の私につっこみを入れる余裕なんてどこにもない。

目の前に迫る律の顔を、真っ直ぐに見つめることすら難しい。息が乱れる。羞恥でいっぱいになり、顔がどんどん熱くなっている。

火照る頬を片手で押さえながら律の視線を逃れようと背を向けても、律の力強い腕からは逃れられない。

まさかの形勢逆転に焦る私。私の言葉をもう一度確かめようと、目の前にじりじりと迫る律。オオカミさんに食べられる、五秒前。

33話 空気を読んで

お願いだから、そんなに真っ直ぐ私を見ないで。

きらきらのガラス玉のような律の瞳に、熱がこもっている。やや上気した頬と潤い帯びた瞳が、やたらと艶っぱさを増しているような気がした。

「言えって」

何を勝手なことを……！ 私に同じ台詞を言わせて、一体何が楽しいというのか。

さっきの私の言葉は、自分の気持ちを曝け出したも同然だった。本当に、こんな形で律に気持ちを伝えたいわけではないのに。まあ別に、ロマンチックに星が輝く空の下で「好き」なんて言いたいと思うほど乙女思考ではないけれど、せめてちゃんとした形で気持ちを伝えたいじゃない。ハプニングに乗じて気持ちを伝えるとか、悲しすぎる。

あと五センチも近づけば、律と私の鼻がくっついてしまいそうなほど、律が迫ってきている。このままじゃ、鼻どころか唇まで触れ合ってしまうそうだ。

「……り、律。ちょっと近いよ」

視線だけを足元に向け、律がこれ以上迫ってこないように制止する。けれど律はお構い無しだ。それどころか、とんでもねーことを言い出すもんだから、私の顔は火がついたように熱くなってしまった。

「うるせーな。塞ぐぞ、その口」

私、今だったら泡ふいて死ねる気がする。

くそー！　こういうシチュエーションでそういう俺様口調はズルイ。しかも眼鏡をかけてキリリと締めた顔で言うなんて。私の好みを知った上で、そういう台詞を吐いているのか！

最初はただのムカつく年下のガキだと思っていたのに、こうして二人きりになると、いきなり大人びた表情を見せる。今の私にはそれが刺激的すぎて、思わず困惑してしまうのだ。

こうしている間にも、律の顔はぐんぐん迫る。ここは外だということ、律はわかっているのだろうか。

「律！　ここ外だから！」

「だから？」

「だから？　じゃなくて！　こんなところでこんな風に……」

「こんな風って？」

ム・カ・ツ・ク。わかってて言ってるな。こんにやろう。

傍から見たら絶対に、私と律がキスをする体勢に入っているとわかるだろう。律もわかっていて私に近づいてるに決まってる。口塞ぐとかこんな状態で言われると、まるで「キスするぞ」と言われているような気になってしまう。そりゃ私は律が好きだし、律とキスしたいなあって思ったりもするけれど、何もこんな状況でしなくてもいいと思う。どうせなら二人きりの時間に、啄ばむような甘いキスが欲しい。

そこまで考えていたら、あっという間に頭のとっぺんから煙が噴き出しそうなほどの熱が、全身に駆け巡る。私ったら、なんという妄想をしているのか。

「……なんか、イヤラシイことでも考えてたのか？」

ニヤツと悪魔のような笑みを浮かべながら私を見つめる律が、ちょこっと調子づいて私の顎を指で持ち上げた。まさに律とのキスシーンを妄想していただけに、何も反論できないのが悔しい。とは言うものの、これが私の可愛くないところ。つついキツイ口調で、律に捲くし立ててしまった。

「そんなわけじゃないじゃない。律こそ私にこんなに迫ってきて、一体ナニするつもりなの？」

死ぬほど恥ずかしいけれど、それを悟られないように律を強く見つめ返す。顔は律を睨んでいても、胸の奥はうるさいくらい鼓動が鳴り響いていた。まるで耳元で聴いているような、それくらい大きな音がしていた。

一方、突然の私の強い口調に少々圧倒されてしまった律は、私の顎に触れていた指を離し、少しだけ顔を離した。

「別にナニもするつもりなんか……」

嘘だ。絶対今の口調で下心があることがわかった。

何もないなら、もっと強く主張すればいいのに、すでに語尾がごによごによしていて何か良からぬことを考えていたことが、バレバレだ。

むしろそのまま、勢いでキスしてくれても良かったかもしれない。なんてどこかでそう思っている自分がいることに驚いた。本当は、キスをしたかったのは私のほうなのかもしれない。もどかしいこの距離を早く埋めてしまいたくて、本能がそう告げているのかもしれない。そう思ったら、律に想いを告げるのは今のような気がしてならない。私は、一旦俯いて瞳を閉じ小さく深呼吸をしてから、再び律に瞳を向けた。

「律。あのね、私ね」

私が言う事が出来たのは、ここまで。ここまで言って、律の手のひらが私の口を覆ってしまった。その次にやってきたのは、律の真剣な眼差し。頬を赤らめながら体裁を整えるように、指先で再び眼鏡のブリッジを押し上げた。

一つ静かに息をつき、律が口を開きかけたその瞬間だった。

「ああ、やっとお二人とお会いできました」

利人さああーんっ！　ここは空気読もうよ！

二人の甘くドキドキする時間は、空気が読めない利人さんのひと言で、見事に破壊されてしまった。その時の律の顔ったら、般若のようだ。

きっと、私と律が言いたい言葉は同じはず。どこか確信めいたものが、私の中にあった。

一体いつ、律に自分の気持ちを伝えよう。

ここまで晒してしまったのだから、もう今更後には引けない。というよりは、もう進んでいくしかない。律の拒絶を恐れていた私は、もういない。自分なりに決意をし、胸の中のモヤモヤした霧が晴れ、私はとても清々しい気分になった。

「雨が降りそうですので、風邪を引かぬうちに帰宅したほうが良いと思います」

「本当だ。いつのまにこんなに雲が。おかしいですね、天気予報では降水確率ゼロパーセントって言ってたのに」

「天気予報も、今日はハズレということですね」

風に舞う髪を手で耳に掛けながら、黒く厚い雲に覆われた空を仰

ぐ。あんなに穏やかだったのに、いつのまにか風は強くなり雨雲も空を覆い尽くしていた。雨はもう間もなく降ってくるだろう。

「……本当は、二人きりのお時間に邪魔をする無粋な真似をするつもりはなかったのですが。申し訳ありません、めぐみさん」

「そんな。わざわざありがとうございます」

利人さんはにこやかに微笑み、そっと私の肩に触れた。申し訳なさそうなの顔を見ると、もう何も言えない。その頃律はというと、突然利人さんが割り込んできたことに腹を立てて、私のお金で買ったミネラルウォーターを飲んでいる。しかも、ここからずいぶん離れたところにあるベンチに腰を下ろして。

しばらくしてから、律も渋々といった具合だが私達のところに戻り、空になったペットボトルをゴミ箱に投げ入れた。何度も言うようにだけど、あれは私のお金で買ったものだ。

せっかく来たというのに、結局何も乗れずにこの場を去らなくてはならないなんて。とても残念だし、誘ってくれた利人さんにも悪い気がした。

——今度、利人さんに今日のお礼をしなくちゃ。

お礼を何にしようか考えながら、出口へと歩き始める私達。私はお土産屋さんのショーケースに目を奪われ、帰るのがとても口惜しい気持ちでいっぱいだ。帰りたくない、と泣き喚く子供の気持ちだが、この時ようやくわかった。そんな私の後方で、利人さんと律が何かを話しているのが目に入った。利人さんは律の耳元でこそりと何かを呟き、それを聞いた律が、さっと利人さんから体を離し、青ざめた表情で利人さんを見つめている。きらきらの笑顔を浮かべる利人さんとは対照的な律の表情に、私は首を傾げながら声をかけた。

「何の話してるんですか？」

青ざめた律からは、何の言葉も出てこない。ただ、ぱくぱくと口を動かすだけだ。対する利人さんの口からは「いえ。特に大したことは」と、はぐらかされてしまった。そして鼻歌を口ずさみ、満足気にスタスタと先に歩き出した利人さん。その後姿を見つめながら、ますますわからないと首をさらに傾げた私だった。

隣では律が、「……俺かよ」と呟いている。

「律、どうしたの？」

「いや、ちよつと。ショッキングすぎて言葉もねー……」

一体何の話をしていたんだ！

気になるけれど、この先もこの話の内容が私に伝わることはなかった。

34話 期待してはいけない

利人さんとのテーマパークデートは律が途中から乱入し、挙句何も乗れないまま天気が崩れてしまい逃げるように帰宅した私達。それでもお土産だけはしっかり買ったけれど。お土産を袋の中から取り出して、一つ一つ個別に包む作業をしていた。

帰宅してまだ一時間ほどしか経っていないが、時刻はもう夜の十時。テーマパークから車で二時間ほどかかるところ渋滞に遭遇し、倍以上の時間を要したのだ。おかげで利人さんもへろへろ。私か律のどちらかが免許を持っていれば……！ 利人さんごめんなさい。利人さんに懺悔しつつも作業の手は休まずに、ぐしゃぐしゃになってしまったお土産の包み紙を丁寧に直していた。そんな時、こんな深夜に来訪者が。

「はい」

チャイムが鳴り響き、しゅしゅと腰を上げた私が玄関の扉を開くと、そこには律が立っていた。律の顔を見ると、ドキッとしてしまう。あの時の続きが、始まってしまいうような気がして、どうしようもなく緊張してしまうのだ。

「ど、どうしたの？」

あ、やば。声が震えてる。緊張を悟られないようにしたつもりだったけれど、第一声が震えてるんじゃ、律にバレても仕方ない。でも律は、そんな私の声には反応せず、俯いたままだ。

「律？」

「あ。ごめん。えーと……」

何かを言おうとモゴモゴ口を動かしてはいるが、まったく声になっていない。

無言のまま時間だけが過ぎるが、このまま玄関先で突っ立ったままというのモゴモゴかと思ひ、私は扉を大きく開けて律を招き入れた。「ごめん。じゃあ」と申し訳なさそうに言う律が部屋に上がると、いつもとはちよつと違ふ空氣が部屋いっぱいになつた氣がした。靴を脱ぎ部屋に上がる時、律はめいっぱい緊張していたのだらう。なぜなら右手右足を同時に出して歩いてゐるから。ぎくしゃくぎくしゃくと聴こえそうさだ。

「あ、ごめん。何かやってた？」

律が氣がついたのは、床に広げられたお土産の山。包みなおしてゐるお土産を一つ手に取り、続きを綺麗に包んでくれた。その器用な手付きに、つい惚れ惚れと見惚れてしまふ。

仕上がったお土産の包みは、さっきまで私が包んでいたものよりも、ずっと綺麗に包めてゐる。なんとなく、惨敗した氣分だ。そんなお土産の山を見て、律が呆れたように息を吐いた。

「つーか、こんなに誰にあげるんだよ」

片手でお土産の一つを取り、くるくると見回す律。私は一つずつ手にとって、名前を挙げていった。

「これは美波さん。これはおたえさん。で、これが萌。これは友哉くん。それでーこれは榊さん」

職場には大きなお土産を一つ用意していたので、この山の中には

ない。誰のお土産なのかを説明していたら、突然律の手がピクリと反応した。

「友哉さんはわかるけど、榊さんって誰だよ」

むっとした顔で私を睨む律が、悔しそうに唇を尖らせている。もしかして、妬いているのだろうか。だとしたら、どうしよう。すっごく嬉しい。

片思いの相手にそんなことされたら、私なら嬉しくてたまらない。だからこんなに頬が緩んでしまうのだ。でも、私も律も、お互いの気持ちを打ち明けてはいない。贅沢な話かもしれないけれど、「好き」っていう言葉は、できれば律の方から言って欲しいな。別に私から言ってもいいけれど、無愛想な律が一体どんな顔をして告白をするのだろう。ちよつとだけ、それが気になる。

「なあ、おい！」

「へ？」

「だから榊って誰だって話」

「あー……榊さんは、美波さんのお店の店員さんだよ。律も見たでしょ？ 迎えにきてくれたんだし」

そうそう。あの時は迎えにきてくれた嬉しさで、弾むような喜びでいっぱいだったわけ。ま、その後見事に律の隣を奪われたのだけ。そういうえばあの時、律はどうして私を迎えにきてくれたのだろう。別に迎えにきたわけじゃないと言っていたけれど、あんな影に隠れて閉店を待っているような姿を見たら迎えにきてくれたんだと思ってしまう。律と私の気持ちは同じだと思うけれど、次の一步がどうしてもこんなに難しいのだろうか。ただひと言、自分の気持ちを伝えるだけなのに、うまく言葉が出てこない。もどかしい気持ちを抱えながら、律に迎えにきてくれた時のことを話し始めた。

「ね、律。あの日律はやっぱり、私を迎えにきてくれたの？」

私なりに真剣に聞いたつもりだ。でも律は、カーツと顔を赤く染め、いつものようにはぐらかす。

「そんなんじゃないって言っただろ」

ほら。やっぱりこうなるんだ。ほんの少しだけ期待していたけれど、やっぱりその期待を見事に裏切る答えを出す。だから期待するのは嫌なんだ。

悲しいやら悔しいやら、訳のわからない感情が胸の中に大きく広がり、しまいには涙も滲む。ぎゅっと握った拳に、さらに力を入れて握り締めると、その拳の上に涙が一粒ポツリと落ちる。悔しいな、悲しいな。期待した言葉が律からもらえなくて、本当に悲しい。期待しすぎた分、余計に辛い気持ちになった。

「……だったら、あまり期待させるようなことしないでよ」

ポツリと呟くひと言を聞いた律が、息を呑んだのがわかった。

二人きりの部屋に、空気が張り詰める。こうして俯いていても、律の視線が向けられているのが痛いほどわかる。かける言葉に困っているのか、私の態度に驚いているのか、それはまったくわからない。でも、私が言わんとしていることだけは、わかってくれただろうか。

好かれて困るのなら、もう私に構わないで。嫌というくらい冷たくあしらってくれたほうがいい。そうじゃなきゃ、いつまでもしつこいくらい好きのままだから。そう思っているのに、辛辣な言葉が飛び出てくることに怯えている自分がいるのも確かだ。もう、ぐちゃぐちゃな自分の気持ちに嫌気がさす。

沈黙は尚も続くが、涙はいまだに止まらない。こんな顔を見られるのは嫌だ。でも、思う気持ちが強すぎて、限界のメーターを軽く振り切ってしまったのだ。

そんな私を見て、律が戸惑っている気がする。参ったな、困らせるつもりじゃなかったんだけど……涙を止めることはできなそうだし、しばらく続く沈黙が重くて、俯いたまま顔を上げる事ができない。このまま顔を上げて律の顔が視界に入った時、困ったような表情を浮かべていたらと思うと、なかなか顔を上げる勇気がもてなかった。

「律、ごめん。あの、今日はその……帰ってくれるかな」

俯いたまま律に言う。この嫌な空気をどうにかしたくて、苦肉の策を打ち出した。

律をこれ以上困らせないように。またいつもみたいに、憎まれ口を叩き合えるような仲に戻るために。今ならまだ間に合うからこれ以上を望んではいけないと、勝手に思っていた。

「嫌だ」

この言葉を聞くまでは。

35話 成就

「嫌だ」

私の部屋から出て行くことを拒む律。そう言われた瞬間、私は顔を上げた。

真剣な、だけどどこか切羽詰ったような律の顔。真っ直ぐに向けられる彼の瞳には、私だけを映し出している。

「出て行かない」

律の言葉と同時に伸びてきた手が、拳を握っていた私の手の上に、そっと触れた。

触れた手のひらから柔らかなぬくもりが伝わり、僅かな震えも私の肌を感じる。きっと律も緊張しているのだろう。私だってさっきから、心臓がどこかに飛んで行ってしまいそうなほど緊張して震えている。

うるさいくらいの鼓動が室内に響いてしまうのではないか、なんて心配になるほど鳴っている。そういえば人生で打つ心拍の数は決まっているなんて聞いた事があるけど、こんなに早い鼓動を打ってしまったって、私すぐに死んでしまわないかしら。そんなことを考える余裕はないはずなのに、意識を律から外さないと呼吸をするのも苦しくなる。

めい いっぱいの緊張で触れていた律の手が、しつとりと汗ばんでいた。次の言葉を口にするのに、口をぱくぱくと動かすも、その言葉は私に届いてこない。

「ん?」

律に顔を寄せ、言葉を拾おうと努力してみたが、全く聞こえない。そんな状態がかれこれ三十分続くとは、思いもしなかったな。

＊＊

「……律、そろそろ声だそうか」

「……れ、……こと……きだ」

三十分だって、ようやくここまで声が出るようになった。もっと腹筋から声を出せー！　なんて心の中でつつこめるほど、私の緊張はなくなっていた。

なんかなんか、さっきまでのちよっという感じの空気は、どこへ行ってしまったのだろうか？

律からの言葉を待ちたいけれど、そろそろ限界。彼の言葉の一言一句を聞き逃したくなくて思わず正座をしたというのに、私の足はすでに使い物にならないほどの痺れがきていた。親指をくいくいと指で動かしてみるけど、あまりの痛さに「ぴゃっ」とおかしい悲鳴をあげてしまったくらいだ。そんな色気ゼロの悲鳴に律が気付くと、私の拳の上に置かれていた手が足へと移動する。そしてそっと指先で足に触れた。

「り、律？」

足に触れられるなんて思っていなくて、手を握られるよりずっと緊張する。恋愛小説や映画だと、触れた指先がするすると足を滑って、やがて辿りつくのは……。

「にゃーっ！」

イケナイ想像を掻き消すほどの痛みが私を襲う。

「痺れてるなら遠慮なく」

遠慮しろよ！

律が容赦なく、私の痺れた足の指をくいくいと動かす。何これ。ぜんっぜん色気ない。所詮律と私の間に、色っぽいムードなど流れることは不可能なのだろうか。

痺れがおさまるまで指から手を離さないという律。私は苦痛に悶えながら、後ろに倒れた。上体を起こしていることすら苦痛で仕方ないのだ。

「うおおお……」

もはや何の動物だ？ と首を傾げてしまうほどの私の唸り声。もつとさあ、もっと可愛らしい自分をこの場で発揮したかったのよ？ こんな姿を晒す羽目になったのは、あれもこれも全部律のせいだ。せっかく引っ込んだ涙が再び出てきたけれど、そんなことには構ってられないほどの痛みが辛すぎる。ぷるぷると体を震わせ、苦痛に悶える私の姿は、どれくらい滑稽に映ったのだろう。誰か、時計の針の戻し方教えてください。

「うおお……お。う。ん？」

「お、痺れ取れたか」

「ふう……ありがとぉ〜律」

痺れがなくなり、ようやく私の苦痛タイムが終了した。やっと平穏な時間が訪れ、私の体からも力が抜ける。床に突っ伏してゴロゴロしながら、足が痛くないかほとんどん床を打って確認する。うん。もう大丈夫だな。よしよしと納得してうつ伏せの状態から寝返りを

打つ。体を起こそうと思ったのに、私は再び固まってしまった。だって目の前には、私の上に覆い被さるように迫る律がいたから。

「り、律？」

おそろおそろ声を掛けるも、律は返事もしない。真っ直ぐ私を見て、頬を赤らめながら見下ろしている。

私の顔の横には律の逞しい腕があり、体を反らすこともできない。要するに、私は逃げ場を塞がれてしまったのだ。こうなるともう、律から視線を離すわけにはいかない。

ドキドキうるさい、私の心臓。さっき律と私の間に色っぽいムードは流れないと思い知ったばかりだ。だから期待はしない。期待は、しない……けど、やっぱり期待してしまう。

こんな状態になってからすぐに、律の唇が動き出す。その動きが、やたらゆっくりに見えるほど私は律に集中していた。

「俺」

一気に大きく鼓動が鳴る。どきっなんて可愛い音じゃない。ばくんっ！　と言ってもいいくらいだ。

来る。これは……律の言葉が、絶対に来る。

続きの言葉を知りたくて、私は彼の顔を穴が空くほど見つめた。そんなに強く見つめられているというのに、律はそのまま言葉を続ける。かすかに動く唇から紡がれた言葉は、まさに私が待ちわびていた言葉だった。

「アンタが……めぐみが好きだ」

言われたかった言葉が、優しく上から降り注ぐ。その瞬間、私の周りがきらきらと輝きだしたような気がした。

「私も」って言おうと思ったんだ。でも、あまりにも感情が昂ってしまって、何も言えなかった。だから私は、行動で嬉しさを示した。

上から覆い被さる律の首に手を回し、悦びが伝わるように願いながら、ぎゅっと力を込めて抱きしめた。そんな私の行動に驚いた律。一瞬ビクッと体を震わせたけれど、その後は私と同じように抱きしめ返してくれた。

寝転がったまま抱きしめられて、嬉しさが込み上げる。律の頬が私の頭に摺り寄せられると、幸せな気持ちが込み上げて、部屋いっぱいに溢れてしまいそうだ。

「私も、律が好き」

充分に悦びを噛み締め、ようやく私も自分の気持ちを律に打ち明ける事ができた。その時、律の腕に力が込められ、さっきよりもずっと力強く、でも優しく慈しむように抱きしめられる。だから私は律の胸の中に顔を埋めて、彼の匂いをいっぱいに感じた。

35話 成就（後書き）

テーマパークデートの律視点ストーリーを、ブログにて更新してま
す。

もしも興味がある方は、どうぞ『マイページ』よりお越しください
ませ。

利人と律の内緒話は、律視点のみでわかるようになってます。

＊律視点は読まなくても本編の進行に支障はありません。

36話 らぶらぶ

律の胸の中はあったかくて、いい匂いがする。こうして抱きしめられているだけで、幸せだ。

幸せってこういうことを言うんだなあって、久し振りに思い出した気がする。

「うへへ」

思わず零れ出た笑いが、自分でもわかるくらい気持ち悪い。でもこんな笑い方したって、律ならきつと「可愛い」って言ってくれるよね？ だって、恋人だもん。

「……変態みたいな笑い方するな」

言ってくれなかった！ しかも変態とは！

大きくショックを受けて、私は律の胸からガバリと起き上がった。床で寝転がっている律が私を見上げて、呆れ顔をしている。

何よ、変態彼女で悪かったわね！

子供っぽいと思いながらも、つーんと横を向いて目を反らしたが、律はくすくすと笑うだけだ。視線を律にそっと戻すと、まだ笑っている。

「変な笑い方するから。ほら、ヨダレ」

そう言いながら服の袖で口元をぐしぐしと拭いてくれた。それにしてもヨダレって。私、そんなに口の締まりが悪かったかな。

口元を自分でゴシゴシと拭き、恥ずかしさが込み上げてきた。本

当に私というやつは……と自分に対して呆れ気味だ。律はこんな締まりのない彼女でいいのかな。

「どっちが年上だかわかんねーな」

柔らかく笑いながら頭を撫でてくれる律を見ていたら、こんな私でもちゃんと大事にしてくれているとわかる。

律が、私に笑いかけてくれる。それが何より嬉しかった。今まで律が笑った顔を私に向けてくれた事がなかったから、余計に嬉しい。綺麗な瞳が細くなり、ちよつとだけ目尻を下げて笑う姿は、少年のように可愛らしかった。このチャンスを逃すわけにはいかない。そう思った私は、高速で携帯を手に取り、あつと今に携帯カメラで律の笑顔をおさめることに成功した。

「よし！」

「よし！　じゃねーよ！　何勝手に人の顔撮ってるんだよ」

「ふふふ。待ち受けにするのだよ」

「やめろっ！　どんな羞恥プレイだよ！」

慌てて私の携帯を取り上げようとする律をなんなくかわし、しっかり保存完了した上、待ち受け設定も完了した。これでいつでも笑顔の律に会えると思ったら、明日からの仕事も頑張れる気がする。そう思うくらい私は単純だ。

待ち受け設定を完了させた携帯を律に見せると、恥ずかしくてたまらないらしく顔を両手で覆ってしまった。相変わらず恥ずかしそうにする時は、乙女みたいな行動するな。

隠し切れない耳も真っ赤にさせている律を、可愛いと思うのは悪いことだろうか。指先で耳朶をちょいと触ったら、びくっと大きく体を震わせ、顔を隠していたはずの手のひらが耳を覆っていた。

「さわんな！」

「いいじゃない、別に」

「くすぐったいの！」

「そう言われると、さわりたくなる……」

うずうずしている私の手が、わきわきと動き出す。まあ、これ以上は苛めてはいけないよね。でもくすぐったそうな顔をしている律を、もっと見たいという私の我が儘は止まらない。悪魔の心が沸々とわき上がり、私は人差し指でツンと律の脇腹を突いてみた。

「わぁっ」

すぐにその場からぴょんと飛び跳ね、私から離れた。両手で脇腹を抱えながらジロリと睨む律の目は、少し涙が滲んでいるようだ。耳も弱けりゃ脇腹も弱い。これは律の弱点を知ったような気がして、私は気分がとても良い。にへっと笑みを浮かべながら律ににじり寄っていくと、律が警戒しながら私と一定の距離を保った。

「律……敏感なのね」

「いやらしい言い方をするな」

あれ。そんなつもりじゃなかったけど。これっていやらしいのかしら。

律の反応が楽しすぎて、私は少し調子に乗りすぎたようだ。この後も律を困らせるようにくすぐり攻撃を繰り返すも、律と私じゃ体格差がありすぎる。私はあっという間にヘッドロックをくらい、身動きをとれずにいた。

「律、痛いってば」

「少しは痛い思いをすればいい」

「ちよつと！ もう少し彼女を労わりなさいよ！」

「じゃあその彼女はもう少し慎めよ」

「むっ……」

まあ確かに調子に乗りすぎた。ここは素直に謝っておくべきかな？
ヘッドロックをくらったまま目線だけ律を見上げる。そして小さな声だったけれど「ごめんなさい」と謝った。けれど律は、無言のまま。どうしたのかと首を傾げると、少し照れたように目を反らす。私の首に絡んでいた律の腕がするりと離れ、あたたかかった肌に冷たい空気が触れた。

私、何かしでかしただろうか？ 自分でも気付かないうちに、機嫌を損ねるようなことをしてしまったのかもしれない。私なら、充分ありえる。せっかく実った恋なのに、いきなりお別れは嫌だ！
そう思った私は恐る恐る律の腕に触れ、そおと彼の顔をうかがってみた。片手で口元を押さえているが、怒ってはいないようだ。むしろ真っ赤に頬を染めて、照れているように見えた。

「律？」

声をかけると律は私を見ながら、私のおでこ目がけてデコピンを食らわす。けれどそれは力加減をしてくれているからか、さほど痛みは感じない。

「痛い、痛いってば！」

「……」

「律ったら！」

名前を叫んだら、律のデコピン攻撃が止まった。なんなのよ、一体。

さんざん弾かれたおでこを擦りながら律を見上げると、じいっと

穴が空くほど見つめられ、無言を貫いていたその口が、ようやく開いた。

「ごめん。なんか、柄にもなくテレた……。俺、自分が好きになった女と付き合うのって初めてで……。なんか悪い。舞い上がってるみたいだ」

「舞い上がってる？」

「や、ホント。マジでかっこ悪いから、あんま俺を見るな」

恥ずかしさを噛み殺そうとして、眼鏡のブリッジを何度も押し上げる仕草をする律が可愛くて、私の胸はきゅんと小さくときめいてしまった。

一見クールな眼鏡男子が、舞い上がってしまったって顔を真っ赤に染める。もう、このギャップがたまらない。

「律、かぁわいいー」

冷やかしているわけじゃない。これは本心。

嬉しすぎて、弱いつてわかってるけど、ついうつかり律の腰に抱きついてしまった。ごめんね、許してね。

私の部屋のお隣さんは、私の愛しくも可愛い彼氏になりました。

36話 らぶらぶ(後書き)

遅くなりましたが、web拍手コメントのお返事を書かせていただきました。いつも拍手ならびにコメントを、ありがとうございます。感謝しております……。

あと、今週一週間なんですけど、ちょっと忙しくてログインできなかった。そうなので、更新が明日から止まってしまいます。申し訳ありません。

途中で放置するようなことは絶対にしませんので、最後までどうぞお付き合いくださいませ。一週間以内に更新できるようなら、こそっと更新しますね。

どうぞよろしくお願いします。

37話 喧嘩勃発

律との付き合いが始まって一週間。私達はずっとらぶらぶ！
：と言いたところだけど、付き合ってすぐに喧嘩勃発。喧嘩の原因は、お土産のことだった。

告白された次の日、私は友哉さんと美波さんにお土産を渡しに部屋へと向かった。それは特に問題なかったけれど、もう一つのお土産、榊さんのお土産を渡しに美波さんのお店に向かった時のことだ。

仕事の帰りにでも美波さんのお店に立ち寄ってみようと思い、バッグの中にお土産を忍ばせていった。しかし仕事が少し長引き、美波さんのお店の閉店時間よりも遅い時間にジムを出た私は、渡すのは明日にしようかと思いつながら歩いていった。お土産は美波さんに渡してもらっても良かったけれど、こういうものは自分で手渡したいというのもあったし、榊さんと美波さんの距離は少しでも縮まったのか訊きたいという好奇心もあって、自分で渡そうと決めていたのだ。でも、そのお土産も今日は渡せないなあと思っていたら、思いがけず前方から榊さんが自転車でこちらに向かって走ってくる姿を見つけ、思わず大きな声で彼に声をかけた。

「榊さん！」

私の声が無駄にデカかったのもあって、榊さんはその声に驚き、慌ててブレーキをかけた。少し前につんのめって転んでしまいそうだったけれど、なんとか堪えたようだ。

「ああ、今仕事帰りか？」

「はい。榊さんも今？」

「そうだよ。今日は閉店間際にお客さんが来て、いつもより店を閉めるのが遅くなったんだ」

相変わらずごついアクセサリが胸元に飾られており、ファッションもちよつと浮いているパンクスタイルの榊さん。これがポリシィなのかもしれないけれど、花屋でこのファッションはどう考えても浮いている。それでも花を傷めないように指輪の類はつけないところは、仕事熱心な人柄を思わせた。

「あ、そうそう。これを榊さんに」

「土産？ ああ、そっか。デートしたって店長から聞いている」

「デート……とはちよつと違う気がするけど、まあそんなものです」

榊さんはニヤリと口端を持ち上げながら、自分の手に収まったお土産を眺めている。その手を見て、私は榊さんの手が荒れていることに気がついた私は、バッグからハンドクリームを取り出す。そのまま榊さんの手のひらにクリームを出そうと思ったのだ。だけど、クリームはあまり残っていなくて、出るように少しチューブを振ってみた。

「あまりないなら、いらない」

「いいから少し待っててください」

ぶんぶんとチューブを振り、キャップを取って彼の手のひらにチューブを向けた。そして絞ったその瞬間！ チューブの嫌な音が鳴り、空気と共にクリームが飛び散ってしまった。

「ああっ！」

榊さんの服や顔までクリームが飛び散り、なんだか申し訳ない気

持ちでいっぱいになってしまった。慌ててハンカチを取り出して、榊さんに飛び散ったクリームを拭き取った。

「ごめんなさいごめんなさい！」

「いや、そんな謝らなくても……」

汚された本人はいたって冷静で、慌てているのは私だけ。顔にも細かく飛び散ったクリームを拭こうとハンカチを持った手を伸ばすと、後ろから私の名前を呼ぶ声がする。それは少しだけ、不機嫌そうな声にも聞こえた。

「めぐみ、何してるの？」

「あ、律」

私は帰り道に律に会えたことで嬉しさを感じていたのに、律はちっとも嬉しそうじゃない。それどころか律の顔は明らかに不機嫌そのものだ。

しばらく、律が不機嫌な理由がわからず、私は榊さんの顔を再び拭こうと手を伸ばしたが、榊さんはそれを遮るように自分の手で拭き取ってしまった。そして一度律をちらりと見てから私の方を向き、「じゃあな」と小さな声で挨拶だけ残して帰ってしまったのだ。

あーあ。まだ服にクリーム残ってるのに。そう思いながら彼の後ろ姿を見送っていた私の肩を律が掴み、無理矢理自分の方に向けさせた。

「なんでこんなところで、二人でこそこそ会ってるの？」

「え？」

その時初めて、律がとんでもない誤解をしていることに気がついた。

律は私がこっそり紳さんと会っているのだと思っているようで、私は慌てて反論した。

「ち、違うよ！　紳さんとはたまたまそこで会っただけだもん」

「……ふーん」

「ふーん」だって！　何よ、変に疑っちゃってさ。馬鹿じゃないの？

やましいことなんて何もしていないのに、律がこうやって勝手に疑う態度に、私はちよつとムカついた。だって、もう少し私を信用してもいいと思う。律が好きだと告げたばかりなのに、私の言葉は彼に届いていなかったのかと思ってしまう。

結局、私と律は並んで家まで帰ったものの、その後に続く言葉は無いまま無言で歩いていった。張り詰めた空気が重くて、隣にいるのも苦しくなる。部屋の前でようやく開いた口から出た言葉は「おやすみ」のひと言だけ。静かに律の部屋の扉が閉められ、私はその様子を見ながら思っではいけないことを考えていた。

私と律は、もしかしたら根本的に合わないのかもしれない……。ただお土産を渡しただけでこんなに律を怒らせてしまうのなら、私達は付き合っていけないんじゃないかな。他の男と喋るな！　なんて言う男がいるけれど、それは絶対に無理だし従いたくもない。例え好きでも、それとこれとは話が違う。ただ従順な女には成り下がりがりたくないから。

律の部屋の扉が閉まる音が、やけに耳に残った。やりきれない寂しさが心に降り積もる、そんな夜だった。

＊＊

そんなことがあってから一週間が経った今でも、律とまったく会えない日々が続いている。

大学が忙しいのか、はたまた律が私を避けているのか……どちらにしても顔をまともに見ていなくて、会えるのは携帯の待ちうけのみだ。

部屋が隣なのだから、律が帰宅するのはわかる。でも、あの喧嘩以来、律はアパートに帰ってきていない。

友達の家とかにいるのかな、と思いメールをしたけれど、忙しいからという答えになっていない返事しかこない。そういうこと訊いてるんじゃない！ と携帯を壊しそうになったけれど、とりあえず怒りをおさめるように深呼吸、深呼吸。深呼吸をしてから携帯の待ち受け画面で笑っている律を見ると、どうしようもなく会いたくなってしまう。携帯を抱きしめた。

今日の夜は帰ってくるかな。帰ってきたら、とりあえず謝ろう。

そう思いながら家で過ごしたけれど、今日もまた、夜になっても律は帰ってこなかった。

37話 喧嘩勃発（後書き）

更新止めて申し訳ありませんでした。

今日からまた頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

38話 甘い嵐

昨夜は携帯を握り締めながらベッドの脇で転寝してしまい、目覚めたらすでに太陽が昇っていた。時刻はまだ、朝の七時だ。仕事までまだ余裕はある。

「うう……だるい」

変なかつこうで寝てしまったためか、体の節々がギシギシと痛む。でも、そんなことに構ってられない。私はささっと身支度を済ませてから、律の部屋へと足を運んだ。

少しためらいはあったけれど、律の部屋のインターホンを鳴らしてみた。でも、律はいつまでたっても姿を現さない。

また、帰ってこなかった。そんなに私は、律を怒らせてしまったのだろうか。不安ばかりが募って、気分が優れない。会いたいのに会えない。いつでも会える距離に住んでいるのに、今はこんなに距離が離れてしまった。なんでこうなってしまったのだろう。今の私の精神状態では、すべての物事を悪いほうにしか考える事ができなくなっていた。

「はぁ……もうヤダ」

こんな自分は、いつもの自分じゃない。いつもみたいにアホなことを言えるようなほど、今の私には元気がない。こんな思いするくらいなら、律に自分の気持ちを打ち明ければ良かったとすら思えてしまう。本当はそんなこと、心の底では思ってもいなくせに。ぐるぐると考えが纏まらないまま律の部屋の前から立ち去ろうとしたら、いきなり大きく視界が歪んだ。ぐらぐらと揺れて気持ちが

悪い。

「な、なに？」

額に手を当てながら必死で前を見ようとしたけれど、いつまで経っても視界は歪んだままだ。ぐにやりと曲がる景色が気持ち悪くて、その場で膝をついてしまったけれど、膝をついてもぐるぐるする。目をぎゅっと瞑って酷い眩暈がおさまるのを待っていたけれど、どうやらおさまりそうもない。

「どうしよ……だ、誰か」

「たすけて」と叫びたかった。でも、その声は誰にも届かないまま、私の意識はプツリと途切れてしまったのだった。

＊＊

暗い闇が、私を飲み込もうとしている。飲み込まれないように必死になって逃げるけれど、闇の手がすぐそこまで迫っていた。

「やめて！」

闇を振り払うように手を大きく動かし叫んだ瞬間、いきなり眩しい光が飛び込んできた。

私の目に映るのは、見慣れた天井。そう、ここは私の部屋で、私は自分のベッドで眠っていた。

「……あれ？」

何がなんだかわからなくて混乱したけれど、わかったのは振り払

おうと大きく動かし手に、痛みが走ったことくらいだ。痛みが走った手を見ようと顔を向けると、そこにいたのは会いたくてしかたなかった律がいた。

「律！」

がばっとベッドから体を起こしたけれど、ふらふらと再びベッドに沈んでいった。おかしいな。自分の体なのに儘ならないなんて。でも律がそこにいることに喜びと驚きを感じて、動かしづらい体を少しずつ律の方に移動させた。

「……アンタなあ」

呆れながら溜息を吐く律は、口調は怒っているけれど彼の表情は怒っていない。それどころか心配してくれているようだ。寝ぼけながら律の頭頂部に、力いっぱい手刀を食らわせてしまったというのに。痛そうに頭をさする律を見ていたが、今の私に律の頭頂部の心配をする余裕なんて、微塵もなかった。

「律、いつ帰ってきたの？　なんで帰ってこなかったの？　まだ私のこと怒ってるの？」

自分の制御しきれない気持ちを、一気に律にぶつける。不安との闘いに、私はもう限界だったようだ。言葉と共に流れる涙が、頬を伝って枕を濡らした。

あまりにも必死に質問をぶつける私の姿に律は一瞬驚いた顔をしたけれど、すぐに柔らかく微笑みながら私の不安を取り除こうと頭を撫でてくれる。そのいつもより優しい手付きに、私の中にあったかい気持ち広がっていった。

「ごめん。帰ってきたのは朝。帰って来れなかったのはまあ、実家でちよつとな。……それに全然怒ってないから。むしろ俺の方が悪かった。ガキっぽい独占欲を勝手にぶつけて勝手に怒って。本当にごめん」

私の質問に対しての律の答えは、とても丁寧だ。そうか、この前のことは怒ってないんだ。律と別れる必要は何もないんだ。彼の言葉を聞いて、体から力が抜けてしまった私は、ようやく律の前で笑うことができた。

親指で私の涙を拭う律。その行為が嬉しくて、フラフラした頭のまま体を起こし、彼に抱きついた。今までいなかった数日分の不安や悲しみを取り除きたくて、彼が確かにここにいることを実感したくて、思わず力いっぱい抱きしめていた。律の首筋に顔を埋めると、大好きな律の匂いがいっぱいに感じられる。

「よかった。律がこうして帰ってきてくれて」

私の言葉に反応するように、律の手が背中に回され、同じように力強く抱きしめられた。

今、私、すごく愛されているような感じがする。幸せだなあって心底思えるから。

「……ちよ、め、めぐみ……く、くる、くるし……!」

おお。幸せを噛み締めすぎて、危うく律を落とすところだった。力いっぱい首筋に抱きついて、律の呼吸を止めてしまいうだった。私の背中を何度もタップしている律が面白くて、つい力をさらに入れてしまいうだったけれど、せっかくイイ雰囲気なのに壊してはもったいない。そっと力を緩めて律から少し離れると、今度は私の前に嵐が渦巻く。

律の顔が近すぎて睫毛しか見えない。でも、その長い睫毛に見惚れるような余裕はまるでなかった。嵐のような律の唇を受け止めるのに、せいっぱいだ。甘噛みするように上唇や下唇を刺激して、何度も啄ばむようなキスをする。そしてそのまま甘く深い、ねつとりと絡むような律の舌が伸びてきて、私は呼吸を奪われるほど激しい嵐に襲われた。でもそれは、甘く刺激的な嵐。何度も何度も欲しくなるような、そんな時間だった。

39話 笑いたきゃ、笑え

甘いキスは嵐のように降り注ぎ、ふいに目が合った途端、律のテレた顔が目の前に見えた。カッと顔を赤くして恥ずかしそうに眼鏡を直す律は、いきなり挙動不審になってしまったのだ。そんなに恥ずかしかったのかな？ 遊園地ではあんなの意地悪そうにせまってきたのに、なんだこのギャップ。初めてキスしました、みたいな初々しさが漂い、なんだか私まで恥ずかしくなる。

「なんでそんなにテレるのよ」

「や、だって」

「何？」

「……制御できなくてガツガツするなんて、俺、ますますガキっぽくね？」

律は自分の方が年下だということを気にしているのだろうか。別にそんなこと気にしなくていいのに。むしろがついても構わない……いや、嘘嘘！ 絶対にそれは言わない。

それにしても律の唇は柔らかかったなあ。しかも何気にキス、すっごく上手だし。思い出すとろーんと締まりのない顔になり、思わずにやけてしまうのはどうにかしたほうがいいかもしれない。必死ににやけないように取り繕ってみたけれど、口元の緩さはどうにもならなかった。

「口！ ほらまた。なんでアンタはヨダレを垂らすんだよ」

ヨダレ！ なんで私はこうもヨダレを垂らすところを律に見られてしまうのか。ごしごしと口元を拭いながら、恥ずかしさのあまり

布団の中に再び潜ってしまう。でも布団を律に捲られて目が合った時には、恥ずかしさも頂点に達してしまった。

そっと伸びる律の手が、私のおでこに触れた。「熱はうーん……少しあるな」と言いながら、布団を再び私に掛けなおす。もしかして、看病してくれたりするのかな？ と、不謹慎ながらもちよつとドキドキしていた私だったけど、律のやつ、どこまで冷たいんだ。

「俺、大学あるから。大人しく寝とけよ？」

ええっ！ わかるよ、大学が大事なことくらい。でも、なんかこう、もっと優しさを感じるような言葉を期待してたんだけど。律の半分は優しさではできていないことが、今判明した。

「終ったらすぐ帰ってくるから。ケーキでも買ってきてやるよ」

やっぱり前言撤回。律は優しさでできています。

「ケーキ、いちごのやつがいいな」

「……わかった。いちごな。じゃあ何かあったら利人さんに……頼んどく、わ」

なんだ？ 酷く歯切れが悪いな。利人さんに頼んでくれるのはいけれど、律は私と利人さんが二人きりになることに抵抗はないのだろうか？ 榊さんのときは、あんなに怒ったのに。変な奴。

不思議さを感じながらも私の頭はまだぼーとしていたので自然と瞼が重くなり、とろとろと眠りについてしまった。遠くで律が部屋を出て行く音だけが、聞こえた気がした。

＊＊

なんだか、すごくイイ匂いがする。くんくんと鼻を利かせながらゆっくり目を開くと、キッチンに立つ二人の男性の後姿が見えた。

誰？ 一人は律。もう一人は……利人さん？

寝起きのぼーっとした頭で彼らを見つめてみると、律が困惑したような表情をみせて後ろに下がっていくのが見える。利人さんは、少し意地悪そうに何かを言っているような……。よくわからないけれど、私はとりあえず起き上がることにした。

「ああ、めぐみさん。具合はいかがですか？」

「利人さん……はい。少しいいです」

「でもまだ、顔が赤いですね。息も上がってますし」

利人さんの大きな手のひらが、頬に触れた。その手が冷たくて気持ちいいので、噛み締めるように目を瞑った。

「めぐみさん、そんな顔しちゃダメですよ……？」

「へ？」

ぱちっと目を開くと、目前に迫る利人さんの顔があった。その利人さんの後ろに律が仁王立ちして、彼の襟元を後ろからぐいと引いていく。あっという間に、利人さんが私から遠ざかっていった。

「利人さん！ ちょっと近づきすぎ」

「いいじゃないですか。私だってめぐみさんが心配なんですから」

「ダメだったらダメだ」

「……律くん？ 心配は無用だと言ってるじゃないですか」

そっと利人さんが律の手に、自分の手を重ねている。律がそれを振り払うように私のところまで来て、膝をついた。

「水、飲めよ」

手渡してくれた水グラス。冷たくて気持ちいいのは嬉しいけれど、律のその複雑な顔は一体何なの？　なんか私より顔色悪いような気がするんだけど。

律と利人さんは、遊園地に行った日からなんとなく様子がおかしい。それを何度も追求しても、納得できる答えは返ってこなかった。男同士にしかわからない、何かがあるのかもしれない。だから女の私にはわからないのかも……と、イマイチ納得できないオチを自分なりに出して、このまま何も訊かないことにしたのだ。気になるんだけどね！

まだ熱が微妙にあるけれど、朝から何も食べていない私はおなか为空いている。さっきからイイ匂いがあるので、さらに空腹を強く感じてしまう。でも「おなか空いたな」とは言いづらくて、グラスのお水をごくごくと飲んでいた。すると、あろうことか今まで生きてきた中で一番大きな音で、私のおながが泣きだしてしまった。必死でおなかを押さえるものの、音はちっとも消えてくれない。合唱の如く何度も鳴り響く腹の虫は、律や利人さんの意識を私へと集中させる。

——な、なんでこんなタイミングで……！

一人のときならまだしも、律も利人さんもいるというのに。恥ずかしすぎる……！

「ぶはっ！　すっげー音！」

笑いを堪えていたのか、律が物凄い勢いで吹き出した。しかも目には涙がたまっていて、両手でおなかを抱えながらヒィヒィ笑っている。

「……ぷっ。あ、すみませんめぐみさん。ぷぷ……」

り、利人さんまでっ！　優しい利人さんなら「おなかが空いてい
るんですね」くらいに流してくれると信じていたのに。利人さんに
まで裏切られてしまったような気分だ。

律ほど大笑いしてはいないけど、私のおなかの音で笑っていた利
人さんが小さく笑いながらもキッチンへ向かい、お鍋の中のもの
をお皿に移している。

「さあ、どうぞ。たくさんありますからね」

持ってきてくれたのは、たまご粥。優しい香りとあたたかな湯気
で、とても美味しそうだ。お粥が熱いので、木製のスプーンを添え
てくれているのも嬉しい。そしてお粥を目の前にして、さらにもう
一回。私のおなかが大きく鳴り響いた。

「……ぷっ」

「利人さん。もういいですから思い切り笑ってください」

「いえいえ、そんな。ぷっ」

目覚めは最悪。もう、好きなだけ笑うといいさ。

お粥は熱々だというのに、私は口にお粥を搔っ込んで恥ずかしさ
に耐えた。もう、風邪を引いたことすら忘れられそうなほどの羞恥
心に襲われた目覚めだった。

40話 幸せってやつ

美味しいお粥は、あつという間に平らげてしまった。デザートは、朝お願いしたいちごのケーキが、ちゃんと用意されていた。

お皿に乗せられた魅力的な赤いやつ……！ ふわっふわのスポンジに、とろりと甘い生クリーム。口の中に入れた瞬間、見事に味が調和され、溶けるように舌の上でなくなっていく。上にでん！と構えた赤い宝石のようないちごの酸味が、甘くなった口の中を引き締めてくれる。

「くっっ！ おいしい！」

拳を握りふるふると感動をしていると、律が呆れたように「大袈裟」と言う。でも、その顔はまんざらでもなさそうだ。

ケーキを食べ終えた頃には、少し体が楽になっていた。よく眠れたのが良かったのかもしれない。

「なんか熱下がったみたい」

「二人の看病のお陰だよ」と言いたかったのに、利人さんの先制攻撃に私の口は閉ざされてしまった。

「……んー、まだもう少しありますよ？」

私の熱を測るため、利人さんが私のおでこに自分のおでこをくっつけた。ち、近い……近いよ、利人さん！

それを見た律が、またもや利人さんの襟ぐりを掴んで後ろにポイツと転がした。ちゃんときれいに転がるところが、利人さんだよな

あ。ギャグ漫画見てるみたいで、本当に面白いんだから。でも、そんな利人さんも素敵ですけどね。

「あのなあ！　　どんだけアンタは無防備なんだ！　　少しは身構えろよ」

「そんなあ」

律が怒る気持ちはわかるけど、あれは不意打ちでしょ。身構えるといってもこっちは風邪引いていつもと同じようには動けないし、相手は利人さんなんだし。利人さんが私を「女」として見ていないことくらい、律だって気付くでしょ？　　彼は私を「子供」扱いしているに過ぎないのだから。

利人さんは体勢を整えて、ゆっくりと立ち上がりながら空になったお皿をさげにキッチンへ。さりげなくこういうことしてくれる利人さんには、恋人はいないのだろうか。女性なら憧れると思うけどなあ。こうしてささっと家事をしてくれたり気遣ってくれたりする男性で、なおかつこんなにかっこいいのだから。女性がほっとかないはずだ。

「利人さんって、恋人いるんですか？」

訊いた途端、ごほごほとむせ出したのは律だった。

「なんで律が動揺してるの」

「いや、別にっ！　　ど、動揺したわけじゃなくて、ただむせただけだ」

そんな私達の様子を見て、利人さんがぐすつと笑う。そしてその笑顔を浮かべたまま、利人さんは口を開いた。

「……そうですね。恋人でもいれば、もっと毎日が楽しいのでしようけどね」

「利人さんなら素敵ですから、すぐできそうですね」

「ふふ。ありがとうございます。刺激的な恋人を募集中ですよ」

刺激的な？　よくわからないけど、毎日刺激的に過ごしたいということかな。

完璧すぎる利人さんだから、もしかしたら女性がみんな遠巻きに見ているほうが幸せだと感じるのかもしれないなあ。実際私もそうだし。利人さんは目の保養って感じがするから。

そんな和やかな会話をしばらく楽しんでいたけれど、利人さんはそろそろ夕飯の準備をしなくてはと言い残して、部屋から出て行ってしまった。美味しいお粥を作ってくれた利人さんに、お礼をしながらは。遊園地のお礼もまだなのに、一体何をしてあげようかな。律と二人きりになった部屋は、やけに静かだ。でも、そんな静けさも、ちっとも苦ではない。心配してくれる律の瞳は、やけにあたたかくて眼差しが柔らかくて……どきどきしてしまう。最初の頃の冷たいガラス玉の印象は、今ではまるでなくなった気がする。

「もう少し、寝たほうがいいな」

そう言いながら私の体をゆっくり横に倒し、掛け布団を顎の下まで掛けてくれた。胸の上に手を置いて、子供をあやすようにトントんと、一定のリズムを刻みながら叩いてくれる。午後昼下りの穏やかな時間が、私に幸せを運んでくれた。律のリズムがだんだん私に眠気を運び、ゆっくりと目を閉じた。

＊＊

再び目が覚めたのは、すでに暗くなってからだった。でも、部屋

の中は明るく、窓にはカーテンも引いてある。パチパチと何かの音が聴こえてきて、横になったまま顔だけを横に向けた。そこには、律が課題か何かをやっているのか、ノートパソコンのキーボードをパチパチと叩いている。横に詰まれた参考書やプリントの山を見て、ちよつとだけ申し訳なさど嬉しさを感じた。課題で忙しいのに部屋へ帰らず、私と一緒にいてくれる。そんな律の優しさが嬉しくて、もう少しだけ寝たフリをしようと布団を被って目を閉じた。

パチパチ……静かな部屋に響く小さなこの音が、どうしようもなく嬉しい。一人じゃないんだ、律が側にいてくれるんだ。ただそれだけなのに、私は嬉しくてたまらない。少し弱り気味の自分の側に、一番いて欲しい人がいるという現実にとりと浸りながら、再び眠りに落ちてしまった。

その日は、夢でも律に会えた。おぼろげだけど、確かに律が私の側で微笑んでいた気がする。そんな優しく甘い時間を夢でも過ごすことができて、目覚めた時もほんわりとあたたかい気持ちは続いていた。

夢の中まで幸せを、ありがとう。

41話　くるくる変わる

「仕事ー！」

目覚めて第一声がこれ。そう、私ったら仕事のことをすっかり忘れていたのだ。生活の一部になっていたと思っていたのに、ちよつと具合が悪くなっただけで仕事のことを忘れるだなんて……ありえない。

とりあえずベッドから起き上がり、床に転がっている充電中の携帯を手を取った。

休みますのひと言も言わずに、私ったら！　なんというアホ！

まったくもって社会人としての自覚に欠けている。アルバイトという身分の私の首なぞ、簡単にスパッと切り落とされてしまうというのに。あわわと慌てながら会社の番号を検索していると、横から少し掠れた声が聞こえてきて、私の手から携帯をスツと取り上げた。

「何騒いでるんだ……うるせー」

「律、どうしよう！　私、昨日、無断欠勤しちゃったよ！」

「無断？　ああ……言ってなかったっけ。俺、電話しといたよ。ぶっ倒れたから休ませるって。そしたら向こうの人が、次の日も休んでいいって言ってた」

なんですと！？　律のくせに気が利く……じゃなくて。そんな大事なこと、すぐ教えてくれよ。まあ、訊かなかった私も悪いけど。それにしても次の日もってことは、今日も仕事はお休みってことだよね。ああ、働けば働くほど給料が入るというのに。この風邪のおかげで律との仲は良くなったけれど、二日分の稼ぎはパーになった。

「うう……お給料、減っちゃう」

「アンタ、本当に貧乏なんだな」

「ストレートに言うな」

そりゃあ私は貧乏ですよ。それでも別に暮らせなくなるほどではない。もしもに備えて貯金もしたいし、シーズンごとに可愛い服や靴なんかも買いたい。だから絞れるところは絞る。それが独身OLができる最大の節約なのだ。まあ、OLじゃないけどね。

仕事のことがばかり気にしていたけど、もう朝だというのに律はいぶんのんびりしている。大学は行かなくてもいいのだろうか？

「律、大学は？」

「ん？ 今日には特に行かなくても平気だから。ずっとここにいますもんなんだけど……ダメ？」

「ダメじゃないよ！」

ダメ？　なんて可愛く言われると、不覚にも胸の真ん中をずっとゆんと射られた気がしてしまう。くっ……顔がいいからって可愛い仕草なんかしたって！　すっかりメロメロだわ！

惚れた弱みとでも言うのか、律のやることなすことがすべて可愛く見える私は、相当重症だ。恋は盲目とはよく言ったものだ。

ベッドを背もたれにして、二人で並んでクッションに座っている。でも律は「こっちこっち」と手招きをして、私を律の足の間に座らせた。

「……もう辛くない？」

容態を心配してくれるのは、とても嬉しい。でもね、背後から抱きしめながら私の肩に顎を乗せて、耳元で囁かないで欲しいの。甘い刺激が、酷く心臓を揺さぶるから。

「う、うん。へーき」

ほらっ！ もう完全に私の声が上擦っているのが、自分でもよくわかる。

背中に律の体温を感じ首筋に彼の吐息がかかると、体がみるみる緊張して固くなってしまふ。こんなにバクバクと心臓がうるさく鳴っていることがバレた日には、きっと律の意地悪な言葉攻撃を受けること間違いない。それだけは避けなくては。あまり意地悪なことを言われると、どうしたらいいのかわからなくなる。「ふふ、ダメよ。坊や」なんて遊び慣れた大人の台詞など言えるはずもない。律に心臓の音が伝わらないように、ほんの少しだけ体を前にずらし、密着していた背中に僅かな隙間を作る。でも、それもすぐ律の手によって、隙間を埋められてしまった。

「なんで離れるの？」

「いや、その風邪が移ったらマズイかなーって」

「別に。アンタの風邪くらい貰ってやるよ」

ぐはー。まったく真面目にそういうことを言わないでください。こんな言葉まで脳内変換されて「アンタごと貰ってやるよ」に聞こえた私は、限りなく変態に近いだろう。自覚はある。でも隠し通す。そうしなきゃ、律の彼女は変態です、なんて言われかねない。

律の胸の中で小さくなっている私を、逃すまいと後ろからぎゅっと抱きしめる律。律の柔らかい黒髪が頬にかすって、ちょっぴりくすぐったい。ピカピカに磨かれた眼鏡が少しだけずれて、いつもとは違う印象が残る律の顔。伏せられた瞼に、長い睫毛が揺れている。

「……何？ そんなにまじまじ見られると恥ずかしいんだけど」

「あ、ご、ごめん」

いつの間にか私は、律の顔を凝視していたらしい。瞳の動きとかすうっと通った鼻筋とか、形良い唇だとか、小さくて気付きづらいけれど、左目の下にほくろがあるだとか。今更ながら初めて気付く律のこと。小さな発見も、宝物のように思えるから不思議。

「で？　なんで見てたの？」

からかうように口端を持ち上げる律が、意地悪そうな声を出しながら私の髪の毛をひと房持ち上げて、指でくるくると弄ぶ。

「や。その、別に理由は特にないんだけど……」

「またまた。そんなわけないでしょ。熱い視線を感じたけど？」

生意気な！　律のくせに生意気だぞ、と言ってやりたかった。でも、こんなに甘い時間を自分の手でぶち壊すのは嫌だと思った私は、きちんと素直に自分の気持ちに律に伝えた。

「やっぱり律はかっこいいなーって、思ったの」

素直な私、万歳。ほら、ちゃんと素直に言えるじゃない。

「昔はさぞかしモテたんでしょーね」

こら、私！　最後に捻くれ者のような聞き方しないの！　かっこいいなんて言った後にテレずに可愛い女の子を気取るのは、私には無理だった。可愛い女の子になれる方法を探すには、どうしたらいいの？　自分の可愛げのなさにガッカリしていたが、律は真面目な顔をしたままだった。まっすぐ一点を見つめ、何かを考えているように見える。

「律？」

どうしたのかと思い律に声を掛けると、私の声に反応して律が顔を上げた。

「何かマズイことでも言っちゃった？」

「いや、そうじゃなくて」

ちよつと言いつらそうに口をもごもごさせる彼が、いつもより小さく見える。どうしたのだろうか、と首を傾げていると、律が昔を思い出すように口を開き始めた。

「……俺は昔、モテるところか、いじめに遭ってたんだ」

切なく揺れる律の睫毛と衝撃的な過去に、私は一瞬で凍り付いてしまった。

41話　くるくる変わる（後書き）

明日の更新はありません。

明後日0時に更新します。

いつも更新がとびとびになってしまつて、ごめんなさい。
よろしくお願いします。

42話 律、過去話をする

静まり返った部屋で、ぽつぽつと律が語る昔話。目を伏せたり静かに閉じたり、時折天井を仰ぎながら辛い過去の話を私に聞かせてくれた。

殴る蹴るは日常茶飯事。持ち物が捨てられていたり、頭からバケツの水をかけられたり。学校で大切に育てていた朝顔をすべてダメにされてしまったことなど、私は一度も経験したことがない出来事を律は話してくれる。

いじめられていたことが原因でどんどん臆病になり、それでも家族に心配かけたくないという思いから、「大丈夫」と自分を必死で偽ってきたこと。小さな体に大丈夫と言い聞かせて、傷だらけの体や心を必死で隠してきた律。それを思うと、その頃の律に私が出会えていたら、と思ってしまう。何が出来るかはわからないけれど、今のように側にいることくらい出来たかもしれない。守ってあげられたかもしれないのに。想像もしなかった律の壮絶な過去に、私の目には涙が滲む。でも、何度も涙を飲み込んで、律の話に耳を傾けていた。

「それでもうちは賑やかで、家では凄く楽だったんだ。なんせ姉が四人もいるからね」

「四人もお姉さんがいるの!？」

「うん。少し年が離れていて……母親の代わりに俺を育ててくれた」
「……そうなんだ」

「お母さんは？」て訊こうと思った。でも、なぜか訊けなかった。理由なんてないけれど、なぜか訊いてはいけないような気がして、私は納得したような答えしか言えなかった。でも律は、そんな私を

見抜くように言葉を続けた。

「母親がさ、俺が小さい頃に家を出て行ってね。あまり記憶にはないんだ。でも、出て行った理由が母親が他の男と不倫してたってことは、知ってた。一番上の姉と父親が夜中に口論していた時に、うっかり聞いちゃったんだ。それからというもの、不倫に対して過剰に反応しちゃうんだよなあ……」

ここにきて、律が不倫を不潔で嫌いだという理由がよくわかった。自分の母親が出て行った原因が不倫というのなら、律がここまで毛嫌いしているのも納得だ。自分達を捨てた母親を、まだどこかで恨んでいるのかもしれない。

吐き捨てるように不倫を毛嫌いしている律。そして自分が気付かぬ合間に不倫をしていた私。もしもこの先、私の過去が律に知れてしまったら、間違いなく律は私を遠ざけるだろう。「別れ」の二文字の恐怖が、今日の前まで迫っているような気がしていた。

「めぐみ、どうした？ 顔が真っ青だけど」

「え？」

「まだ具合悪いんじゃないか？ こんな時に俺の話して、ごめん」「そんな！ そんなことないよ。律が自分から過去の話をしてくれて、嬉しかったよあ、別に律の過去の話が嬉しいとかじゃなくて！」

もう何が言いたいのか、自分でもさっぱりわからない。でも、律が私に話してくれたという事実は本当に嬉しかった。辛い過去かもしれないけれど、新たな律を知る事ができたから。

こうして律が私に辛い過去の話をしてくれたというのに、私は律に話す事ができない。すべてを話すのがいいことだとは思っていないけれど、隠し事をしながらいつバレるかとかドキドキしながら過ごすのは心臓に悪いし、律に罪悪感を感じてしまう。醜い自分を曝け

出さないように必死で取り繕っているような気がして、引け目を感じてしまうのだ。

「前さ、めぐみも自分に言い聞かせてたことあったろ？ 大丈夫って。あの姿がどうしても過去の自分に重なって、めぐみを見るとイライラしてた。でも……その反面、すごく気になってた」

優しい瞳で私を見つめ、壊れ物に触れるようにそっと頬をなでる律。だから私が「苦手」だったのかな。過去の自分を思い出してしまふから。私が「大丈夫」と自分に言わなくなったのは律のおかげなのに。きっと律自身、そのことに気付いていないだろうな。

冷たかった律の瞳に、酷く惹かれたことを私は覚えていてる。ぞっとするほど冷たいのに、ずっと見つめていたかったあの不思議な感覚を。今思えば、あの時から律に惹かれていたのかもしれない。ひとめぼれってやつかな。

一人で思い出しながら、えへへと不気味な笑いを浮かべていた私の頬を、律の手が優しくなでずにぎゅっと摘んだ。

「いひゃいっ」

「一人でやにやすんなよ。気持ち悪い」

「ちよっと！ 気持ち悪いは言いすぎでしょ」

「思ったことを言っただけだ」

ほらみろ！ また私と律の空気が甘くならなかった！

どうしてもこういう感じに、茶化したような空気を纏う私達。この様子じゃとてもじゃないけれど、律に抱かれる日なんて半世紀くらい先のような気がしてしまう。いや、別に！ 今すぐ律に抱かれたいとかそういうのではなくて、自分の好きな人にはもっと自分を知って欲しいというか……。誰に言い訳しているのか、私の脳内劇場は、なおも続くのだった。

しばらく、律は大学でたっぷり出された課題を黙々と始めた。私はベッドに転がって、買ってからしばらく読んでいなかった文庫本をぼらぼらと捲っていた。

ちらい、と何度も律の背中を見つめるが、律は一度もこちらを振り向かないまま課題に没頭している。彼の集中力は、本当に凄かった。じいっと彼の背中を見つめてもまったくこちらを向かないし、わざとらしく本を落としてみてもまるで気付かない。ただひたすら黙々と課題をこなしている。

「すごい集中力……」

多分聞こえないと思っていた私の呟きは、一気に彼を振り向かせた。

「わっ！」

そして、あっという間に彼の体が私の上にのしかかる。

「かまって欲しいなら、素直に言えばいいのに」

「いや、そういうわけじゃなくて」

「かまって欲しいんでしょ？」

ん？ と勝ち誇ったように眼鏡のブリッジを押し上げる律。悔しいけど、律の言葉通りだった。ほんの少しだけでいいから、私にかまって欲しかった。自分でもどうしてこんなに律に甘えなくなるのかわからないけれど、とにかくかまってほしかったのだ。それを見抜かれて、私は恥ずかしさで顔を手で覆った。だって絶対、顔が赤いもの。

「答えないの？　じゃあ今からいっぱいかまってやるよ」

顔を覆っていた両手を掴まれ左右に開かれると、そのままベッドに押し付けるように律が上から押さえてしまう。顔の横で閉じ込められた私の両手、律が私から身動きを奪っていく。嬉しそうな律の顔が迫り、そのまま呼吸を止めるほどの激しい唇が舞い降りた。食べられてしまうほどの激しさに、吐息が激しく横から洩れていた。

「……はぁ」

長かったキスから解放され、大きく洩れたのは自分でも驚くほど甘い吐息。それを聞いた律は、再び私の唇を奪っていく。頭の中まで溶かされてしまう激しさに、体が思わず疼いていしまう。キスの後を望んでいる自分がいて、律の手が伸びてくるのを待ち望んでいた。

キスが終り、私の瞳の映る律は、頬が上気してほんのり色香を漂わせて……

「今日、抱いてもいい？」

ストレートすぎる言葉に恥ずかしさを感じながらも、私は返事をする代わりにゆっくり瞳を閉じたのだった。

42話 律、過去話をする（後書き）

ブログにて、利人視点のお話を2話分更新しました。

前回同様、読まなくても本編には支障はありませんので、ご安心くださいませ。

利人と律がめぐみを看病するところを、利人視点でお楽しみいただければなあと思います。

詳しくはブログにて。マイページよりどうぞお進みください。

＊注意書きを入れました。納得した上でお読みくださいませ。

43話 幸せは、続かない

部屋の明かりを消して、夜空にぽっかりと輝く月の光だけが窓から射し込む。月明かりが律の肌を照らし、意外なほどがっしりした上半身を浮かび上がらせた。そっと手を伸ばし、律の逞しい胸に触れると、私と同じくらいドキドキと激しく鼓動が鳴っていた。

「緊張、してる？」

「そりゃするだろ。緊張して手まで震える」

目の前に出された律の手は、小刻みに震えていた。素直に答えてくれる律が可愛くて、あまりにも愛おしすぎて、欲望のまま彼の手の中で狂ってしまいたいと思ってしまう。

互いの唇が触れあい、肌を滑るように律の手がなぞる。くすぐったいやら恥ずかしいやら、おかしな気持ちになってしまう。それでも与えられる刺激はあまりにも甘くて、体も心もすべてが蕩けてしまい、思考まで止められてしまった。熱く甘い夜は刺激的で、満ち溢れるほどの幸せを与えてくれた。

＊＊

「あだっ！ いたたたたっ」

なんて品のない叫び声。さっきまで二人だけの甘い時間を過ごしていた時、震えるほどの快感を味わったその瞬間！ 私の足が攣った。指先まで力が入り、あっという間に足が攣ってしまったのだ。そんなわけで、二人の時間の後の甘い腕枕タイムはおあずけとなり、攣った足を律が呆れながら擦っていた。

「アンタなあ……はあ」

深い溜息という特典までついてきた。もう、情けないやらなんとやらで、涙が出てきちゃう。

「ジムで働いてるくせに、運動不足すぎじゃねーの？」

「だって私はジムの受付！ あたたっ」

足の甲がぴんつと反り返り、ぴきぴきと嫌な痛みを発している。それでも律が優しくなでてくれているせいか、少しずつ足の感覚が戻ってきた。

感覚が戻った足を擦りながら、私も一つ大きく溜息を吐いた。本当に色気のない自分が嫌になってしまふ。こんなアホな彼女で、律はいいのだろうか？ 悲しいけれど、律の周りにはきつと、もっと素敵な女性がわんさかいるに違いないのに、どうして私を選んでくれたんだろう？ 自己嫌悪に陥るほど、自分の馬鹿さ加減に呆れて言葉も出てこなかった。

この後のらぶらぶいちやいちやタイムはおあずけかあ。なんて思っていたけれど、私の隣に律がよじよじとやってきて、ベッドにどさっと横たわる。

「ほら、おいで」

腕を伸ばして自分の二の腕をぽんぽんと叩く律。これは私に腕枕をしてくれるという、嬉しいサイン。どんより顔だった私は、ぱあっと晴れ渡った顔に変わっただろう。私はそのまま、尻尾を振って律の隣に横になり、律のたくましい腕に頭を置いた。そしてそのまま、律の反対の腕が私の背に回り、きゅっと抱き寄せてくれた。

くはーっ！ 幸せ！ 久しぶりの幸せ気分になりながらももっと

律の体温を感じたくて、私は律の胸に顔をすり寄せる。女性とは違う男性ならではの筋肉質な胸板に惚れ惚れしながら、たくさん律を感じたくて頬を胸板に押し付けた。

「可愛いやつ」

年下に「可愛い」と言われるとは思ひもなかったなあ。でも、大好きな彼からの可愛いという言葉に、喜ばない女はいないと思う。もちろん、私もその一人だ。

「めぐみの表情は、くるくる変わって可愛いな。見てて飽きない」

「そ、そんなに表情豊かかな。でも、律だっってくるくる変わるよ？」

「俺が？ このポーカーフェイスと言われた俺が？」

「誰がそんな冗談を……」

「もう一度言うけど、ポーカーフェイスの俺が？」

どうやらポーカーフェイスという自分が、いたく気に入っているらしい。大事なことなので二度言いました、みたいな律の台詞がかしくてたまらない。嬉しいときは目を細めて笑うし、恥ずかしい時は耳まで真っ赤になってるし、怒った時は眉間に深く皺が刻まれるほど表情が変わる。そんな彼になったのは、私と出会ってからだとうぬぼれてもいいのだろうか。彼を変えたのは、私。そうであってほしいな。

ベッドの中でお互い裸のまま抱き合って、幸せな眠りが訪れようとしていた時……私の携帯がけたたましく鳴りだした。

「……せっかくいい時間を過ごしてるのに」

幸せムードがぶち壊されたような気がして、私に気分は優れない。しかも着信相手は妹の萌からだった。あ、そういえばまだお土産渡

してなかったな。

いくら無視しても、萌は電話を切ろうとしない。仕方なく通話ボタンを押し、声を出した途端、萌のボリューム過多の声が私の鼓膜を突き破ろうとしていた。

『お姉ちゃん！　どういふことか説明して！』

第一声がこれ。どういふことか説明してほしいのは、こっちだ。

「萌？　とにかくちょっと落ち着いて。一体何の話？」

この後の萌の言葉は、あまりにも衝撃的すぎた。

『お姉ちゃん、前の会社の人と不倫してたって本当なの！？』

「……え？」

『今日、不倫相手の奥さんが家に来たの。それでお姉ちゃんの忘れていった私物とか持ってきて……』

「ちょ、ちよっと待って」

頭がこんがらがっている。だって私、元彼の家には一度だって行った事がないのに。どうして？　彼の別宅にだって私物を置いていたことなんか、一度だってない。混乱する頭を抱えながら、一つだけ思い当たることがあった。

「私物って……私の本？」

『そうだよ。たった一冊の本を持って、奥さんが乗り込んできた。どうやって家を調べたのかは知らないけど、凄く冷静すぎて逆に怖かった。お父さんもお母さんも、ずっとずっと謝ってたんだからね』

そう。一冊だけ彼に本を貸したまま、返ってこないものがあった。

そのしおりに、彼宛にメッセージを書き込んだのを、よく覚えてい
る。彼の名前は書かなかったけれど、私の名前は書いた。しおりに
書いたのは会える日の予定だった気がする。なんでまた、そんなも
のが今頃になって見つかったの！？ よく現状がつかめなくて、私
の頭の混乱はますます酷くなる一方だ。その私に畳み掛けるように、
萌が言葉を続けた。

『その人、転勤するんだって。それで別宅をひっくり返していたら
奥さんが偶然見つけたって言ってたよ。どうこう言うつもりはない
けれど、こういうものがあると不愉快だって言ってたし、最後にど
うしても文句言ってやりたかったって言ってた』

「……そう、だったの。……ごめん。迷惑掛けちゃったね……」

『まあ文句を言うだけ言って帰ったって感じだけどね。お父さん
お母さんも気にしてないけど、お姉ちゃん。ちゃんと二人に謝っ
てよね。社会人になってまで両親に迷惑かけちゃダメだよ』

「うん、ごめん。近々一度、家に帰るから。本当にごめん……」

最後の方は申し訳なさでいっぱいになり、喉の奥がひりひり痛く
なった。いい年して親に迷惑掛けて、しかも奥さんにまでこんな時
に知られてしまって。きつとバチが当たったんだ。相手のことをよ
く知らないまま、ただ好きになって付き合って……結果不倫してい
たのだから。

萌からの電話を終え、携帯を閉じた。そして私は、律の顔を見る。

「……聞こえちゃった？」

「嘘、だろ？」

律の声が、強張っている。萌の大きな声が外に漏れ、律の耳にも
届いたのだろうと思っていた。そして彼の顔が、その答えを表して
いた。

「黙ってて、ごめんね」

律に頭を下げたけど、律はそれを受け入れない。そのまま無言を貫き通し、素早く着替えてから荷物をまとめ、出て行こうとした。玄関の扉のノブに手を掛けたまま、一度だけ動きを止める。でも、私の方を振り向くことはなかった。そして律との別れのカウントダウンが、頭の中で鳴り始めた。

「……不倫してたのは過去とはいえ、俺はどうしても受け入れられない」

「うん」

「だから、ごめん」

「うん」

「別れよう、俺たち。少なくとも俺は、無理……」

私の答えを待たずに、律は部屋を去っていく。無情な扉が閉まる音だけが、耳に残っていた。

わかっていた。きっと「別れよう」と言われると思っていた。あれだけ不倫嫌いな律の隣に、過去一度でも不倫したことがある彼女なんて、最初からいはいけなかったんだ。だからこれは、当然の結果。

「……ううっ……っひ……」

声にならない声で、大粒の涙を零す私。手のひらに収まりきらないほどの涙が、さっきまで幸せでいっぱいだったシーツを濡らしていく。律との関係を涙で流してしまうように。

44話 家族の絆

泣き続けたせいで涙も底をついたのか、もう一滴も出てこない。代わりに胸のど真ん中にぽっかりと大きな穴が空いたような気がした。

壁一枚隔てているだけなのに、この世の誰よりも一番遠いところにいるような気がするのには、どうしてだろう。手を伸ばせば、すぐそこに律がいる。でも、彼の周りに私は存在してはいけない。もう、律の過去を刺激するようなことをしたくないから。

「……別れちゃったあ」

ははっと自嘲気味に笑いながら天井を仰ぐ。さっきまで私の隣にいた律は、もういない。その喪失感といったら……。律がいない。この現実を受け入れられる日は、いつ来るの？ 私はそのまま、静かに目を閉じた。

——もう、世界が真っ暗。そんな気がした。

＊＊

真っ暗とはいえ、毎日と同じように過ぎていく。朝起きて、仕事をして、ご飯を食べて。そんな何気ない毎日は、当たり前のように過ぎ去っていく。でも、いつも何かが足りない。職場の人間関係も良好、アパートの住人ともいい関係を築けている。……たった一人を除いて。

頭の片隅には、いつだって律の姿がある。律と別れてからすでに一ヶ月ほどの時間が経ったというのに、未だに私の頭の中からは消えてくれない。

あれから、アパートで時折律とバッタリ出くわしてしまっても、

律は私が見えないのか、ひと言も声をかけてこない。それは私も同様だ。声をかけて無視されるのが怖くて、一瞬目が合ったとしてもすぐに反らしてしまう。そんなギクシャクした関係は、一体いつまで続くのだろう。考えたって答えなんかない。私はもう、こんな毎日に疲れてしまった。

引越そうかな……。そう考えていた。

このアパートはとても居心地が良くて、すぐにその考えは浮かばなかった。でも、こうして別れてからも律の姿を見るのは、とても辛かった。もしかしたら「また付き合おう」と言ってくれるかもしれない。どこかでそんな期待はあったけれど、一ヶ月経った今も言葉ひとつとして掛けてこないのだ。もう、律との関係の修復は、絶望的だ。そう悟った。

季節はすっかり春から梅雨へと変わっていた。毎日じめじめどんよりしていて、鬱陶しいくらい雨が続けている。

今日も雨。仕事帰りの私はビニール傘を開き、ジムを後にした。そしてそのままアパートへは帰らず、駅へと向かう。律と別れてから、とてもじゃないけれど出かける気力など湧かず、今までなあなあにしてきてしまったが、今日こそは実家に帰って両親に謝らなくちゃ。元彼の奥さんが家に乗り込んできたなんて、本当に私は何をしていたのだろう。すっかり片がついたとばかり思っていたので、あんな不測の事態に陥るなんて夢にも思わなかった。気が重い。けれど、私の足は真っ直ぐ駅に向かって進みだした。

電車を乗り継ぎ実家の最寄り駅に着いた頃には、辺りもすっかり暗くなってしまった。仕事でいつも遅い父親の帰りに合わせてやってきたので、丁度良いかもしれない。駅の改札を出てから実家までは徒歩で十分ほど。私はその十分しかからない道のりを、二十分もかけて歩き、ようやく実家の姿を目にしたのだった。

「……ただいま」

家を出てから数年が経った今、もう実家が自分の家じゃないような気がする。長い間過ごしてきたこの家が、まるで他人の家に思えた。

玄関を開けると、背が低い靴箱がある。その上には、綺麗な花が活けられていた。これは義母の趣味が活け花だからだろう。お母さんが家にいた頃は、こんな高価そうな花が活けられていることはなかった。

「おかえりなさい」

義母がキッチンから出てきて、私に微笑む。けれど、その笑顔は今でも、作られたもののような気がして、私はつい苦笑いをしてしまう。靴を脱いで家に上がり、玄関の隣にあるリビングに顔を出した。壁には子供の頃に描いた私と萌の絵や、家族で撮った写真などが飾られており、義母が活けた花もある。少しだけリビングの様子は変わったけれど、懐かしい匂いがした。そのリビングの少し古ぼけたソファーに、お父さんが新聞を読みながらくつろいでいた。

「……久しぶりだな、めぐみ」

「うん、久しぶり」

ようやく新聞から顔を上げた父は、前より少し老けた。白髪も多くなったし、少し太ったような気がする。でも、元気そうだ。久々に父の姿を見て、ようやく実家に帰ってきたような気がした。その時、私を出迎えてくれた義母がキッチンから戻り、父と私の前にお茶を置く。コトリと湯飲みをテーブルに置く音と同時に、私は両親の前で正座をし、勢いよく頭を下げた。

「お父さん、お義母さん。この前はご迷惑をおかけして、申し訳あ

りませんでした……!」

額が床にくっつくほど頭を下げ、二人に向かって謝罪の言葉を述べた。心配をかけてはいけないのに、迷惑をかけてはいけないとわかっていたのに、とんでもない親不孝を私はしてしまったのだ。何回頭を下げて、謝罪しきれない。しかし、そんな私の気持ちとは反対に、お父さんは意外な言葉を私にかけた。

「お前が元気なら、それでいい」

頭を上げてお父さんの顔を見たら、今まで見た事がないくらい穏やかな顔をしている。

どうして？　なんで私を責めないの……？

真っ直ぐに私と向き合う父が、宥めるようにそう言った。でも、今の私には、かえってそれが辛かった。どうせなら大声でガミガミ怒鳴り散らしてくれたほうがいい。ボロクソに怒られて、ズタズタに引き裂かれる方が今の私にはお似合いだ。

「なんで怒らないの!？」　どうせなら……精神崩壊しそうなほど、怒ってくれたほうがいいのに」

床についた指先が、小刻みに震えている。

こんなだらしのない娘を持って、後悔はしていないの？　短大を出てから勝手に家を出ることを決め、正社員にならずアルバイトのま、気ままに生きている私を、家の恥だと思っていたから連絡してこなかったんじゃないの？　出来損ないの娘を持って後悔しているのだと、私は勝手に思っていた。

「お前は、少し無理をすることがある。いつも自分に何かを言い聞かせながら、辛いことも苦しいことも飲み込んできただろう。父さ

んは、お前にそんな思いをさせてしまったことを、いつも後悔していた」

お父さんの言葉に、私は頭を上げた。思いがけないお父さんの告白に、私はただ、耳を傾けていた。

「何でも飲み込んできたお前を、責める理由なんて一つもない。そりゃあ、あの女性が乗り込んできた時は、驚いたけどな」

少し肩を竦めながらおどけてみせる父。その隣で静かに微笑む義母。二人の姿を見て、私の視界が大きく歪んだ。ぼやけてしまって二人の顔が見えないほど、私の目には涙がたまっていたのだ。

「お前の母さんと別れてから、お前は常に父さんのことばかり考えてくれた。本当は母さんに会いたかっただろうに、父さんに気を遣って決して会いたいとは言わなかった。そして新しく今の母さんを迎えた時も、お前は何一つ文句を言わなかった。……きっと父さんが、お前を何も言えないような子に育ててしまったんだな」

「そんなこと……」

「悪い父親だな。だからこそ、今回の騒動のことは責められない。お前の元気な姿を見れた。それで充分だ」

二人ともなんて穏やかな目で、私を見るのだろう。私は、この二人の目を正面からちゃんと見ていたのだろうか。勝手に一人であうだと、家族から敬遠されていると思っていなかっただろうか。……そうか、全部私が勝手に思い込んで、悲劇のヒロインぶっていたのか。こんな時に、家族のあたたかさを初めて知ったような気がした。

「ごめんなさい……お父さん、お義母さん」

「もういい。その代わり、ちゃんとした男性と付き合いなさい」
「……うん」

零れた涙を指で拭いながら、両親の前でようやく笑顔を取り戻す事ができた。

家族という存在が、ただ嬉しくて。こんなにもあたたかいなんて、気付きもしなかった。

一つ呼吸をして、目の前に置かれたお茶に手を伸ばした。お茶はもう温くなっていたけれど、びっくりするほど優しく、それでいて少ししょっぱい味がした。

45話 友哉くんと一緒

「本当に泊まっていけないの？」

玄関先で、義母が心配そうな顔をして、私に優しく言葉をかける。でも、私は首を横に振り、その厚意を断った。

「明日も仕事あるから」

「そう……。でも、いつでも帰ってきてね。待ってるわ」

「ありがとう、お義母さん」

家族のあたたかさに触れ、今までの寂しさが嘘のようになくなった。自分一人だけが辛い思いをしていると思ひ込んで実家に寄り付かなかったのに、今日は長い間のもやもやした気持ちを晴らす事が出来た。きっかけはどうあれ、バラバラのように思えた家族への思いが、今ここで一つになったような気がした。

「それじゃあ、おやすみなさい」

そう言葉を残して義母に背を向け、数歩歩いたところで、もう一度義母の方を向いた。

「あのね、お義母さん。私……」

静かな住宅街で漏らした、小さな小さな私の叫び。その私の叫びに、義母は静かに頷いた。

＊＊

電車を乗り継ぎようやく自分の街に帰ってきた。もうすでに時間は深夜を回っている。

家族との会話を終えた満足感がやけに私を高揚させ、変に目が冴えてしまっていた。このままアパートに帰って眠ろうと思っても、どうやら今日は眠れそうもない。私は駅から近い、あのお店に向かって歩き出した。

「いらっしやいませ」

渋い声が私を迎えてくれた。ここは友哉くんが働くバーだ。とても久しぶりに訪れたような気がするけれど、実際あれからそれほど時間は経っていない。

「めぐみちゃん!? こんな遅くにどうしたの?」

カウンターの奥から顔を出したのは、友哉くんだ。今日も蝶ネクタイがとても決まっている。

「実家の帰りなの。ちょっとだけ呑みたいなあって思っ」

そう。少しだけ酔いたい気分だった。家族との絆を確認して気分は良かったけれど、アパートに帰れば隣の部屋に律がいる。それを意識してしまうと、どうしても苦しくて悲しい気持ちがふつふつと甦ってしまう。こんな夜は、少しでも酔っ払って、気持ちを昂らせておきたい。

入り口付近の傘立てに傘を置き、そのまま真っ直ぐカウンターに腰をおろす。そして目の前に出されたのは、あたたかいおしぼりだ。渋い声のマスターが、ほんの少し微笑んでそのまま手元にあるグラスを磨きだした。顎下の髭が、やたらとセクシーに見えるマスター

は、そのまま私の前を友哉くんに譲った。

「で、どうする？ 何を呑みたいかな？」

「んー……軽めのがいいかなあ。あ、シャンディガフがいいな」

「わかった。シャンディガフね」

シャンディガフとは、ビールをジンジャーエールで割った飲み物で、口当たりが非常に軽くて呑みやすい。しゅわしゅわした喉越しも好きだし、ジンジャーエールでほんのり甘いのもお気に入りだ。

「はい、お待ちせー」

目の前に出された、透き通ったゴールドのシャンディガフ。グラスの中の炭酸の泡が、しゅわしゅわと下から上へと立ち上る。グラスを指先で持ち上げて、くいつと一口喉に流し込むと、喉が嬉しそうにしゅわしゅわぱちぱち鳴っている。

「うーん、おいしい！」

笑みを浮かべながら友哉くんの方を向くが、友哉くんはあまり顔色がよくないようだ。

具合でも悪いのかな？ そう思って声をかけようとしたが、友哉くんが私より先に声を出した。

「……めぐみちゃん、とてもやつれたね。何か、辛いことでもあったの？」

友哉くんの言葉が、私の胸にぐさりと刺さる。何かあったなんて微塵も感じさせないように笑顔を取り繕っていたのに、お見通しだといわんばかりに的確に友哉くんは私を見抜いた。

辛いこと、か。あったよ。大好きなのに別れてしまった。今でも胸の真ん中に、ぽっかりと大きな口を開けているように穴が空いているもの。律の顔を思い出すだけでも涙が零れそうになるけれど、友哉くんの前では泣けない。私の涙を見せられる男性は、たった一人と決めたから。だから泣かない。ぐっと奥歯を噛み締めて無理矢理涙を引っ込めて、心配させないように笑顔を浮かべた。

「やつれちゃった？ やだなあ、かつこわるい。でも心配しないで！ 大したことじゃないの。でも、心配してくれてありがとう」

一気に友哉くんに言った後、目頭まで溢れ出した涙と一緒にシャインディガフを飲み干した。美味しいお酒も、今日はとても苦く感じる。でも、少しだけ。ほんの少しだけど、律を忘れられるような気がする。だから私は、一気にグラスを空けて、もう一杯頼んだ。流れるアルコールが、少しでも気を紛らわしてくれるのなら……そう、今だけでも。

アルコールが良い具合に頭に回ると、目がとろとろと溶けそうなほどの眠さが襲ってきた。

「ほら、めぐみちゃん。もうお酒は終り！ お水飲みなさい」

コトリと目の前に置かれた水が入ったグラスは、友哉くんの優しさ。でも、そんな優しさは、今はいらない。もっともっと、酔って酔って酔っ払って、私の身の回りに起こった出来事を忘れてしまいたかった。

「いらなくいい……お酒のほーがいい」

グラスを目の前からずらし、空になったグラスを掲げた。でもグ

ラスは友哉くんに取り上げられたまま、返ってこない。

「うー……おしゃけ」

呂律の回らない口で、ぶつぶつと呟く酔っ払いの私。きっと友哉くんは鬱陶しいと感じただろう。ごめんね。でも、こうせずにはいられなかったんだ。律と別れてすぐは、悲しさもあったけれどどこかで淡い期待を抱いていられた。でも、一ヶ月も経った今、もう淡い期待を抱き続けるのは無理があった。「別れた」という辛い現実には、私は自身が打ちのめされてしまいうで、こうしてお酒に逃げたのだ。ダメな女だとわかってはいるけれど、正面から現実を受け入れられる余裕が、今はとてもじゃないけどなかった。

「季節も、毎日、みんなくるくる回っているのに。私だけが止まっている……」

ぽつりと独り言を漏らしたまま私はテーブルに突っ伏して、目を閉じた。そしてそのまま、寝息を立てたのだった。

目を覚ましたのは、なぜか自分がゆらゆら揺れているような気がしたから。目を開けると、一番先に見えたのは誰かの肌。これは、首、かな？ 寝ぼけながらしばしばと瞬きすると、今私がいる位置にぎよっとした。ここは、友哉くんの背中。私、おんぶされてる！

「ととと友哉くん！ ごめんね、私！ 歩けるから！」

「お。起きたの？ いいよ別に。少しお兄さんに任せなさい」

はっはっはとさわやかに笑う友哉くんの背中、広くてとてもあったかい。煌く金髪が美しく、隙間から風が通るたびにふわふわと毛先が揺れた。それにしても、お兄さんか。友哉くんが本当のお兄

ちゃんだったら、どんなに心強いかな。底抜けに明るい笑顔を、いつも見せてくれそうだ。

しばらくの間、私は友哉くんの背中に甘えて、そのままおぶさったまま色々考えていた。これから先、私はどうするのか。そして…。

「めぐみちゃん」

考え事をしていたら突然声をかけられ、驚いて体勢を崩しそうになってしまった。もちろん、落っこちたりなんかはしてないけど。

「な、何？」

「あのさ、前に大学でご飯食べた時、めぐみちゃんを一人で残してきちゃったことがあったでしょ？ あの時埋め合わせするって言ったこと、覚えてる？」

ああ、確かにそう言っていた。全然気にしてなかったのに、友哉くんが気にしてわざわざ部屋にまで来てくれたんだっけ。……あの時は、律と私の仲もあまり良くなって、ただ彼を生意気でむかつく年下の男としか思っていなかった。あの頃が、とても遠くに感じる。

「今度、一緒にバイクでどこか行こうか」

それは突然の、デートのお誘い。

驚いてしまったが一瞬声が出なかったけれど、私は友哉くんのお誘いに頷いた。少し、律のことを考える時間を減らしたほうがいい。少し悪いとは思ったけれど、こうして素直に友哉くんのお誘いを受けたのだった。

46話 決別

「送ってくれてありがとう」

「いや、いいよ。それより少しでも眠っておきなよ？」

「うん。それじゃ、おやすみなさい」

ぺこりと頭を下げて、アパートの階段を駆け上がる。バッグから鍵を出し、ガチャガチャとうるさい音を立てながら鍵を開け、乱暴に扉を開いて閉めた。

部屋に入っても中にながらず、玄関扉に寄りかかったまま俯く。そしてそのまま、ずるずると床にへたりこんでしまった。

「……さいってー」

これは、自分に向けた言葉。友哉くんのお誘いに頷いた、自分への蔑みの言葉だ。

いくらなんでも自分が辛いからといって、友哉くんに甘えるのは間違っている。でも、あの優しい笑顔に癒されたいと思ってしまった。だから私は、頷いたのだ。少しでもあの優しさに甘えたいと思ってしまったことを、今、とても後悔している。きっと、一緒にでかけても、私はうまく笑えない。わかっていたけれど今はただ、誰かに側にいてほしい。

心の中に隙間風が通るのを感じるたびに、自分一人だけが辛い思いをしているような気がしてしまう。そんなことはないとわかっているけれど、孤独感でいっぱいになった人間は周りを見て優しく出来る余裕がない。そんなことできるのは、もっと心にゆとりがある人だと私は思う。やっぱり少し、他の人と一緒に話をしたり出かけたりして、見失っている自分を取り戻したほうがいいかもしれない。

一人でいても、この孤独から抜け出せないのだから。

結局、殆ど眠れぬまま出勤し、二日酔いでズキズキと痛む頭を押さえながら仕事をしていた。さっき鎮痛剤を飲んだから、少しは効いてきたかもしれない。強い痛みが少し鈍くなるのを感じながら、仕事終了時間まで必死に笑顔を作っていた。

仕事を終えたのは夜の九時。少し遅い時間だと思いつつ、アパートの自分の部屋へ真っ直ぐ帰らず、そのまま三階にある利人さんの家に足を動かした。

躊躇いっつも押したインターホンに、利人さんは笑顔で迎えてくれる。その笑顔を見て、ホッと胸を撫で下ろした私は、玄関先で利人さんに大事な話をした。これからの、私のことを。

「……それでいいのでしょうか」

「はい、もう決めましたから。利人さんにはお手数をおかけしてしまいましたが」

「私は大丈夫ですよ。でも、くどいようですが、めぐみさんは本当にいいのですか？」

心配そうに私を見つめる、利人さんの真っ直ぐな瞳。心配してくれているのはとても嬉しいけれど、私の決意は揺らがない。声を出すことなく、こくりと頷いて返事をした。

利人さんを無理矢理納得させ、私は部屋に戻った。いつもと同じ部屋の中。でも、お気に入りクッションを手にとると、いつも律がこの上に座っていたのを思い出す。

「お気に入りだって言ったのに」

いつだって私を困らせたり怒らせたり、本当に悪戯ばかりする律。その姿が目には焼きついていて、未だに私を苦しめる。律の残像に苦

しめられて、この部屋では呼吸がしづらい。失恋如きで甘ったれるな、と言われれば確かにそうかもしれない。でも、辛くて仕方ないんだもの。やっと手に入れた幸せが、一瞬で消えてしまう喪失感ばかりでなく切ない。身を切り裂かれるほど辛い。前はこんなに辛くなかったはずなのに、どうして今回はこんなにずるずる引きずってしまふのだろうか。どうして、どうして？ ……答えなんか、わからない。

手を洗いに洗面所に行き、壁に備え付けられている鏡を覗き込む。私の顔、相当酷い。やつれたと友哉くんに言われたことを思い出し、確かにやつれたなあと自分でも納得した。やつれた頬を両手でなでて、肌も荒れていることに気付く。スキンケアも怠るほど、今の私は墮落していた。

「ダメだ。これじゃ、ダメ」

両手でばんっ！ と大きく頬を打ち、自分自身に気合を入れた。進まなければ、いつまでたっても真っ暗な穴の中にいるだけだ。私はこの暗闇から、抜け出さなくてはいけない。まずは、穴の淵に手を掛けることから始めよう。そう、無理をせず一步步進めばいい。そうすればきっと、広い世界に辿り着くから。

「よしっ」

鏡に映る私の瞳に、少しでも気合が入った気がする。こんなにぐじぐじするのは私らしくない。もっと肩の力を抜いて、少しずつ現実を受け入れていけばいい。

自分の言葉で奮い立たせ、私は今日のスキンケアを念入りにした。肌荒れなんて吹き飛ばそう！ 何も与えられなかった肌に、沁み込むように化粧水や乳液、美容液などを塗りこんだ。そして気分が落ち着くように、あたたかいミルクを入れてベッドに入った私は、あ

っという間に眠りについたのであった。

——明日から少しずつでもいいから、自分を取り戻そう。
自分なりに、律との決別を受け入れた。

＊＊

毎日、ほんの少しずつだけれど、自分というものを取り戻している気がする。あれから肌荒れは治り、素直に笑えるようになった。職場の人間関係も良好だし、ジムの会員さんとのやりとりも相変わらずだ。自分の居場所を失ったような気がしていたけれど、ここには確かに「私」を受け入れてくれる場所がある。それで充分だ。

友哉くんのお店に行った日から、何かと彼は私を心配してくれる。もともとの性格がマメなのか、本当によくしてくれるのだ。生活の時間帯がだいぶずれているのでメールが主だけれど、いつも少しだけくすつと笑えるエピソードをメッセージの中に組み込ませてくる。毎日、一通ずつ。それがとても嬉しかった。

しばらく友哉くんとは休みが合わず、仕事が終わってから彼のお店に遊びに行ったりすることが多くなった。お店に行ってお酒を呑んで、いつ頃なら出かけられるかを検討したり、バイクでここに行きたい！なんていう会話を楽しんでいた。お店に通ううちに常連さんたちにも顔を覚えられて、少しずつ人の輪が広がっていく。それも、この店に通う楽しみの一つだ。

「じゃあ、三日後ね。朝、電話するから。起きろよ！ て」

「友哉くんの方が寝てるかもよ？ でも、待ってるね」

新しいカクテルをテーブルに出しながら、二人ででかける日の約束をした。ようやく休みが重なったので、今日はきっちりその日の予定を立てたのだ。

初めてのバイクは、一体どんな感じかな。それが楽しみだ。怖い

かもしれないけど、友哉くんが一緒なら大丈夫。きっと彼の運転は優しいはずだもの。こんなに、私に優しくしてくれるから。

友哉くんと約束を胸に、ほろ酔い気分でお店を出た。

夜風が気持ちよい。火照った頬に少しだけ冷気があたると、ぼんやりとした頭がすつきり目覚めていく。

「楽しみだなあ。……友哉くんと、最初で最後のデート」

後ろで手を組んで、ゆっくりとアパートまでの道のりを歩いて帰った。

47話 海デート

朝からいそいそと身支度を始め、久々にわくわくしている自分がいた。今日は友哉くんとのデートの日だ。バイクに乗るというので、スカートではなくパンツをチョイスした。

「どうしようかな」

クローゼットから取り出した服を見ていたが、ここ最近めっきりショッピングをしていない。手持ちの服もパンツよりスカートの方が多く、選べるのはジーンズくらいだった。

「買物行けばよかったなあ」

ベッドの上に積まれた服の山を見て、溜息を漏らした。いまいちどれもピンとこない。とりあえず今日はバイクデートだったので、ラフな服装を選んだ。

メイクをしたり髪型を整えたりしているうちに、時間はどんどん経っていく。バッグも手で持つものではなく、肩から掛けられるようなものをチョイスした。これならバイクに乗っても問題ないよね？ 問題は、バイクのスピードに私が耐えられるかだ。正直、怖いんだよね……。一つぶるりと身震いをして、あまり考えすぎないように他のことを考えた。

ベッドの上に腰をおろし、体育座りをしながら壁に寄りかかる。そして自分の部屋を、ぐるりと見回した。すっかり自分の色に染まったこの部屋が、私は大好き。でも、それと同時に辛い思い出も沢山詰まっている。辛いものだけ拭き取る事ができれば、どんなにいいか。なんてね。そんなことは、出来ないことくらいわかっている

のに。

そうこうしているうちに、側に置いてある携帯が音を奏でる。もちろん、かけてきたのは友哉くんだ。

『おはよー。まだ寝てた？』

「まさか。もう用意終ったよー」

『そう？ それじゃあ行こうか！ 下までおいで』

「はーい」

友哉くんからのモーニングコールを受け、私は玄関の扉を開けた。外に出ると眩しい太陽の光を浴びた、友哉くんの笑顔が見える。大きく手を振り「おはよー」と、爽やかに私に挨拶をする友哉くんは、いつもよりキラキラしていた。

急いで下まで行くと、友哉くんからヘルメットを手渡された。

「ごめんね、あんまり可愛いじゃなくて。友達とか乗せるときに貸してるやつだから、可愛いの持っていないんだ」

「え、そんなことないよ？ このステッカーとか可愛いもん」

「ホントー？ それ、俺の手作りなんだ」

真っ黒のヘルメットの横に張られているステッカーは、ネコが描かれている。バイクにも同じものが貼られていて、とても可愛らしい。その可愛らしいステッカーを友哉くんが描いたと思うと、描いた本人も可愛く見えてくるから不思議。

手渡されたヘルメットを被り、ピカピカに磨き上げられたバイクに跨る。すると、どこに掴まればいいのかわからず、あたふたと一人で慌てていた。

「俺の腰に手を回してね。なるべくゆっくり走るけど、ちゃんと掴まらないと落っこちるから」

「わ、わかった」

目の前にある友哉くんの腰に、おそろおそろ手を回す。緊張してしまつて、どれくらいの手でしがみつけばいいのかわからないけれど、とりあえず自分の手をぎゅっと握り、友哉くんの背中に頭をくっつけた。

「よしっ、行くよー」

友哉くんの掛け声と同時に、大きなエンジン音が耳に響く。体になんて伝わってくるエンジン音は、私にとって初めての体験。こんなに大きく体に響くものなのか、と驚きとこれからの恐怖を感じさせた。

最初はなかなか慣れなくて怖かったバイクも、友哉くんがゆっくり走ってくれているせいか、だんだん怖くなくなってきた。目を瞑ってしがみ付いたままだった私が、目を開けて景色を見る余裕ができるまでになった。バイクって結構いいかもしれない。梅雨の合間の良い天気の日にはバイクで二人乗り、これはなかなか気持ちがいい。途中で何度か休憩を挟みながら、ひたすらバイクを進ませる友哉くん。目的地は一体どこなのかな。

そうこうしているうちに辿り着いたのは、お決まりの海だった。

「やっぱりこんな天気の日、海がいいでしょー!」

穏やかな波の音や照り返す日の光が、一層清々しさを感ぜさせる。ぐじぐじ悩んでいる今の私には、海という場所がピッタリだ。いつも違う顔を見せる海、真っ直ぐな水平線、生きているような波の音、これが私の悩みを少しずつ取り払ってくれるような気がする。波にさらわれて、一緒に悩みもすべて流れてしまえばいいのに。

海についてからしばらく波際で二人、子供のようにはしゃぎまく

った。水しぶきを頭からかけられて髪も服も少し濡れた。その代わり、私も友哉くんと同じように水をかけ、髪も服も濡らしてしまった。馬鹿みたいにはしゃいだ私達は、ずっと絶え間なく笑みが零れ続ける。律と別れて以来、こんなに笑ったのは初めてだ。良かった……私、まだちゃんと笑える。笑えないと思っていたのに予想以上に楽しく笑えて、私はホッと胸を撫で下ろした。

夢中で遊んでいる間に、いつの間にかお昼をとくに回っていた。私達は近くの岩場に腰を降ろし、途中で休憩を入れた場所で飲み物を買っていたのでそれをゴクゴクと飲む。たくさん遊んだから、すっかり喉が渴いていた。水が喉を通るたびに、喉が喜んでいる。あつという間にペットボトルの半分を飲み干していた。

「ほら、これ！　じゃじゃーん！」

じゃじゃーん！　て。なんか可愛いな。なんて思っていたら、友哉くんがずいっと私の目の前に、サッカーボールほどの大きさのおにぎりを差し出す。本当に自分の顔より大きなおにぎりを出され、驚きのあまり目を見開いた。

「これ、友哉くんが作ったの？」

「そうだよ。あまり凝ったもの作れないし、細々詰めるのは面倒だし。だからおにぎりにして、具を中にいっぱいこんどいた」

「ええ！？」

「梅干と昆布とおかかと……あ、鮭も！　あちこちにごろごろいるからね」

友哉くんの自由奔放で型にはまらない性格が、このおにぎりに凝縮されているようだ。こんな斬新なおにぎりは、生まれて初めて。あまりの斬新さに、思わず笑いが零れた。

「ぷっ！ 友哉くんったら、面白いなあ」

「そう？」

「ふふ……じゃあ、いただきます！」

あーんと大きく口を開き、がぶりとかぶりつく。口いっぱいにご飯を入れて、いろんな具の味が私の味覚を刺激する。どんな味になるのやら、と思っていたけれど、意外に美味しい。口の周りにご飯粒をたくさんつけて、笑いながら二人で食べるおにぎりの味は格別だ。友哉くんの前で、私は気取ることなく自然体でいられる。本当に楽だ。

流石に大きすぎたおにぎりは食べきれず、友哉くんが私の残りを引き受けてくれた。あんなに大きなおにぎりを一つ食べた後なのに、平気な顔して平らげる友哉くん。一体どこに入っていくの？ それにどうして太らないの？ 驚くことばかりだ。

口の中を整えるように水を流し込み、ふうっと大きく息を吐く。そして真っ直ぐ海を見つめて、ここ最近の出来事を少し考えた。なんだかもう、律と別れたことが随分昔のことのような気がするの、はどうしてだろう。風になびく髪を押さえながら、律との数少ない思い出を手繰り寄せると、ひとすじだけ涙が頬を流れていく。あんなに流したのに、涙は枯れることなく私の肌を滑っていく。それでも、涙の量はかなり減ったほうだ。

「……元気、出ない？」

心配そうに覗きこむ友哉くん。私はふるふると横に首を振る。元気が出ないなんて、そんなことない。あんなに笑ったのは久しぶりだし、友哉ちゃんと遊んでいる間は律のことを思い出さなかった。ただ、海を見つめていたら、ちょっとセンチメンタルになってしまっただけ。

「友哉くん、今日はありがとう。凄く元気出たよ」

「めぐみちゃん……」

「友哉くんは、何も訊かないの？」

「え？」

「何があつたのか、訊きたいんでしょ？」

「そんなことないって言いたいところだけど、やっぱり気になってるってのが本音かな」

ちょっとバツが悪そうに肩を竦める友哉くん。気取らず素直に自分の気持ちを言ってくれるのは、変に気を遣われ続けるよりよっぽどいい。私は、そんな友哉くんを見て、自分の話をゆっくり始めた。

48話 吐き出した心

「実は私、律とほんの少しの間、付き合ってたんだ」

「え！？ そうなの？」

「……うん」

やっぱり友哉くんは知らなかったんだ。そりゃそうだよ。だって律と付き合ったなんて言っても、本当に僅かな間。付き合った彼女の数にすら入れてもらえないかもしれないくらい、短い間だもん。それに友哉くんは私達と生活する時間帯が、まるっきり逆転しているから知らなくても当然だ。

「でも、別れちゃった」

「なんで。二人お似合いなのに」

「前にさ、友哉くんがお店のお客さんに殴られちゃった時、アパートの下で三人で話したこと、覚えてる？」

「え？ ああ、覚えてるけど」

「お店のお客さん、不倫だったって言ってたでしょ？ その時、律が不倫している奴なんて気持ち悪いって言ったよね」

「ああ……そういやかなり嫌そうに言ってたかも」

「私ね、律と付き合う前、不倫してたんだ」

その瞬間、友哉くんが言葉を失ってしまった。これで友哉くんも、私のこと幻滅するよね……と思い俯いた私。でも、頭上に降ってきた言葉は、意外なものだった。

「まあ、人それぞれ事情があるだろうし、良いこととは言わないけどね。それにしてもめぐみちゃんと不倫ってのがどうしても俺の中では結びつかないよ。もしかして、何か事情があったんじゃない？」

まさかこんな風に切り返されるとは、思いもしなかった。普通だったら「そんなことしちゃダメだ」と言われるまでなのに、「事情があったんじゃない？」なんて訊かれるなんて。元彼が既婚者だと知らずに付き合いました、なんて誰にも言った事がなかったのに、こんな風に優しく訊かれてしまった私は、ついうっかりそのことを話してしまった。友哉くんの優しい瞳と問い掛けに、導かれるようにすらすらと言葉を紡ぐ。私だって被害者だ！ と本当は声高に言いたかったけれど、結果として不倫してきたことには違いない。だからずっと、誰にも言えないまま自分の心に閉じ込めていたのだ。でも、それがついに決壊してしまった。

「そっか。そういうこと」

ふうっと息を吐きながら、友哉くんが私の背中をそつとなでる。自分の胸にたまった膿をすべて吐き出すように、呼吸すらも忘れて言葉を続けた。言いたかったことを吐き出し終わった時には私の呼吸も荒くなり、肩が上下するほどだった。

「少しは、楽になれたかな？」

「……うん。聞いてくれてありがとう」

「それはいいんだけど、このことは律くんには？」

「律には、言っていないの。だって、結果として不倫していたのは事実だし、それを言ったところで律にとって私は、不倫していた女にすぎないから」

悲しいけれど、過去は覆せない。もっとちゃんと彼のことを知っていたら、色々変わっていたかもしれない。でも、社内の人間にも内緒だったし、私と会うときはいつも左手の指輪を外していた。初めて彼の指輪を目にしたのは、すでに別れてからだった。

仮に、律にこのことを言ったとしたら、彼は私をまた隣に置いてくれるのだろうか？ いや、きっと気まずい思いが膨れ上がるだけだ。私を見るたびに、自分の過去のトラウマに苛まれ続けるのだと思う。母親に捨てられたという思いが強くと律にこびりついていて、彼がそこから抜け出さない限り、私との関係が復活する可能性は、限りなくゼロに近いだろう。だから私には、どうにもできない。これ以上、苦しめるようなことをしたくない。それが私の本音だった。友哉くんは律がどうしてもしてそこまで不倫を拒絶するのか、わからないだろう。でも、その理由を私の口から話すのは、やっぱり何か違うし、できない。だから私は、この話をここで断つように、友哉くんに笑顔を見せた。

「さて！ 友哉くん。そろそろ帰ろう！ 結構いい時間になってきたし」

「……そうだね」

私の気持ちを察してくれたのか、微妙な笑みを浮かべてたけれどちゃんと同意してくれた。彼に話を聞いてもらえて、本当に気持ちが楽になったのは確かだ。友哉くんには、感謝してもきれないほど。

帰りは休憩も入れずに、真っ直ぐアパートに向かって走り抜けていく。傾いた太陽を見つめながら、律のことを考えていた。たくさんとはいえないけれど、彼との思い出はたくさん覚えている。日記帳のように細かく覚えていられるほど、律との思い出は大切で、それでいて苦しい。いつかこの苦しみも、忘れられる日が来るのだろうか。少なくとも今の私には、次の恋を迎えることは考えられなかった。

アパート前に辿り着いたのは、夜七時を回った頃だった。辺りはすっかり暗くなり、帰宅する人がばらばらと道を歩く姿を、多く見

かけた。

「楽しかったね」

ヘルメットを脱いでそれを手渡しながら友哉くんに言うと、少し困ったような表情を一瞬見せたが、すぐに笑顔を浮かべて頷いてくれる。この優しさに、私がどれほど救われたか。

友哉くんにお礼を言って、その場を去ろうと後ろを向いた。すると後ろから友哉くんの声がかかり、私は彼の方を再び振り向く。

「あのね、辛い事があったらいつでもいいから俺に話して。いつでも『お兄ちゃん』役は引き受けるから」

本当のお兄ちゃんなんてどんな感じかわからないけれど、私にとって友哉くんは本当のお兄ちゃんのようなようだ。こうやって親身に話を聞いてくれたり、励ましてくれたり。何より、眩しい笑顔をみせてくれる。頼もしいお兄ちゃんだ。

「うん。ありがとう、友哉兄ちゃん」

その響きが、ちょっとだけくすぐったい。でも、嬉しい。こんなお兄ちゃん、理想だよ。もっともっと友哉くんと楽しい時間を過ごしたいけれど、それももう、おしまい。私は大きく頭を下げて、心を込めてお礼をもう一度言った。

「本当に、ありがとう」

そしてそのまま、階段を駆け上がる。階段を駆け上がるとすぐに律の部屋の前に辿り着き、そこを駆け足で自分の部屋の前まで抜けていく。一度下を見下ろして、まだ私を見送ってくれている友哉く

んに、小さく手を振ってから扉を開けた。

扉を閉めてからゆっくり息を吸い、大きく吐き出す。それでもう、私の楽しい生活は終わりを迎えるのだと、自分に言い聞かせて部屋の明かりを点けたのだった。

48話 吐き出した心（後書き）

完結分まで予約投稿しました。
今月末31日に完結します。

49話 さようなら

友哉くんと楽しい時間を過ごした後、私は部屋の掃除に精を出した。今までこびりついた汚れを落とすように、隅から隅まで綺麗に掃除をする。ちよつとの間しかここで過ごしていないのに、雑巾が黒くなるくらい汚れている。

「わちゃー、これは酷いわ」

バケツの水で雑巾をゆすぎ、再びきつく絞って床を拭く。

もう夜遅いので大きな掃除は出来ないけれど、それでも見違えるほど綺麗になっていくのを見て、私は満足していた。部屋の隅に積まれた荷物は、引越してから荷解きをしないままだ。それを見て私は、呆れたように溜息を吐く。

こうして掃除をしながら夜を過ごしていると、部屋にチャイムが鳴り響く。一旦雑巾を置き掃除していた手を止めると、私は玄関の扉を開けた。そこにいたのは、利人さんだ。

「今、よろしいですか？」

「あ、はい。ごめんなさい、ちよつと汚れてますけど……どうぞ？」

「では、失礼します」

今日も和服姿の利人さんは、いつもと変わらぬ笑みを浮かべながら私を訪ねてきた。テレビの前にあるローテーブルの前に正座した利人さんが、私の部屋を見て少し寂しそうな顔をする。そんな利人さんの前に、私は麦茶を差し出し、自分も床に正座をした。

「今日は、明日のことでおうかがいに参りました」

「……はい」

「やはり決意は変わりませんか？」

「すみません」

頭を少し下げると、利人さんの溜息が聞こえた。

彼には無理をお願いしている。でも、これがきつと一番いいのだ。面倒をかけることはわかっているけれど、きつとこれでいい。

「利人さんには、面倒なことをお願いしてしまつて申し訳ないです」
「そんなこと。でも、寂しいです」

その台詞、律に言われたかった。でも、律には何も話していない。話なんてきつと出来ないから、それなら何も言わないほうがいい。利人さんには、沢山助けられた。最後の最後まで面倒をかけて、申し訳ない気持ちと感謝の気持ちでいっぱいだ。もう、これ以上は彼に負担をかけることはしたくない。だから幕引きは、自分でしよう。そう決意していた。

「明日、律には手紙を残していきます」

「直接渡すのですか？」

「……いえ。ポストに投函していきます」

直接、律の顔を見るのは怖い。きつと彼の目は、私を壊してしまふ。

お互いの想いが通じ合った時のような優しい瞳には、きつともう出会えない。彼の中で私はもう、思い出になっているかもしれない。いや、思い出にすらしてもらえないかもしれない。だから彼の言葉を聞くのが怖くて、手紙という逃げ道を自分で作った。

結局、私は臆病なんだ。それはずっと変わらない。幼い頃から自分を偽ってきたから、今もこうして逃げてしまふ。強い口調で話し

きっぱりと言い切る私は、臆病な自分の上に重ねた、ただの脆い仮面だった。弱さを全部曝け出したら、きっと人が離れていくと、そう思っていた。いや、それは今でも変わらない。臆病な自分から、どうやったら抜け出せるのか考えたけど、その方法は今でも見つからない。

「めぐみさん。念を押しますが、本当にいいんですか？」

「利人さん……」

彼の目は真剣だ。このままでいいのか、律と別れてそのまま話さないままでいいのか、そう訴えかける瞳は力強く、負けてしまいそう。でも、怖い。蔑むような瞳に出会うのは、怖くてたまらない。

「ごめんなさい。私は……逃げます」

最後は上手く言えなかったかもしれない。吐き気がする自分の弱さに、どうしようもない苛立ちを感じていた。馬鹿なことをいっぱい言えたはずなのに、今はそれすらできないのだ。俯いたまま利人さんの言葉に応えると、彼はその場から立ち上がり玄関へと向かう。

「めぐみさんの気持ちが聞けたので、私はこれで」

「はい」

玄関で草履を履き、扉に手をかけた利人さんが、もう一度振り返り私に話しかける。

「いいですか？ 後悔はしてはいけません。もしも、間違ったかもしれないと思ったら、すぐに引き返してください。道は必ずしも、一つではないのです。あなたの前には、沢山の道があるはずです。くれぐれも、あなたの進むべき道が一本だと思わないでください」

その言葉に、私は頷く事ができなかった。正直よくわからなかったから。

利人さんは最後にこの言葉を残して、私の部屋から出て行った。パタンと静かに閉じる扉の音を聞きながら、彼の言葉を繰り返す。

「道は、一つじゃない」

それは、すぐには理解できなかった。だって、今の私には進むべき道すらみつかっていないのに。逃げ道が一つだけ、用意されているだけだから。

利人さんの言葉を何度も頭で繰り返しながら、その日は眠りについた。いつかその言葉の意味がわかるといいな。

＊＊

翌朝、昨日のように天気も良く、お洗濯日和の快晴だ。清々しい空気を窓から入れて、部屋の換気をしながら、私は身支度をのろのろと進める。そしてローテーブルに向かって座り、一通の手紙を書いた。直前まで書けなかった手紙は、律宛のもの。今は自分の素直な気持ちを書いて、それを彼に届けたかった。ありったけの『ありがとう』を、この手紙に込めて。

書きあがった手紙を便箋に入れ、荷物を手に立ち上がった。くると部屋を見回してから玄関に向かい靴を履く。そして扉を大きく開いた。降り注ぐような朝陽が、私の門出を見守ってくれているような気がする。少し目を閉じてから少しだけ息を吐き、前を真っ直ぐ見据えたまま私の足は歩き出す。隣の律の部屋の扉に備え付けられたポストに、ゆっくり手紙を投函した。少し躊躇いはあったけれど、彼に私の思いが届けばいい。そんなかすかな願いを持ち、ゆっくりと入れたのだ。

アパートの下まで降りてから、もう一度振り返る。今も開かない彼の扉を見つめ、頭を下げた。

「ありがとう、律。そして、さようなら……」

私はこの日、利人さんにだけ打ち明けたまま、アパートから去っていった。

49話 さようなら（後書き）

ラスト1話になりました。

明日の更新で完結になります。もう少し長くなるかと思ったのですが、ちゃんと50話におさまりました。

では。最後までどうぞお付き合いくださいませ。

50話　くるくる

アパートを出てから私は実家に戻ってきた。あの日実家に戻り家族との溝をしっかり埋めたとき、義母に尋ねたのだ。

『私、この家に戻ってきてもいい？』と。義母の答えは、「勿論」とのありがたいお言葉を含んだ頷きを一つ貰った。だから私は、彼女の言葉に甘んじたのだ。

実家に戻り三日経った頃、萌が少しだけ不満を口にする。でもそれは、本心ではないことくらい、すぐにわかった。

「もう、お姉ちゃんが戻ってから、部屋が狭い狭い」

「ごめんね、萌」

「……まあいいんだけどさあ」

私の部屋だった場所は、すっかり荷物で埋まってしまっていた。だから今は、萌と一緒に部屋で過ごしている。仕事は一応続けているけれど、この家からは少し遠い。なので、会社には辞める事を告げ、辞めるまでの一ヶ月はしっかり働くことにしたのだ。まあ、遠いので不便と言えば不便だけど、今は新しい仕事を見つける気力がまったくといいほど湧かない。

アパートは利人さんに頼んで、荷物を送ってもらうことにしている。けれど、まだ荷物は届かない。利人さんにも都合はあるだろうから、私は何も考えずに毎日暇な時間を過ごしていた。

暇というのは、どうしてこうも眠くなるのか。暇さえあれば眠っている。眠れば、律のことを考えずに済むから。もう、忘れなくちゃ。そう思いながらも、まだ毎日律のことを考えては、胸を痛める毎日が続いていた。

「お姉ちゃん、新しい恋をしよう」

その晩、萌は唐突に私に切り出す。萌にはちゃんと律のことを話した。彼女も律のことが好きだと言っていたので言うのに勇気は必要だったけれど、打ち明けたときの彼女の言葉は実にあっけらかんとしたものだった。

「そうなんだ」これだけ。拍子抜けしてしまった私は、萌におそろおそろ聞いてみた。

「萌は、律のこと好きだったよね？」

「んー、好きだけど……彼氏にすると疲れそう」

なんという言い草。律は意地悪だけど優しいもん！ と、まだ律を擁護する言葉を口にすることができるくらい、まだ私は彼を忘れられなかった。萌は律をいいな、と思っではいたけれど、その程度の気持ちだと私に打ち明けた。

「だって、色んな人に出会ったもん。たった一人だけに好きな人しぼるなんて出来ないもん。好き！ て思ったら一直線に向かってくよ、私」

そうだったね。萌はそういう子だった。ある意味、彼女の行動派な部分は羨ましいところがある。臆病な自分とは対照的な魅力溢れる妹に、少なからず私は嫉妬していたところがあつた。今でもそんな萌が、いつも輝いているようで羨ましい。萌はいつだって真っ直ぐなのに、私が捻くれていたせいでそれすらも見落としていたのかもしれない。もっとちゃんと自分を好きにならないと、この先誰も好きになれないような気がする。

「そうだね。私も萌を見習わなくちゃ」

「そうそう！ 頑張ろうよ、お姉ちゃん」

今この瞬間、初めて妹と姉妹になれたような気がした。

＊＊

萌の言葉が身に沁みて、私は確実に前に進み始めていた。今まで見ることも拒んでいた求人誌などに目を通すようになり、何か資格を取得しようと就職に役立つものを漁っていた。この先も実家でこのまま世話になるのも悪くは無いけれど、やっぱりもう自立するべき年齢になっている。とにかく、一人でもやっていけるような環境を整えなくては、そう思っていた。でも、実際は何をしたらいいのかよくわからず、これといって得意としているものもない。本当に一からのスタートが、今始まった。

雑誌をぺらぺらと捲りながら、何か良い仕事はないかと探しながら、ふと思う事がある。それは、アパートを出て行くときに投函した、律宛の手紙のことだ。ちゃんと彼に、私の気持ち伝わったのだろうか。それだけが心残りだ。携帯の待ち受けは相変わらず律の笑顔の画像がある。けれど、いつまでたってもその待ち受けを変更することが出来なかった。

携帯を見つめ胸に抱きながらベッドに転がると、ふつふつと会いたい気持ちが湧いてくる。

——元気かな……律。今頃何してるのかな。……会いたいなあ。

ぎゅっと握り締めた携帯。私の気持ちかどうか、彼に届いてますように。それだけを願いながら時間が過ぎていった。

手紙にはこう書いた。

『律がとても大好きで、毎日が楽しくて楽しくて仕方がなかった。律も私を想ってくれていたのに、裏切ってしまったこと、とても申し訳なく思っています。今までありがとう。そしてさようなら。律のことは、いつまでも忘れない』

誰かと幸せになって、と書こうと思ったけれど、それだけは書けなかったのだ。だってそれは、私の本心じゃないから。本当は律が今でも大好きだし、その彼の隣に他の女がいて笑い合っている姿なんて望んでいない。だからどうしても、書けなかった。律の幸せを望むなら書くべきなのかもしれないなかったのに、最後の最後で私はその言葉を綴る事ができないまま。それは私の小さな小さなわがままだった。

恋愛ってどうしてこんなに難しいんだろう。気がついたら好きになっただけで、色々なことを知るたびに震えるほどの喜びを感じていた。彼の言葉に一喜一憂しながらも、毎日が楽しくて……その気持ちちは、今どこに行ってしまったのか。大きく溜息を吐きながら、再び携帯を見ると、変わらない律の笑顔がそこにある。どんなに手を伸ばしても届かない、眩しいほどの笑顔を浮かべている彼に、今は会いたくてどうしようもない。そんな時だった。

「え!?! な、何……? どういうこと?」

ベッドの上で横になり目を閉じていた私がゆっくり目を開いたら、目の前に律が立っていた。相変わらず眼鏡が下がるのか、ブリッジを指で押し上げながら私を真っ直ぐ見下ろしている。慌ててベッドから起き上がり、律を見つめたまま体勢を整えると、律の名前を呼ぶ前に彼にきつく抱きしめられていた。

「ごめん。何度謝っても許してくれなんて言わない。でも、謝らせてくれ。ごめん、本当にごめん」

強い力で抱きしめられて頭はパニック寸前。でも、この懐かしい律の匂いが私を現実へと呼び戻す。何度も耳元で謝る律の言葉に、私は涙が滲んだ。

「律だあ……律、律」

何度も繰り返して呼んでしまう彼の名前。呼ぶたびに彼の手が私の頭をくしゃりとなでる。触れたくても届かないと諦めていたのに、今はこんなに間近にあるなんて、まるで夢でも見ているようだ。

「律、ごめんなさい。律を苦しめてごめんなさい。私が臆病で過去のことを言えなかったから、いっぱい律を傷つけてごめんなさい……ごめんなさい」

涙で声が入擦って、私の声が彼にちゃんと届いたのかわからない。でも、声で返事をすることはなかったけれど、代わりにさらにきつく抱きしめられた。

「悪いのは俺。臆病なのも俺。自分の過去から抜け出せなくて、アスタを傷つけた。だからどうしても自分と向き合ってからじゃないと迎えに来れなくて、こんなに時間が経って……どんどん不安になって、怖かった」

律は、私と同じことを思っていた。それだけで嬉しさが込み上げる。私を抱きしめながら律が言葉が続け、その間ずっと、律の体は震えていた。最後に言った「不安になって、怖かった」とは、私と離れていたから？ 律も、そう思ってくれていたの？ 胸の奥深くに沈めた関係の修復願望。それが一気に流れ出し、私の口は慌しく言葉を発していた。

「律と一緒にいたいよ。いっぱいいっぱい触れ合って、喧嘩もして、たくさん笑いたいよ」

私の願望はこれだけ。別に結婚したいとか、豪華な食事に連れて

って欲しいだとか、一切考えていない。ただ、大好きな律の隣で笑っていただけなの。自分の望みを一気に律に伝えたら、嬉しさと悲しさが入り混じった涙が流れ、ついでにちよつとだけ鼻水も出た。体面を繕っていられないくらい、私は必死に律に伝えようと言葉を紡ぐ。でも、喉の奥で次の言葉が引つかかってしまい、うまく出てこなかった。いっぱい話したいことはあったのに、律の顔を見たら全部わからなくなった。でも、一番伝えたい肝心の言葉だけは、まだ胸にいる。それをちゃんと伝えなくちゃ……そう思い、涙でぐしゃぐしゃのみつともない顔を律に向け、彼の瞳から目を反らさずに大切に言葉を口にした。

「律が好き。忘れることができないくらい、律が好き。好き、好き、好き……」

何回言っても伝え足りない。彼の心に、私の言葉は響いたのだろうか。その答えは、彼が私を抱きしめ、唇を塞ぐことでわかった。熱く深い、愛を感じる唇は、私のすべてを焦がしてしまいそうなほど、激しくて優しい。呼吸を忘れるほど没頭したキスは、幸せの味がした。

＊＊

「重くない？ 私持つよ」

「これくらい、どうってことない。俺、男だもん」

律と手を繋いで歩く私。彼が私の荷物を手に持ち、反対側の手は私の手を握ってくれている。

あれから私と律は私の両親を説得し、元のアパートへと戻ることになった。家族はみんな「後悔しないように」と口を揃えて、私を快く見送ってくれた。代わりに、時々ちゃんと顔を見せることを条

件に出したが。そして律の話を聞くとところによると、私のアパートの荷物はそのままにするように利人さんに言っているらしい。長い間送られてこなかった私の荷物はどうなったのかな、と思っていたけれど、そんなことになっていたなんて。利人さんは笑顔で快諾し、引越し業者に断りを入れてくれた上に部屋の空気の入れ換えなどもしてくれたりしたい。嬉しいやら申し訳ないやら……今度ちゃんとお礼をしなくちゃ。

帰り道、律はなんだかもごもごと言いつつ辛そうにしていたが、蚊の鳴くような声で私にポツリと呟いた。

「そういや、友哉さんと二人で出かけたって？」

「え？ あ、うん。バイクで海に連れてってもらったよ」

「バイクって、あんなに密着するやつで？」

「まあ……否定はしないけど」

すると律は唇を尖らせて少しだけ不機嫌なオーラを漂わせた後、小さな声で嫉妬心をあらわにした。

「……俺以外の男と、くつつくなよ。なっ」

真っ赤に顔を染め、照れ隠しのように眼鏡のブリッジを押し上げる。その仕草がなんとも言えず可愛くて、それでいて律の独占欲丸出しな言葉が嬉しくて、繋いだ手に力を込めた。

「うん。気をつけます！」

「よし」

満足そうに頷くと、辺りをきょろきょろと見回してから私の頬に、小さなキスを一つ落とした。自分からキスをしたのに突然カーッと赤くなり、ちょっと挙動不審になる律が可愛い。

正直、こんなに満たされる思いはもう、一生縁がないと思っていた。不倫と知ったあの時から、私は自分のしたことを後ろめたく感じていて、幸せを掴むことは二度と出来ないと覚悟していたのだ。もう、律とは一生会うことはない。二度と隣を歩けない。そう思っ
て実家に逃げた。それらを振り返ってみると、アパートから出て行くときに言ってくれた利人さんの言葉を思い出す。

『道はひとつじゃない』

逃げ道しか用意されていないと思っていた私に、こんなに素敵な道が用意されていたなんて夢にも思わなかった。そして意地を張って律の隣にいることを拒んでいたら、それこそ後悔するところだっただろう。これから先、律との関係がうまくいくかいかないか、それはまだわからない。でも、確かに『後悔』はしていない。自分の気持ちに素直になれたから、決して今日選んだ道を後悔することはないと思う。

季節はくるくる回り、私の生活も目まぐるしいほどくるくる回った。辛いことも巡ってくるけれど、止まるよりよっぽどいい。

これから私は自分に素直になり、相手に優しくなろう。律が言ってくれたように私はくるくる表情を変えて、自分の気持ちを全面に押し出そう。あ、もちろん、臨機応変に。ね。

雄大なオレンジの夕日に向かって歩く私達の影が、仲良さそうに寄り添っている。これから、ずっとずっと仲良くしていきたい。

自分の場所を見つけて、自分の存在意義を確認して、今はただただ幸福感で満たされている。そっと胸に手を置き、とくとくと嬉しそうに高鳴る鼓動を感じながら、幸せに浸っていた。

やがて見えてきたアパートには、知っている顔が全員そろって私を迎えてくれた。大きく手を振り私を迎えてくれる皆があたたかくて、嬉しくて。そしてちょっとだけ恥ずかしかった。短期間の家出から帰還したような気分だ。けれど、それとは裏腹に、私の気持ち

は晴れやかだった。

手を振ってくれているみんなに向かって、私も大きく手を振る。
そして彼らの顔を見て大きな声で挨拶をした。

「ただいま!」

帰ってきました。私の場所へ。

50話　くるくる（後書き）

完結までお付き合いくださった皆様、どうもお疲れ様です。そしてありがとうございます！

その後など、番外編の予定はございません。

彼らの未来は、どうぞご自由に想像くださいませ。

3月末からのお付き合い、ありがとうございました！

2011年5月31日　こたろー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146s/>

くるくる

2011年5月31日00時37分発行